

565
127



2

0010676-000

565-127

明治史実外交秘話

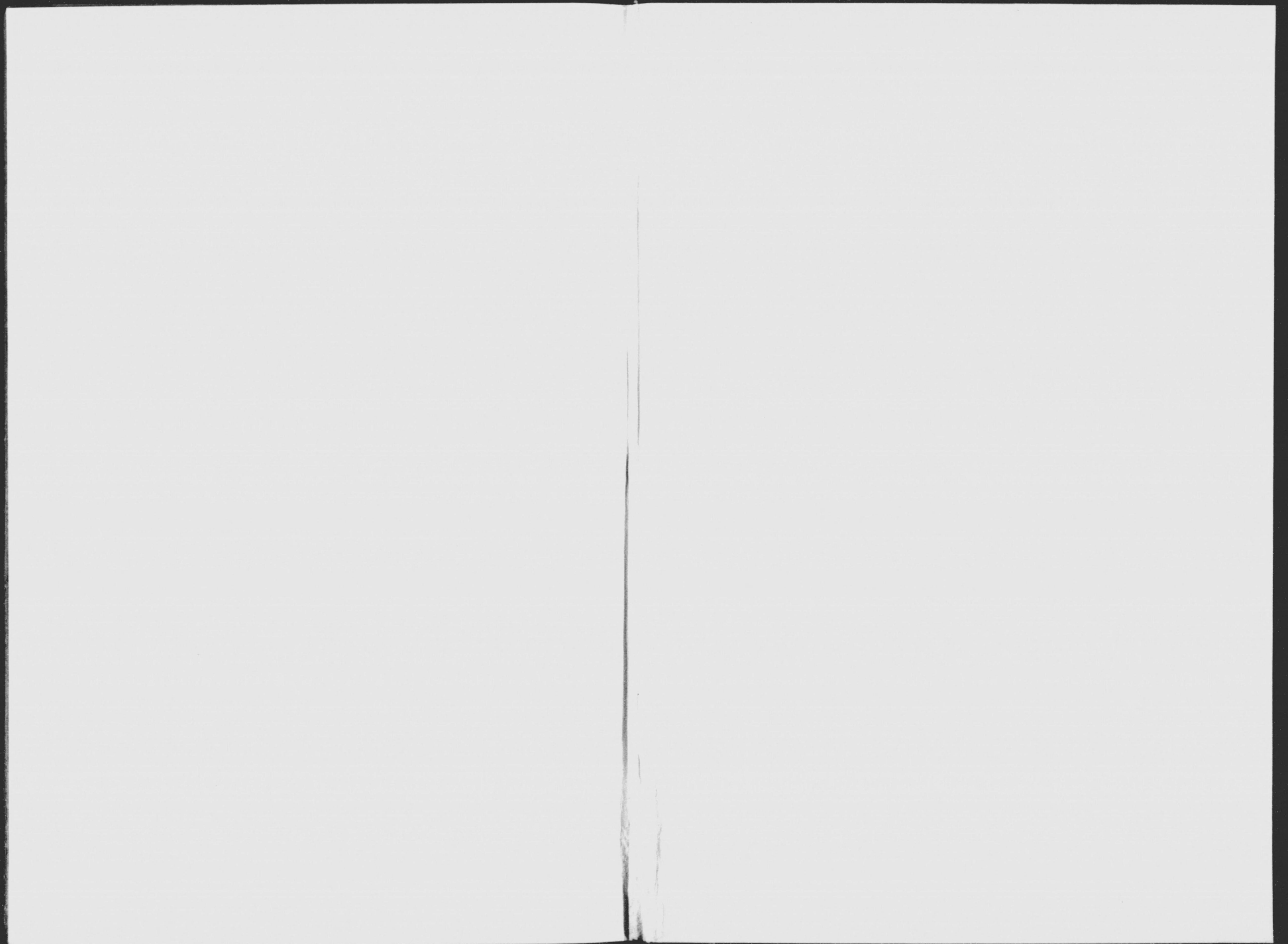
桜雲閣主人・著

中外商業新報社

昭和2

ABJ

この著作物は、著作権者不明のため、著作権
第67条の規定に基づき、平成12年3月2
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するもの



128W-77



明治
史實

外交秘話

櫻雲閣主人著

中外商業新報社



櫻雲閣主人



懸雲閣主人



公齋伊藤博文



Bronberg





李鴻章



丁巳

李鴻章

はしがき

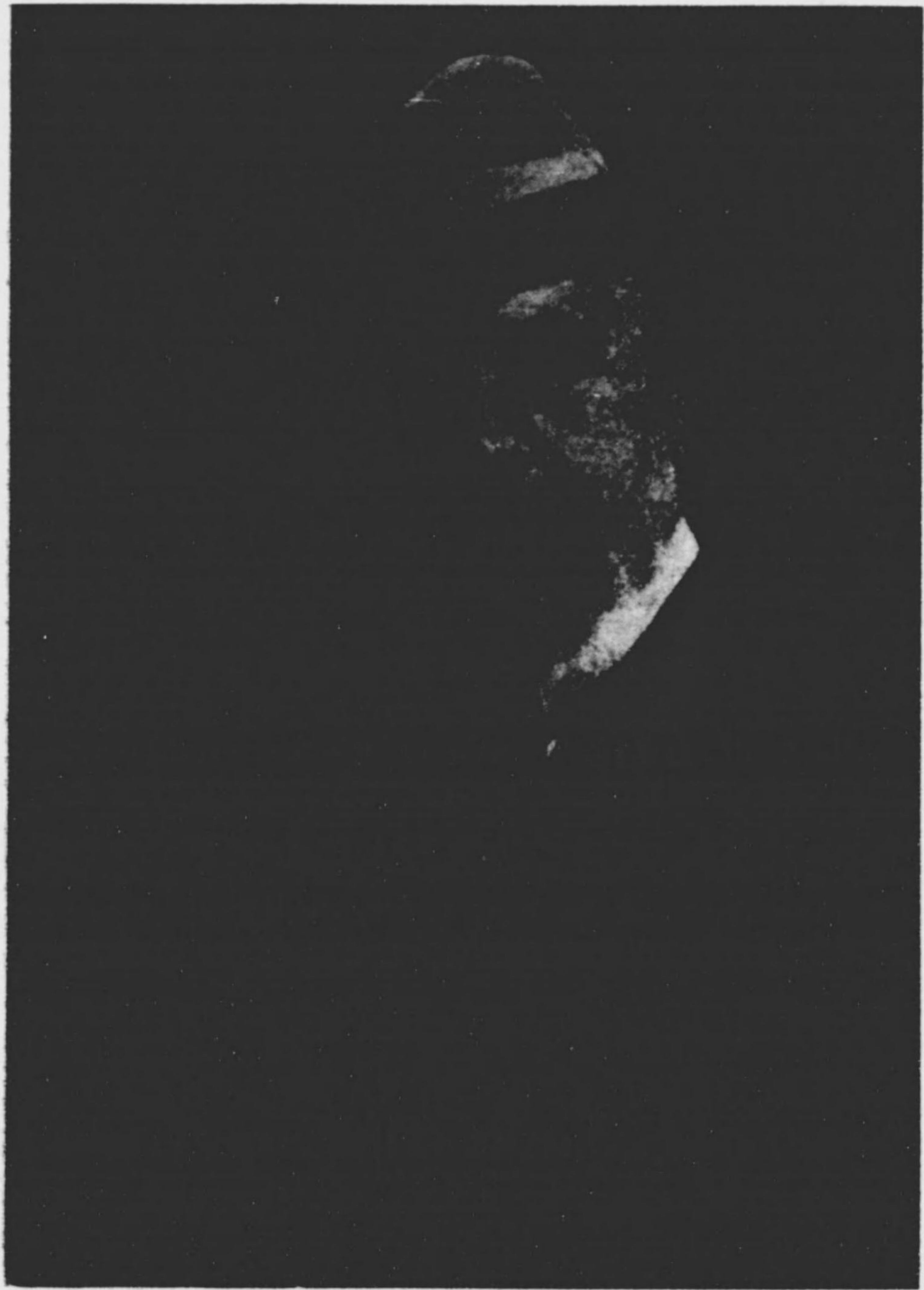
たしか去年の夏の末であつたらう、主人は不圖頼みがあるとして中外商業新報の社長に帝國ホテルへ招かれた。

「頼みといふは外でもない、夕刊の讀物としておもしろくてためになるものを一ツ書いてもらひたいのです。」

「こりや餘りにむづかしい御注文！ おもしろいものはためにならず、ためになるものはおもしろくないと、大抵相場が極つてゐる。それにおもしろく書くには、事實を枉げて虚飾を加へて讀者の興味を唆ることにせにやならぬ。人一倍愚直で潔癖な主人は、そんな藝當のできる柄ぢやアありません。」

「なにも事實を枉げるにも及ぶまい。ソラよく事實は小説よりも奇なりといふぢやありませんか。今餘り世間に知れてゐない外交祕話を事實有りの儘に書いたらどうです。それで屹度おもしろくてためになるものができますよ。」

それだけの仕事なら、主人にも多少の自信がないでもない。そもく主人は外交界の繽紛たる



Count Witte

はしがき

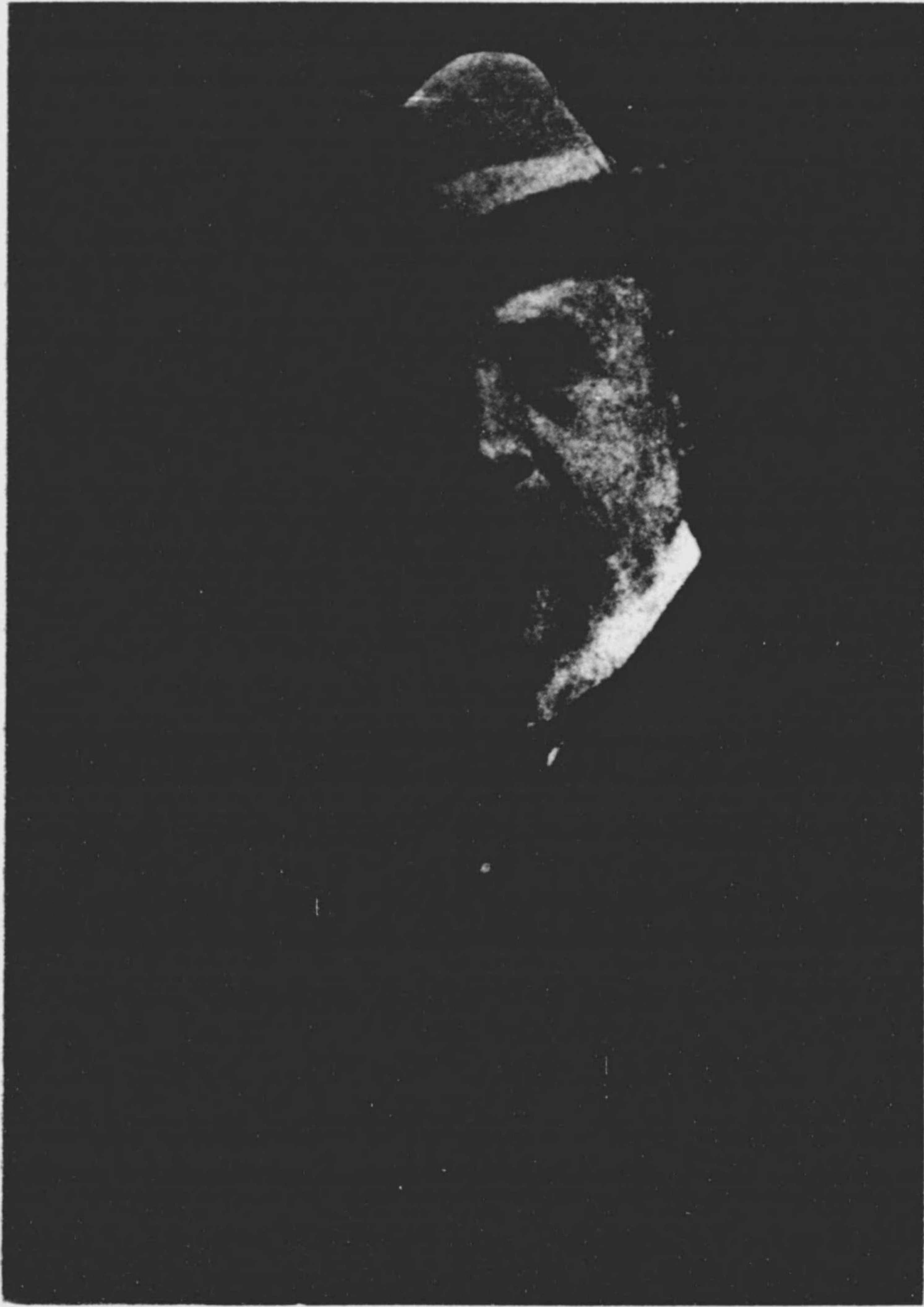
たしか去年の夏の末であつたらう、主人は不圖頼みがあるとして中外商業新報の社長に帝國ホテルへ招かれた。

「頼みといふは外でもない、夕刊の讀物としておもしろくてためになるものを一ツ書いてもらひたいのです。」

「こりや餘りにむづかしい御注文！ おもしろいものはためにならず、ためになるものはおもしろくないと、大抵相場が極つてゐる。それにおもしろく書くには、事實を枉げて虚飾を加へて讀者の興味を唆ることにせにやならぬ。人一倍愚直で潔癖な主人は、そんな藝當のできる柄ぢやアありません。」

「なにも事實を枉げるにも及ぶまい。ソラよく事實は小説よりも奇なりといふぢやありませんか。今餘り世間に知れてゐない外交祕話を事實有りの儘に書いたらどうです。それで屹度おもしろくてためになるものができますよ。」

それだけの仕事なら、主人にも多少の自信がないでもない。そもく主人は外交界の繽紛たる



Count Witte

心波情瀾に揉まれること前後二十有餘載、此の永い月日の間に、外相たりし陸奥、大隈、青木、加藤、林、小村等に親炙する機会を得たし、首相たりし伊藤、山縣、西園寺、桂、原、寺内等の眷顧を受けたこともあるので、彼等の實験した苦心談やら自慢話やらをその口づから聞かされた度び毎に、また外交上の公文、私信、報告などを見せられたり時に或は書かせられたりした度び毎に、主人は宛かも彼の好事家が珍奇な骨董でも漁るやうな気分で、その全部又は少くとも主要な部分を克明に筆記したり寫取つたりした。(尤も蹇々録とか條約改正記事とか日韓併合願末とかいふやうな印刷になつたものは、勿論その儘手に入れて保存した。)それが積り積つて、一年平均一卷づゝとしても二十巻以上になつてゐた。

外國の刊行物中では、前米國々務長官で李鴻章の外交顧問たりしジョン・フォースターの外交回顧録、三國干涉の張本人獨帝ウイヘルム二世の自叙傳、露國首相でポーツマス談判の全權委員たりしウイッテ伯の自叙傳、最初の露軍總司令官クロバトキン大將の自叙傳、日本で公表禁止となつたに拘らずロンドンで全部出版された林伯の外交日誌、米國大統領ルーズヴェルトの書翰集などが、彼我の間に於ける機微の消息を照し合せる爲めに頗る有效な參考となつた。

主人はかういふ材料を種にして、毎日匆卒に筆を走らしたのであるが、爾來時を費すこと約半

年、章を重ねること百七十五回に及んだ。それを訂正増補したものが、即ち此の小冊子である。

却説出來上つた代物の價值はどうあらうか。餘り口の善くない下村君海南が、此の書を批判した可なり長い序文が次に掲げてあるし、それに謹厚そのもの、やうな徳川公靜岳の題言と、天竺海潤物に凝滞せざる後藤子棲霞の讀後感と、當世第一の文豪徳富君蘇峰の書翰とが續いて載つてゐる。その上自畫自讃でもあるまいから、此の書の實質に就いては、總べて看客の品階に任せることにして、筆を擱く。

丁卯彌生の中葉櫻雲閣の病床にて

著 者

外交秘話序

櫻雲閣主人と筆者とは華府の軍縮會議の折に同じプレス・メンの仲間として、時卓を共にしたのが關の山で交際は極めて淺い。

その交りの淺い者に丸で畠違ひの外交を舞臺とした本著へ序文を書けと、頼む者も頼む者だが、引受ける者も引受ける者だ。

こゝに先づ大正から昭和に亘る本著の序文秘話の史實を略述する事にする。

筆者は切抜の資料として中外商業新報に毎日眼を通してはゐたが、小説まがひの外交秘話にはテンデ振りむきもしなかつた。ところがどうした拍子か條約改正の交渉を叙してあるあたりでフト走り讀をしたのが病み付で、それから最後まで毎日待ちかねて讀みつゞけた。

外交秘話は政治、軍事、財政、經濟のあらゆる方面に通せる機微の消息が、史實

として小説以上に面白く可笑しく叙せられてあるばかりでない、それは汎く國民の心の糧として知つて貰はなければならぬ滋味を以て充たされてある。

筆者は幾多の政變を惹起したる條約改正の事實が竟に陸奥外相により、内は元老閣僚政客志士さては新聞雜誌、外は利害相錯綜せる歐米列強のあらゆる方面の間に介在し、如何に鑊心彫骨の苦心を重ねられたか、しかもその最後の瀬戸際で二十七八年戰役の爆發といふ避くべからざる危機に遭遇した事が、何が故に却て日英間に於ける最初の改正條約の調印を促進する事となつたか。青木周藏公使が倫敦から伯林に歸任した時に、カイザーから獨逸へも軍艦の一隻位注文したかどうかと、なんでイキナリ一本皮肉られたか。這般の消息は正に軍事外交と財政經濟とが、盾の兩面のやうにピッタリと相表裏してゐる事を現實に語つてゐる。

時恰も筆者は財政讀本の稿をつゞけてゐたから、此史實をそのまま讀本の關稅の欄外へ參考資料に借用して、中外商業の築田君まで右報告をかね同時に作者の諒解

を求め、そこで始めて上野公園の料理店の主人のやうな雅號の持主が、小松霞南君である事を承知した次第である。

いよ／＼讀本が出来上ると筆者は改めて直接霞南君に書冊を添へて挨拶狀を差出すと、其返書に大事の記録を無斷轉載とは近頃以て奇怪至極なり、不日外交秘話も出版の筈につき、其節序文を認むるに於ては穩便に帳消しにすべしと、そこは長らく外交の舞臺で叩き上げたゞけに極めて機敏にからんで來た。筆者も面倒臭いと遁げを張るほど筆不精でもなく、折角だがと勿體ぶる柄でもなし。思ふに外交秘話の功能書を外交島の人が提灯持つは、なほ砂糖屋の亭主が砂糖が甘いといひ、鹽の小賣屋が鹽が辛いといふに異ならず、外交が國民の實生活にいかにかに深き交渉を持つてゐるかといふ事は、筆者の本書を援用せる事により百の說法より一の生きた證據として示されてゐる。殊には本書に掲載せる露國のスパイが、日本の在外公館より電信暗號のコードを抜取つたトリック物語りを土臺にし、露國に活躍したる故明石栢

蔭將軍のスパイ物語を叙したる三回もの、隨筆も、近くアサヒ・グラフの思出草に連載することゝなつてゐる。重ね／＼宿縁又淺からずといふべきである。陸奥福堂の知遇に感じて外務畑に入り、次で寺内魯庵の下に日韓併合の衝に當つた著者の直面したる外交秘話は、その豊かなる文藻によりて、興味津々として盡きざるものがある。がそんなお太鼓は筆者が下手に叩かなくとも、世自から定評がある。こゝには樂屋落の嫌があるが、序文秘話?の經過を有の儘に記して、由來地理、歴史、言語、文字杯の相違の爲めに全く別看板、別世界のやうに敬遠されてゐる外交そのものを敢て國民外交促進の爲め杯と四角張る迄もなし、國民常識の必須の糧として、小説傳奇以上に面白き生々しき現實の物語として汎く江湖に薦むるものである。

昭和二年二月二十一日於海南莊

法學博士

村

題外交祕話

一篇の外交祕話、之を細見すれば近代人傑傳となり、之を大觀すれば新日本發展史となる。人傑傳としては、宛かも壯烈痛快なる活劇を見るが如く、發展史としては、讀者をして知らず識らずの間に、我が日本が僅か五十年間に、一躍して文化に於て五大國の一となり、武備に於て三大國の一となりたる所以を心通默解せしむ。單に興味本位として讀むも可、稗史以上に面白ければ也。啓蒙の訓話として讀めば更に妙、世道人心に多大の裨益あれば也。

昭和二年三月七日

公爵 佐川 嘉 孝

讀後感

事奇、文妙、寓意亦警拔、蓋し近時稀に睹る珍書。此書を通讀して何人も容易に看取し得べき一教訓がある。それは詭計猾策を弄する處に失敗多く、正道を踏み信義を守る邊に必ず成功を見ることである。即ち古き諺ではあるが正直は最善の政策なりといふ眞理が如實に立證されてゐることである。國家を對象とする外交に於て既に然りとすれば、個人を對象とする内政に於ては尙ほ更ら然らざるを得ない。内政も外交も宜しく倫理化せざるべからざるに於て其の揆を一にする。而して其の倫理化より來たる効果が、當局者に對し、啻に正義の榮譽を齎らすのみならず、又成功の實利をも併せ與ふるものなることを諒解するに及べば、誰か倫理化の本領を疑ふ者があらうぞ。此書の出づる頗る人意を強うするに足る。聊か讀後感の一端を披

瀝すと云爾。

昭和二年三月八日

子爵

後藤新平

書翰

外交祕話御出版の由、至極驩迎仕候。右は中外紙上に於て一兩回讀來るや直に其の作者の貴臺なることを看破候。日韓併合的一幕別して面白く候。驚天動地の活劇作者亦其の齣裡の一役者、他の門外漢の夢視せざる所を縦横無碍に道破せられたる決して不思議にあらず候。中には餘りの大氣焔に、讀者も煙に捲かれ候感有之候。世の中には働く者と、報酬を受取る者とは、自から分業と相成居申候。貴兄の如きも働く方の役目に廻されたる一人なれば、千圓の慰勞金でも金杯三組でも寧ろ結構過ぎることゝ存候。現金主義の支那にさへも、魯仲連などと申す漢も有之候。晩節舊を話して、自から十石の溜飲を下るも、亦聖世の恩澤と存候。速かに御出版首を延べて相待申候。匆々不一

昭和二年三月十日

小松先生机下

徳富猪一郎

目次

一 日本一の名外交家 三
 英氣鎮爽たる立像——陸奥は果して素人外交家なりや——三箇の偉勳——眞誠外交創始者

二 才學雙全の人 一
 陸奥の人となり——刻苦勉勵の人——獄中の研鑽——十五歳で立志出郷——開港攘夷で國論沸騰す——星亨に英語を學ぶ——二十三歳で外交官——軟弱外交に憤慨して辭職

三 悲憤の血涙 七
 幕末期の樺太問題——小出スツレモウホフ條約——條約無視の樺太占領——陸奥の樺太植民策一蹴さる——言々悲痛の意見書——鷗翼飛んで歐洲遊歴

四 不見轉の印だ 一〇
 稜々たる氣骨と堂々たる風采——陸奥の瘦我慢——狹斜の巷で襦袢の大あぐら——股間を覗いて藝者の大笑——陸奥の一喝、藝者は眼を白黒

五 政府顛覆の陰謀 一三

木戸の憤慨と辭職——木戸の手先となつて陰謀に加擔——早くも條約改正に着眼す——西郷敗れ陰謀を中止

六 大久保の大度量……………二五

河野と陸奥の確執——林、大江の陰謀露見す——陸奥の密電河野の手に入る——河野、陸奥の處罰をせまる——大久保握りつぶす

七 陸奥の處刑……………二七

紀尾井坂の白刃亂打——西郷を知る者は大久保——政權長派に移る——一件書類は伊藤の手に——河野、伊藤を煽動す——陸奥法廷に送らる

八 簡單不明瞭の判決……………二〇

遂に禁錮五年——判決全文——河野陸奥の後釜に坐る——伊藤刑餘の陸奥を登用す

九 兩雄の密談……………三三

湘南閑室の伊藤陸奥——學者の政治家、政治家の學者——政界の躍進——憲法發布近し——條約改正の急務——陸奥公使となる

一〇 伊藤の歐化主義……………三三

鹿鳴館と假裝舞踏會——戸田夫人との有らぬ醜聞——深夜まで女と談笑する伊藤——下田

歌子は大臣の器——柔いやうで存外固い伊藤——風俗壞亂の元兇

一一 條約案作製の苦心……………三六

愈々條約改正に着手——名外交家を氣取る伊藤——難關は治外法權撤廢と内地雜居——伊藤井上の苦心——考へる、熱くなる、水をかぶる

一二 極秘の條約案……………三〇

二十餘年を要した條約改正事業——伊藤井上の猪突——飄單鯨の外國公使——遂に法權回復のみを目的に——葬られたる井上案の内容

一三 谷干城の獅子吼……………三三

谷の彈劾的上奏文——谷、松方の正面衝突——伊藤、谷の自重を勸む——農相が政府攻撃演説——改正案反對の氣勢揚る——外相の辭職

一四 大同團結……………三六

後藤象二郎の蹶起——大同團結成る——集會條令と保安條令——伊藤樞密院に逃避す——伊藤の初物喰ひ

一五 御前で口論……………三六

明治大帝と伊藤——御前の乗馬問答——山縣、伊藤の口論——馬車から落ちた伊藤の話——

—君臣水魚の交

一六 晴天の霹靂……………二

大隈、外相となる——腹黒い排外政策——英紙わが改正案を素破抜く——新條約に調印す——伊藤井上の反對——遂に宸裁を仰ぐ

一七 大隈の遭難……………四

四日間の御前會議——條約改正は中止——爆彈飛ぶ——毅然たる綾子夫人——細君に一目おく大隈

一八 法典の完備……………四七

法典の不完全——大岡越前式の裁判——條約改正の第一歩は法律の改正——司法官の地位向上——新法律頒發さる

一九 山縣の勇と怯……………四九

第一回帝國議會——山縣の施政方針演説——衆議院、軍事費の大削減を爲す——青木、條約改正着手を迫る——山縣の怯、内閣を讓る

二〇 首相難……………五三

無能多難な松方内閣の終焉——大命四元老に降る——酒亂の黒田——首相職の押付け

二一 伊藤の術數……………五五

大西郷の大隈井上評——元勳一致、伊藤の出馬を勸む——山縣黒田は閣外援助論——伊藤は各元老の入閣を希望す

二二 外交界の寵兒……………五八

元勳内閣の顔振れ——陸奥一族は米國外交界の花形——墨國公使をおだてる——我國最初の對等條約締結

二三 泥中の蓮……………六二

新橋の名妓小鈴——板垣、沖、陸奥の寵當——陸奥夫人としての小鈴——伊藤を女にしたやうな梅子夫人——山縣夫人は新橋の美妓——正妻を置かない西園寺家——小鈴の經歷

二四 剃刀大臣……………六四

陸奥、山縣に拔擢さる——懸案の條約完成を庶幾す——陸奥腹心の士中田とアニソン——伊藤、條約改正の準備を糺す

二五 室内の密談……………六七

條約改正の詔勅——井上案と大隈案の缺陷——開談の目的は對内對外兩方——談判地は相手國の首府——交渉の順序は英國、米國其他——陸奥、伊藤の自尊心をそゝる

二六 對等條約案……………七〇

改正案に對する内閣會議——伊藤、陸奥の長口舌——改正案の三要點

二七 青木の卓見……………七三

外交の經驗に富む青木——外相に訓令し兼まじい公使——陸奥、青木をおだてる——青木の卓見——税則即時實施論——外人土地所有許可論

〇 二八 大喝一聲 WAIT !!……………七七

青木フレージャーの會談——青木の一喝内談を繼續せしむ——青木、條約改正の要を縷述す——日本政府約改談判に値せず——青木フレージャーを説伏す

二九 責め道具……………七八

英國内閣の更迭、約改を遷延せしむ——陸奥英國公使を訪ふ——葡萄牙をダシに使つて英國を脅威す——英國公使、約改の率先權を要求す

三〇 獨逸式と英國流……………八二

青木と英國外相との會談——思ひ切つたシツハイ返し——條約改正と報酬——英佛の讓與要求——青木讓與を峻拒す

三一 お世辭の交換……………八四

英國政府の二要求——わが排他的民論を恐る——青木、讓與者彈壓を勸む——内政の切迫と條約改正の要

三二 喜悲交も至る……………八六

韓半島の風雲急を告ぐ——條約改正の危機——陸奥の追懷談——陸奥の歡喜と苦心——英國約變約改を拒む

三三 對英新條約調印……………八九

コールドウェル事件——陸奥の適宜處置——對英新條約調印を了す——英國は何故改正速進を欲せしか——青木の報告書

三四 關稅問題の今昔……………九二

歐米の慣用二惡策——不當關稅率に苦しむ日清——支那の稅權回復運動——龍頭蛇尾の北京關稅會議——成功せる我對英新關稅率

三五 カイゼルの謎……………九四

對獨談判開始さる——帝權神授論者カイゼル——獨帝厭味をいふ——青木獨逸への軍艦注文を獻策す——獨帝の迷語

三六 對米豫備交渉……………九六

對米交渉開始——フオースター援助を誓ふ——米國政界の紛糾——米國眞意を披瀝す——
建野、陸奥を含んで召還を乞ふ

三七 栗野と原と加藤 100

栗野駐米公使となる——栗野グレシヤム會見——グレシヤム機密漏洩を怒る——談判平調
に進む——わが米國移民制限さる

三八 突飛な離れ業 101

意外なる二故障——日本軍の支那人虐殺——米國の輿論緊張す——外相陸奥米紙上で辨明
す——米國の輿論緩和す——重大なる元老院の修正——栗野元老院を再議せしむ

三九 春秋に義戦なし 110

日本の存在を知らぬ世界——戦争と正義——辱商輔車の日本と朝鮮——卑屈なる我が對韓
策——東學黨の亂と支那の出兵

四〇 戦雲低迷 113

乾坤一擲の大博奕——參謀次長の主戦論——大島の歸任と混成旅團の派遣——日支兩國の
出兵名目

四一 李鴻章の戦意 116

我が對韓方針決す——袁世凱の豪語——李鴻章の主戦論——露國公使李鴻章を煽動す——
豊島沖の海戦——高陞號の撃沈

四二 國交斷絶と小村の豪膽 118

支那、朝鮮を屬邦視す——天津條約——英國公使の調停效を奏せず——小村、支那の大出
兵を仄聞す——獨斷で國交斷絶の通告

四三 小村の妻難 121

トントン拍子で出世した小村——恵まれざるその家庭生活——江戸子美人の町子夫人——
芝居氣狂ひ——人一倍のやきもち焼——待合にあげれ込む

四四 鬼大佐の夜襲 124

小村、安東縣民政廳長官となる——軍人を戒飭して憤激を買ふ——陸軍將校、小村袋叩を
目論む——小村巧に難を逃る——山縣、小村を抜擢せしむ

四五 支那列國に縋る 127

日本の戦捷に驚嘆せる世界——英佛の激賞——戦敗國支那の慘狀——米國公使の講和斡旋
——講和談判の地點と休戦問題

四六 最初の講和條件 130

鼻息の荒い民論——青木、西の講和條件——廣島の御前會議——決定條約案——伊藤の説
明演説——文武官一致の要——講和談判の成果を疑ふ——第三國の干渉を豫想す

四七 李鴻章來る……………一三六

支那講和使來る——不完全なる支那全權の委任狀——支那政府の誠意を疑ふ——支那全權
追ひ還さる——李鴻章來る

四八 李鴻章の負傷……………一三九

堂々たる李鴻章——見すばらしい伊藤陸奥——腹黒い李鴻章のお世辭——彼我休戰條件の
相違——李狙撃さる

四九 講和條約の締結(上)……………一四二

意見の相違は償金と割地——償金三分二減、割地不能論——我が讓歩案——支那側の修正
案

五〇 講和條約の締結(下)……………一四五

わが最後の妥協案——四日間の休會——看破し易い支那の電信暗號——支那の密電頻りに
飛ぶ——わが最後案を全部承認——三國干渉を見越したる李の調印

五一 遼東の還附……………一五〇

八ヶ月の大儲け——三國同文意の干渉覺書——御前會議開かる——列國會議召集説破る——
遂に遼東は放棄

五二 李鴻章の替玉……………一五三

日清兩國の三恩人——フォオスター李の顧問となる——よく李を補導す——條約反對者支
那に頻出す——李鴻章に代つて清廷に

五三 陛下の食言……………一五五

三國の批准妨碍——支那の廟議、條約否認に傾く——フォオスターの熱辯——批准拒絕は
皇帝の食言也——遂に批准の沙汰下る——李鴻章感泣す

五四 批准交換……………一五八

又復三國の妨碍運動——戰闘準備を終れる三國艦隊——支那延期を申込む——日本將に同
意せんとす——フォオスターの奔走——遂に批准交換を了す

五五 伊東全權の追憶談(上)……………一六一

已代治全權となる——適宜處決權を要求す——博文あきれる——軍艦護衛を退く——「稿
の羽織」で芝罘へ

五六 伊東全權の追憶談(中)……………一六三

業々しい清兵の護衛——支那全權の來訪——危險を冒して已代治の答訪——支那延期を懇願す——已代治一世一代の痰阿を切る

五七 伊東全權の追憶談(下) 二六

支那全權の批准交換誓約——わが使節一行の祝宴——延期の訓電到る——已代治の憤怒——深夜交換を了す——博文の狂喜

五八 三國干涉の内幕(上) 二六

干涉の主謀者は誰か——ウイツテの極東侵略政策——露帝は彼の傀儡——對日御前會議——ウイツテ干涉を高唱す

五九 三國干涉の内幕(下) 二七

露國單獨干涉を企つ——大事を取て佛獨を誘ふ——獨逸が加つた理由——三國干涉の根本は獨逸に非ず

六〇 ニコラス帝の戴冠式 二七

三國は盗人、日本は憤激——戴冠式へ山縣が——「大みこと貫かてやは」の決心を懷いて——山縣ロバノフ協約——協約無視の侵略策

六一 ウイツテ密約 二七

山縣露都で冷遇さる——支那分割を目論む歐洲——腹黒い露國が李鴻章大歡待——露支對日攻守同盟——東清鐵道敷設權——所謂カシニ——密約成る

六二 ウイツテの大狼狽 二八

露國に劣らぬ獨帝の野心——獨逸膠洲灣を占領す——支那ウイツテに縋る——ウイツテ膠洲灣占領を喜ばず——露獨兩帝に出し抜かれる

六三 冬籠に日本藝者 二八

膠洲灣は要衝の地——獨逸露國を恐る——冬籠に日本藝者——奇怪なる投錨優先權——カイセル露帝に會見を申込み

六四 ペテルホフの密議 二八

露獨兩帝の密議——露國の希望は旅順鴨綠江の間——膠洲灣占領に異議なし——投錨優先權有耶無耶となる——青島租借成る

六五 露國の背信と強奪 二八

旅順大連占領の御前會議——ウイツテの永遠の國策——海相は韓國に良港を求む——露帝ウイツテを説伏す——遂に旅、大を占領す

六六 七十五萬留の賄賂 二九

支那旅、大讓渡を峻拒す——空前の賄賂——袁世凱の次子カスリを取る——賄賂租借を成
立せしむ

六七 ムラヴィヨフの鐵面皮……………一九三

日本の憤激——露國外相とぼける——支那動亂に好機會來る——クロバトキンの滿洲占領
論——滿洲撤兵を拒む

六八 女天下の露廷……………一九五

怪僧ラスプーチン——奥に媚びんよりもその窻に媚びよ——軟文學に没頭する陸相——皇
后は露帝の太陽——牝鷄晨して極東政策裁可さる

六九 露軍の南下……………一九六

露國着々南下す——朝鮮より種々の利益を獲得す——奸臣ベソアラソフの魅力——露帝魅
せらる——極東總督は獨裁君主

七〇 噴火山上の亂舞……………二〇一

政變頻々國難迫る——陸奥の死——松方内閣と米國の比律賓併合——第三次伊藤内閣——
日本最初の政黨内閣——第二次山縣内閣——青木外相の抱負

七一 回天の大盛事……………二〇四

青木征露を直奏す——條約改正完了す——新條約の實施期日近づく——賀筵催さる——詔
勅降下——外國公使の奉答

七二 女 公 使……………二〇七

井上馨と勝之助の人となり——才色兼備の勝之助夫人——カイセルにもてる——内助、外
助、女公使

七三 カイセルの腹探り……………二〇九

不思議なる山縣の辭表提出——井上、獨帝の腹探りを命ぜらる——獨帝嚴正中立を言明す
——征露の好機——著者征露上奏文起草す

七四 天聽を驚かす……………二二三

傲岸不遜の青木外相——上奏文を口授す——襤服の二字を改めず——青木の上奏、内閣を
破壊す——討露より隱忍へ

七五 元老黨首の種切れ……………二二五

最初の政友會内閣——藏相頑張て内閣瓦解——元勳會議と首相難——桂太郎の略歴——桂
「少壯」内閣成立す——鼠公使外相となる

七六 親露か親英か……………二二八

峻烈なる元老の内閣監視——親露、親英の二潮流——露國の平和派と主戦派——日英同盟の豫備交渉進捗す——伊藤は日英獨同盟論——桂は日英同盟論

七七 狐と狸の魅合ひ……………三三

日英同盟の由来——主唱者は英國植相——獨逸を抱込まんとする英國——獨逸の二段主義——獨帝と英國植相との押問答——英國の手先に使はれる日本

七八 長雲閣の元老會議……………三四

元老葉山に集る——伊藤の揮毫——日英同盟に對する二様の解釋——桂同盟を力説す——疑はしき同盟の可能性と英の誠意——遂に同盟開談に決す

七九 送別會で喧嘩……………三七

伊藤米國漫遊を企つ——井上の奔走伊藤を歐洲に送る——桂邸の別宴——伊藤は日露、山縣、桂は日英同盟論——桂、伊藤の専斷を豫防す——伊藤駄々をこねる

八〇 伊藤の歐米漫遊……………三〇

伊藤渡米す——著者接待役となる——ルーズヴェルト伊藤を激賞す——醉筆で俚語の揮毫——借款の裏書をハネ付る——英國を餘處に佛蘭西へ直航

八一 林公使五里霧中に迷ふ……………三三

林の英國記者操縱法——要求以上の運動費支出——同盟約案出来——林伊藤に復命す——伊藤談判の進行に驚く——日露協商を前提とした栗野の露國轉勤

八二 往かんか歸らんか……………三三

林途方にくれる——林日英同盟の効果を説く——伊藤之れに同意す——伊藤の露國行を勸む——伊藤の進退を監視せる英國——個人の資格で露都訪問

八三 意外な大歡迎……………三六

伊藤歡待さる——前約を忘れて協商談判を始む——抽象的具體的兩親善論——露外相の對韓強硬論——伊藤伯林に去る——露國協商成立を望む——日英同盟調印延期を請電す——桂内閣聖裁を仰ぐ

八四 君子は豹變す……………三二

自説を固執せぬ伊藤の美點——日英同盟論者に急變す——伊藤の露國行を頭痛に病む英國——伊藤、林の權謀功を奏す——英國同盟を急ぐ——英佛の伊藤賞揚

八五 日英の攻守同盟……………三三

林の追憶談——日英同盟の範圍——印度は除外して支那朝鮮に限る——殿正中立と協同戰闘——同盟條約發表時日の相違

八六 栗野の追憶談(上) 二四七

押のきかぬ桂後進内閣——各方面に意志の疏通を缺く——三國同盟を前提に栗野の轉任——佛露また三國同盟を希望す——栗野日英同盟の成立に驚く

八七 栗野の追憶談(中) 二五〇

栗野の失望——桂日英同盟の方針を栗野に秘す——栗野召還を請求す——小村、伊藤の慰撫——露廷の栗野大歓迎

八八 栗野の追憶談(下) 二五三

疑心暗鬼の露國——直情徑行能く露廷の信認を博す——露國日本を英米の手先と見る——杓子定規の英國大使——日本の爲に國交斷絶、時に落涙

八九 暗號電信の漏洩 二五五

露國政府に筒拔ける我密電——メモアラソフの暗示——日本の密電は平電同様——事前に國交斷絶を知れる露帝と佛國大使——栗野の疑惑

九〇 美人の女中 二五八

日本の暗號電符盜まる——本野公使に面會を求むる怪漢——日本の電符を賣らんとす——五千法で買収——各國の電符を盜む商賣——美人の女中を手先に使ふ

九一 電符窃取法 二六一

先づ符號の在所を偵知——合鍵で盜出して寫眞で撮影——話賃五千法——わが電符改正さる——米國の密電も頻々漏洩

九二 ベン先よりも銃劍 二六四

露國の穩和派と急進派——露廷に於ける極東會議——露帝ウイツテを懐柔せんとす——穩和派の反對演説——内相の硬論——露帝の心事決す

九三 國難刻々に迫る 二六六

露國韓國に侵入す——義州に於ける露兵の暴行——撤兵中止、滿洲占領の畫策——穩和派閣僚の辭職——クロボトキンの極東視察——寺内との會見

九四 苦しい腹藝 二六九

我が對露御前會議——帝國政府の斷乎たる決心——政友會を恐れる桂——伊藤の總裁辭任を望む——素氣ない伊藤の返事

九五 元老總出の魂膽 二七三

桂の辭表捧呈——山縣、桂の爲めに奔走す——伊藤を樞相に祭り上ぐ——伊藤山縣をなじる——元老連の樞府入り——桂の辭表は却下

八六 栗野の追憶談(上) 二四七

押のきかぬ桂後進内閣——各方面に意志の疏通を缺く——三國同盟を前提に栗野の轉任——佛露また三國同盟を希望す——栗野日英同盟の成立に驚く

八七 栗野の追憶談(中) 二五〇

栗野の失望——桂日英同盟の方針を栗野に秘す——栗野召還を請求す——小村、伊藤の慰撫——露廷の栗野大歓迎

八八 栗野の追憶談(下) 二五三

疑心暗鬼の露國——直情徑行能く露廷の信認を博す——露國日本を英米の手先と見る——杓子定規の英國大使——日本の爲に國交斷絶、時に落涙

八九 暗號電信の漏洩 二五五

露國政府に筒拔ける我密電——メモアラソフの暗示——日本の密電は平電同様——事前に國交斷絶を知れる露帝と佛國大使——栗野の疑惑

九〇 美人の女中 二五八

日本の暗號電符盜まる——本野公使に面會を求むる怪漢——日本の電符を賣らんとす——五千法で買収——各國の電符を盜む商賣——美人の女中を手先に使ふ

九一 電符窃取法 二六一

先づ符號の在所を偵知——合鍵で盜出して寫眞で撮影——話賃五千法——わが電符改正さる——米國の密電も頻々漏洩

九二 ベン先よりも銃劍 二六四

露國の穩和派と急進派——露廷に於ける極東會議——露帝ウイツテを懐柔せんとす——穩和派の反對演説——内相の硬論——露帝の心事決す

九三 國難刻々に迫る 二六六

露國韓國に侵入す——義州に於ける露兵の暴行——撤兵中止、滿洲占領の畫策——穩和派閣僚の辭職——クロボトキンの極東視察——寺内との會見

九四 苦しい腹藝 二六九

我が對露御前會議——帝國政府の斷乎たる決心——政友會を恐れる桂——伊藤の總裁辭任を望む——素氣ない伊藤の返事

九五 元老總出の魂膽 二七三

桂の辭表捧呈——山縣、桂の爲めに奔走す——伊藤を樞相に祭り上ぐ——伊藤山縣をなじる——元老連の樞府入り——桂の辭表は却下

九六 對露談判の開始……………二七〇

露政府に提出されたる我協商案文——談判東京に移る——彼我の全權委員——理不盡なる露國の修正案

九七 韓國折半論……………二七七

滿韓交換主義の我讓歩案——極東太守の強硬意見——更に強硬となれる露國の第二修正案——露國滿洲の兵備を急ぐ

九八 日露終に開戦……………二八〇

最後通牒——最後の御前會議——國交斷絶——初めから開戦の覺悟で交渉に當る——米國を抱込まんとす

九九 臣は是れ忠狂……………二八三

金子辭退す——米國の同情を得るは困難——北條時宗氣取の伊藤——伊藤の熱誠金子を動かす——米國大統領の盡力——伊藤心誓の詩

一〇〇 愈々開戦……………二八五

數質共に露軍が優秀——露兵二は日兵三に相當——海軍半滅の決心——統率と士氣——仁川沖の海戦——宣戰布告

一〇一 露國軍容の亂脈……………二八七

心許ない露軍の總大將——大公の身代りとなつて出世——新任極東軍司令官——アレキセーフ追放を進言さる——アレキセーフの召還

一〇二 古今無類の奇勝……………二九〇

仁川旅順の海戦——マカロフの戦死——陸軍の連戦連勝——日本海海戦——豫期以上の戦果

一〇三 講和仲介の魂膽……………二九二

講和の曙光——佛國の講和斡旋——日本、條件付の開談を一蹴す——獨帝露國に搜りを入れる——獨帝米國を煽動す

一〇四 外交家の無駄口……………二九五

親切こかしの獨帝の忠告——英佛の鼻をあかす獨帝の魂膽——米國の仲介は日本の利益——日米間の講和電信問答——高平公使の私的軟愚論開陳

一〇五 カイゼルの狂奔……………二九六

戦勝を夢想して露國講和を拒む——米大統領海軍持久戦を勸む——日本海海戦講和を促進す——獨帝、露米兩元首を説く——露帝遂に講和に同意す

九六 對露談判の開始……………二七〇

露政府に提出されたる我協商案文——談判東京に移る——彼我の全權委員——理不盡なる露國の修正案

九七 韓國折半論……………二七七

滿韓交換主義の我讓歩案——極東太守の強硬意見——更に強硬となれる露國の第二修正案——露國滿洲の兵備を急ぐ

九八 日露終に開戦……………二八〇

最後通牒——最後の御前會議——國交斷絶——初めから開戦の覺悟で交渉に當る——米國を抱込まんとす

九九 臣は是れ忠狂……………二八三

金子辭退す——米國の同情を得るは困難——北條時宗氣取の伊藤——伊藤の熱誠金子を動かす——米國大統領の盡力——伊藤心誓の詩

一〇〇 愈々開戦……………二八五

數質共に露軍が優秀——露兵二は日兵三に相當——海軍半滅の決心——統率と士氣——仁川沖の海戦——宣戰布告

一〇一 露國軍容の亂脈……………二八七

心許ない露軍の總大將——大公の身代りとなつて出世——新任極東軍司令官——アレキセーフ追放を進言さる——アレキセーフの召還

一〇二 古今無類の奇勝……………二九〇

仁川旅順の海戦——マカロフの戦死——陸軍の連戦連勝——日本海海戦——豫期以上の戦果

一〇三 講和仲介の魂膽……………二九二

講和の曙光——佛國の講和斡旋——日本、條件付の開談を一蹴す——獨帝露國に搜りを入れる——獨帝米國を煽動す

一〇四 外交家の無駄口……………二九五

親切こかしの獨帝の忠告——英佛の鼻をあかす獨帝の魂膽——米國の仲介は日本の利益——日米間の講和電信問答——高平公使の私的軟愚論開陳

一〇五 カイゼルの狂奔……………二九六

戦勝を夢想して露國講和を拒む——米大統領海軍持久戦を勸む——日本海海戦講和を促進す——獨帝、露米兩元首を説く——露帝遂に講和に同意す

一〇六 談判地の選定……………三〇一
ハルピン及び奉天説——日本は芝罘、露國はパリ説——ヘーグに折衷説——金子米大統領
を説いてワシントンとなす——露國また單獨にワシントンを選定す——ポーツマスに變更
せらる

一〇七 蕪燒けのニコラス……………三〇四
ルーズヴェルトの苦衷——米國の仲介を喜ぶ英國——浦港陷落後の講和を望む英帝——
孤立無援を惧るゝ獨逸——燒けになつて鼻息荒い露帝

一〇八 全權と隨員……………三〇七
ムラゲイヨフ辭退す——ウイツテ全權となる——名士を網羅したる露國隨員——我全權は
第二流者——心細い隨員の顔振れ——米國の同情は日本より露國に移る

一〇九 新聞操縦策……………三〇九
愛想の良いウイツテ——新聞記者を忌避した小村——講和會議公開可否論——公表書を空
虚にして記者達の怨を買ふ——米紙日本の不利益を流傳す

一一〇 日露兩全權の對面……………三一三
お世辭で米人を購着す——露國式桐喝外交——御召船で兩國全權の引合せ——高平全權を
領事と認む——會議場は海軍集會所

一一一 講和談判の開始……………三二二
兩國全權權限の相違——小村劈頭にヘコマさる——全權權限の引下げ——總括的討議を斥
けて逐條審議——我が講和條約原案——大統領の注意に基て削除修正

一一二 ウイツテの詭辯……………三二八
癪にさばるウイツテの横柄——露國を戰敗國と思はぬ——清韓の獨立を犯す日本——眞意
不明の日露同盟論——米紙を使喚して日本攻撃

一一三 談判益々紛糾……………三三〇
順當に運んだ旅・大の讓渡——鐵道讓渡は長春以南に妥協——滿鐵目今の苦惱——海軍制
限と奔竄艦引渡は放棄——割地と償金

一一四 虚々實々の懸引……………三三三
重大で而も枝葉の償金割地問題——日本の態度は強硬——非公式の妥協——樺太折半、代
償十二億圓——ウイツテは樺太全讓の決心

一一五 國際的彌次馬……………三三六
談判破裂の風説高まる——大統領露國全權を電招す——露帝に秘密通牒を送る——米國に
代て英佛講和仲裁を企つ——米大統領の憤激——激烈なる長文親電を露帝に送る

一一六 露帝と米使との會見……………三六
米電漏洩——米使と會見を喜ばず——償金と買収とを峻拒——米使熱辯を振ふ——露帝の
認容する講和條件——多少の金は出してほしい

一一七 行司の困惑……………三二
大統領金子に勸告書を送る——償金抛棄の勸告——日本は寛仁大度たれ——露國は日本よ
り折伏に困難——露國を痛罵す

一一八 噫千慮の一失……………三四
談判再開——露國樺太全讓を提議す——小村猶ほ償金を固執す——大統領を頼る小村の思
惑——露國樺太半讓に逆戻り

一一九 外交の關ヶ原……………三七
獨帝を利用して露國説得——日本は戦争繼續の餘力なし——償金を軍備に振向けての戦争
繼續論——露全權の最後回答——ウイツテの肚裏

一二〇 最後の五分間……………四〇
ウイツテの苦惱——泣て終夜神に祈る——日本、露國の最後案に屈服す——ウイツテの狂
喜——子供の使のやうな小村——大統領の顔もつぶす

一二一 ウイツテの凄腕……………四三
取れる物を取らぬ日本——得意満面のウイツテ——日本は何もかも抛棄——露國は外交で
大勝利——故國に錦を飾るウイツテ

一二二 小男の大食……………四五
米國兩國全權を毎回饗應す——小食のウイツテと食食の小村——胃腸病で小村の呻吟——
露國は何故外交に勝つたか

一二三 大儲か大損か……………四八
焼打事件の勃發——大統領日本側の収益を力説す——大儲をし乍ら大損を装ふ——深か
過ぎた日本人の怨——軍國主義の誤解起る

一二四 思ひは同じ兩大將……………五〇
戦ひ疲れた日露兩軍——豫想以上の大兵を動かした露國——いつまでも續かぬ日本の奇勝
——外債の望絶えた兩國——兩國軍總司令官講和を熱望す

一二五 地方長官の間諜罪……………五三
支那官吏我軍意に一網打盡——間諜罪で斬首——長官の引渡を哀願——著者外交顧問とし
て差遣さる——小村の忠告

二二六 大の蟲と小の蟲……………三六

「人民」の二字が問題——立案者有賀の解釋——法官部長と著者との討論——公平不公平論——正則變則論

二二七 知州知縣の命拾ひ……………三九

軍律の不備と國際關係——犯人赦免は軍司令官の權能——通告のみに止めて赦免——支那人、我寛大な措置を謳歌——日支外交に好影響を及ぼす

二二八 保護制度の創設……………三九

日支交渉纏まる——韓國の處分は日本の適宜——韓國保護條約成立——韓帝伊藤を敬慕せらる——著者統監府へ轉任

二二九 朝鮮に美人が少い譯……………三九

不潔極まる京城の街路——恭會の途中で伊藤があきれる——統監府屬僚の官舎出來す——美人の酌で手柄話——韓國には美人が少い

二三〇 朝鮮美人を奪去る……………三八

宋曰く日本兵が奪つた——伊藤曰く否奪はぬ——では誰が奪つたか——著者辯明を承り——蒙古族が奪つたのだ

二三一 元時代の美人狩り……………三七

蒙古族の朝鮮侵入——婦女徵發官吏を置く——元朝へ頗々美女献上——言々悲痛の上疏文——伊藤朝鮮美人を斷念す

二三二 藝妓の新陳代謝……………三四

伊藤のうつり氣——餘人は偽善、臣は偽惡——勅許を得たつもりで大ヒラに浮氣——愛妓お清の狐狗狸——好きな人と嫌いな人

二三三 陰謀の裏に女性あり……………三七

光武帝伊藤を讒弄す——韓廷は宛然伏魔殿——外人ホテルは陰謀の策源地——國王を叱付ける韓妃

二三四 ソンタク嬢の涙話……………三六

統監の威力も及ばぬ外人ホテル——ソンタクの迷懷——厚顏無恥の外人輩——國王の陰謀的親翰韓紙に現る——伊藤の憤怒

二三五 韓帝親翰の眞偽……………三三

韓紙形式的の取消を掲ぐ——ハルバートの告白——條約の規定履行の仲介者——米國大統領に親翰を取次ぐ——大統領取上げず——伊藤の廣量

二二六 大の蟲と小の蟲……………三六

「人民」の二字が問題——立案者有賀の解釋——法官部長と著者との討論——公平不公平論——正則變則論

二二七 知州知縣の命拾ひ……………三九

軍律の不備と國際關係——犯人赦免は軍司令官の權能——通告のみに止めて赦免——支那人、我寛大な措置を謳歌——日支外交に好影響を及ぼす

二二八 保護制度の創設……………三九

日支交渉纏まる——韓國の處分は日本の適宜——韓國保護條約成立——韓帝伊藤を敬慕せらる——著者統監府へ轉任

二二九 朝鮮に美人が少い譯……………三九

不潔極まる京城の街路——恭會の途中で伊藤があきれる——統監府屬僚の官舎出來す——美人の酌で手柄話——韓國には美人が少い

二三〇 朝鮮美人を奪去る……………三八

宋曰く日本兵が奪つた——伊藤曰く否奪はぬ——では誰が奪つたか——著者辯明を承り——蒙古族が奪つたのだ

二三一 元時代の美人狩り……………三七

蒙古族の朝鮮侵入——婦女徵發官吏を置く——元朝へ頗々美女献上——言々悲痛の上疏文——伊藤朝鮮美人を斷念す

二三二 藝妓の新陳代謝……………三四

伊藤のうつり氣——餘人は偽善、臣は偽惡——勅許を得たつもりで大ヒラに浮氣——愛妓お清の狐狗狸——好きな人と嫌いな人

二三三 陰謀の裏に女性あり……………三七

光武帝伊藤を讒弄す——韓廷は宛然伏魔殿——外人ホテルは陰謀の策源地——國王を叱付ける韓妃

二三四 ソンタク嬢の涙話……………三六

統監の威力も及ばぬ外人ホテル——ソンタクの迷懷——厚顏無恥の外人輩——國王の陰謀的親翰韓紙に現る——伊藤の憤怒

二三五 韓帝親翰の眞偽……………三三

韓紙形式的の取消を掲ぐ——ハルバートの告白——條約の規定履行の仲介者——米國大統領に親翰を取次ぐ——大統領取上げず——伊藤の廣量

一三六 密使特派事件……………三六五

ヘーグに韓國密使現る——我外交當局の失態と嚴重調査——陰謀豫防の爲め王室財政監督——韓帝に御用金を上る米人——米人より密使事件の暗示を受く

一三七 韓帝の謀叛……………三六八

韓帝一切を否認さる——趙南昇自白す——密使に親書と全權委任狀とを與ふ——草案は佛教會に隠匿——親書草案の全文——終始外國に縋つた韓帝

一三八 韓人韓國を滅す……………三六一

李首相を通じて韓帝を問責——李内閣責任辭職を決意す——伊藤、留任を訓諭す——外相特派を請電す——韓帝高をくもらる——閣僚強諫讓位をせまる

一三九 前代未聞の退位と即位……………三六三

宋秉峻の直諫——元老亦讓位に賛成——物情騒然、軍司令官伊藤の身上を憂ふ——伊藤敢て参内す——首相邸の焼打

一四〇 一億圓は高過ぎる……………三六六

新協約成る——日本官吏を多致配屬——兩國官吏の嫉視反目——合邦論の急先鋒宋秉峻——伊藤急進的合邦論に賛せず——宋、桂首相を説く

一四二 事實上の併合……………三九九

韓國の現状座視するに忍びず——韓國を亡ぼす者は韓人——統監の更迭——併合を暗示せる告別演説——併合の素地全く整ふ

一四二 靈南坂の秘密會議……………四〇二

廟議併合に決す——伊藤、桂、小村の三頭會議——桂、伊藤を説く——韓帝以下の待遇——列國抗議の虞れなし——伊藤併合に賛す

一四三 櫻花の散る如くに……………四〇五

席温まる遠なき伊藤——ハルビン驛頭の悲劇——不世出の英雄——何の爲めに滿洲に行つたのか——後藤漸平伊藤を殺す

一四四 嚴島の會見……………四〇八

伊藤を世界の舞臺に送らんとす——後藤會見を申込み——三日三晩の談論風發——對外政策の樹立——朝鮮臭を去つて統監を罷めよ

一四五 大亞細亞主義……………四一一

後藤大亞細亞主義を説く——黃禍論と米禍論——第二策としての歐亞合從論——米國反省せば世界的聯合

一四六 男女の話聲……………四二四

寢室の外に男女の話聲——警部が迎への使者——伊藤、後藤に口止す——伊藤賛意を表明す——内地に於て兩藤再會

一四七 千歳の遺恨……………四二七

貧乏で終始した伊藤——大倉邸を保養處とす——歐洲識者と百年の長計を定めん——後藤の進言で滿洲行——桂、伊藤の遺志を繼ぐ——明治大帝の崩御で頓挫

一四八 藤公横死の價値……………四三〇

併合の妨害者は露清——諒解を求めん爲に滿洲へ——藤公の死兩國を教ふ——韓廷の恐怖——日本政府の態度を暗中摸索——一進會の合邦建議

一四九 日韓合邦建議……………四三三

秘密に付せられたる韓人の合邦論——統監に送られたる建議案全文——韓帝に奉呈せる上疏文——一進會の組成

一五〇 李完用刺さる……………四三三

合邦論者と反對者——李首相襲撃さる——アルタス氣取の刺客——統監邸の閣臣會議——統監病篤し——事處併合を速進す

一五一 寺内乗出す……………四三六

首相職か統監か——寺内統監を選む——誤解された寺内の性格——新統監併合準備を急ぐ

一五二 併合準備委員……………四三〇

併合に先立つて施行細則を定む——併合準備委員の顔振れ——確定せる細目原案

一五三 時機の問題……………四三三

統監に對する政府の指令——事情に通ぜぬ漸進論——寺内著者の意見を叩く——著者は即時併合斷行論

一五四 腹切り道具……………四三六

即時斷行に自信あり——大皇帝陰謀なきを新統監に示す——寺内の胸中を測り兼ねて韓大官の憂慮——深夜の訪問客——詩酒徵逐の友

一五五 深夜の密談……………四三九

李人植の來訪は勿怪の幸——日本側の態度を捜る爲めの來訪か——李人植、首相に進退の速決を勧告す——進退兩難の韓首相の煩悶——新統監の態度に依て處決の覺悟

一五六 小刀細工は禁物……………四四二

我が態度の幾分を打開く——急進合邦論者宋秉燮の組閣を望まず——正々堂々の併合談判

一四六 男女の話聲……………四二四

寢室の外に男女の話聲——警部が迎への使者——伊藤、後藤に口止す——伊藤賛意を表明す——内地に於て兩藤再會

一四七 千歳の遺恨……………四二七

貧乏で終始した伊藤——大倉邸を保養處とす——歐洲識者と百年の長計を定めん——後藤の進言で滿洲行——桂、伊藤の遺志を繼ぐ——明治大帝の崩御で頓挫

一四八 藤公横死の價値……………四三〇

併合の妨害者は露清——諒解を求めん爲に滿洲へ——藤公の死兩國を教ふ——韓廷の恐怖——日本政府の態度を暗中摸索——一進會の合邦建議

一四九 日韓合邦建議……………四三三

秘密に付せられたる韓人の合邦論——統監に送られたる建議案全文——韓帝に奉呈せる上疏文——一進會の組成

一五〇 李完用刺さる……………四三三

合邦論者と反對者——李首相襲撃さる——アルタス氣取の刺客——統監邸の閣臣會議——統監病篤し——事處併合を速進す

一五一 寺内乗出す……………四三六

首相職か統監か——寺内統監を選む——誤解された寺内の性格——新統監併合準備を急ぐ

一五二 併合準備委員……………四三〇

併合に先立つて施行細則を定む——併合準備委員の顔振れ——確定せる細目原案

一五三 時機の問題……………四三三

統監に對する政府の指令——事情に通ぜぬ漸進論——寺内著者の意見を叩く——著者は即時併合斷行論

一五四 腹切り道具……………四三六

即時斷行に自信あり——大皇帝陰謀なきを新統監に示す——寺内の胸中を測り兼ねて韓大官の憂慮——深夜の訪問客——詩酒徵逐の友

一五五 深夜の密談……………四三九

李人植の來訪は勿怪の幸——日本側の態度を捜る爲めの來訪か——李人植、首相に進退の速決を勧告す——進退兩難の韓首相の煩悶——新統監の態度に依て處決の覺悟

一五六 小刀細工は禁物……………四四二

我が態度の幾分を打開く——急進合邦論者宋秉燮の組閣を望まず——正々堂々の併合談判

を望む——止を得ずんば交渉全權の勅任を奏請——李人植愁眉を開く

一五七 實行上の難問題……………四四五

統監の信任を得ば李首相は留任——腹切の覺悟で打開け話——豫備知識に歴史を説く——併合後は王室大官等を好遇

一五八 打開けた優遇問題……………四四八

立入つて優遇法を打開く——李人植に他言を禁ず——聖慮を伺知つて李喜ぶ——四日目の再訪——韓首相談判の速行を望む

一五九 白晝公式の訪問……………四五二

統監に開談を勸む——寺内李首相を招致す——水書見舞の名で白晝來訪——三十分で辭去——記者團一杯くばさる

一六〇 併合の下相談……………四五三

統監と首相との會見——寺内より併合開談を要求——李首相詳細なる條件の提示を求む——併合條件の覺書を手交す——覺書の全文

一六一 國號と王稱……………四七〇

韓國側は大體に於て満足——但し韓國の名と王稱との存続を望む——寺内論破を試む——

大公の尊稱は即諾するを得ず

一六二 趙重應の再訪……………四九〇

趙、首相代理として統監を再訪す——國號と王稱とに就て前回の交渉の返返しを爲す——寺内本國政府へ稟申を約す

一六三 條約前文の修正……………四六一

韓國側回答の猶豫を乞ふ——趙重應來訪——王稱と國號に就き本國政府に請訓——外務省案の條約前文變更を併せ乞ふ——許可の電報來る——愈正式交渉に入る

一六四 内閣員の去就……………四六四

併合條約案——李首相閣員に諮る——各閣僚の人物閱歴——併合自體に反對の李學相——結局内閣一致條約案承認

一六五 宮中府中の反目……………四六七

李首相宮中の了解を得るに苦しむ——寺内に宮中説服を進言す——寺内、宮相及侍從卿を招致す——兩人諒解す——皇帝、大皇帝異議を有せられず

一六六 大事と小策……………四六九

宮中府中の代表者を網羅した御前會義——李學相を敬遠して日本へ特派——著者の建策容

を望む——止を得ずんば交渉全權の勅任を奏請——李人植愁眉を開く

一五七 實行上の難問題……………四四五

統監の信任を得ば李首相は留任——腹切の覺悟で打開け話——豫備知識に歴史を説く——併合後は王室大官等を好遇

一五八 打開けた優遇問題……………四四八

立入つて優遇法を打開く——李人植に他言を禁ず——聖慮を伺知つて李喜ぶ——四日目の再訪——韓首相談判の速行を望む

一五九 白晝公式の訪問……………四五二

統監に開談を勸む——寺内李首相を招致す——水書見舞の名で白晝來訪——三十分で辭去——記者團一杯くばさる

一六〇 併合の下相談……………四五三

統監と首相との會見——寺内より併合開談を要求——李首相詳細なる條件の提示を求む——併合條件の覺書を手交す——覺書の全文

一六一 國號と王稱……………四七〇

韓國側は大體に於て満足——但し韓國の名と王稱との存続を望む——寺内論破を試む——

大公の尊稱は即諾するを得ず

一六二 趙重應の再訪……………四九〇

趙、首相代理として統監を再訪す——國號と王稱とに就て前回の交渉の返返しを爲す——寺内本國政府へ稟申を約す

一六三 條約前文の修正……………四六一

韓國側回答の猶豫を乞ふ——趙重應來訪——王稱と國號に就き本國政府に請訓——外務省案の條約前文變更を併せ乞ふ——許可の電報來る——愈正式交渉に入る

一六四 内閣員の去就……………四六四

併合條約案——李首相閣員に諮る——各閣僚の人物閱歴——併合自體に反對の李學相——結局内閣一致條約案承認

一六五 宮中府中の反目……………四六七

李首相宮中の了解を得るに苦しむ——寺内に宮中説服を進言す——寺内、宮相及侍從卿を招致す——兩人諒解す——皇帝、大皇帝異議を有せられず

一六六 大事と小策……………四六九

宮中府中の代表者を網羅した御前會義——李學相を敬遠して日本へ特派——著者の建策容

れられず——學相病と稱して渡日せず——川上書記官終日學相を監視

一六七 李首相の太腹……………四七二

御前會議開かる——韓國側の全權委任狀——調印前に條約全部御裁可——覺書の分は調印に及ばず——李首相の口頭の希望

一六八 併合條約の調印……………四七五

李首相の三箇の希望條件——寺内快諾す——辭令の交換——併合條約愈々調印——韓帝宮内府急改革なきことを望まる

一六九 三千年の懸案解決……………四七八

七日間で併合條約を了す——得意満面宴席で腰折れ——日韓當事者に論功行賞——著者の辯明

一七〇 米國總領事の質問……………四八三

心配なのは併合後の外交關係——故障を云ふかも知れぬ英米——米國總領事來訪——米國の布哇併合と日米間の交渉——日本は米國の故智を學んで更に平和的

一七一 英國大使の注文……………四八四

總領事の晩餐會——英國大使小村にだまされる——罪は急轉直下の機運——領事裁判權撤回

を求む——同權は併合に因て自然消滅

一七二 大使が總領事を叱る……………四八七

英國大使の要求——關稅の十年間据置——日本政府の据置宣言——汝山の開港——總領事叱付けらる——晩餐に兩人を招待

一七三 英國大使と秀子……………四九〇

日本藝者に大恐悅——變り種の秀子——所謂重大なる大使の訓令——大使贈品授與式——秀子英國大使館で寵愛さる

一七四 國民の無智と外交の失態……………四九四

居留地及永代借地權處分の下相談——彼我交渉委員の顔振れ——難關は外人課稅問題——米國總領事の正義論——獨逸總領事の反對——外人課稅免除は國庫の大損失

一七五 正義の聲……………四九七

思ひ切つた著者の反駁論——時代錯誤の永代借地權——無理解な外國人——英國總領事の憤激——一律平等を主張す——會議は一日休會

一七六 内外人平等主義……………五〇〇

順潮に進んだ二度目の會議——總領事團納稅を承諾す——總督府原案に同意す——獨逸總

れられず——學相病と稱して渡日せず——川上書記官終日學相を監視

一六七 李首相の太腹……………四七二

御前會議開かる——韓國側の全權委任狀——調印前に條約全部御裁可——覺書の分は調印に及ばず——李首相の口頭の希望

一六八 併合條約の調印……………四七五

李首相の三箇の希望條件——寺内快諾す——辭令の交換——併合條約愈々調印——韓帝宮内府急改革なきことを望まる

一六九 三千年の懸案解決……………四七八

七日間で併合條約を了す——得意満面宴席で腰折れ——日韓當事者に論功行賞——著者の辯明

一七〇 米國總領事の質問……………四八三

心配なのは併合後の外交關係——故障を云ふかも知れぬ英米——米國總領事來訪——米國の布哇併合と日米間の交渉——日本は米國の故智を學んで更に平和的

一七一 英國大使の注文……………四八四

總領事の晩餐會——英國大使小村にだまされる——罪は急轉直下の機運——領事裁判權撤回

を求む——同權は併合に因て自然消滅

一七二 大使が總領事を叱る……………四八七

英國大使の要求——關稅の十年間据置——日本政府の据置宣言——汝山の開港——總領事叱付けらる——晩餐に兩人を招待

一七三 英國大使と秀子……………四九〇

日本藝者に大恐悅——變り種の秀子——所謂重大なる大使の訓令——大使贈品授與式——秀子英國大使館で寵愛さる

一七四 國民の無智と外交の失態……………四九四

居留地及永代借地權處分の下相談——彼我交渉委員の顔振れ——難關は外人課稅問題——米國總領事の正義論——獨逸總領事の反對——外人課稅免除は國庫の大損失

一七五 正義の聲……………四九七

思ひ切つた著者の反駁論——時代錯誤の永代借地權——無理解な外國人——英國總領事の憤激——一律平等を主張す——會議は一日休會

一七六 内外人平等主義……………五〇〇

順潮に進んだ二度目の會議——總領事團納稅を承諾す——總督府原案に同意す——獨逸總

領事亦苦情を云ふ——總領事團と記名調印

一七七 世は塞翁の馬なり梟……………三〇三

獨逸總領事記名調印に反對す——米國副領事の強辯——東京に於て協約を追認——柴田家門の杓子定規——禍福はあざなへる繩の如し

一七八 獲 麟……………三〇五

陸奥と著者——陸奥より會見を求む——大病人と思はれぬ元氣——書生に還つて放談高論——著書の長廣舌を喜ぶ——元老大官教育の急務——陸奥の知遇に感じて官海へ入る——官海に於て紅顔白髮に化す

口 給 寫 眞

- (一) 著者——(二) 伊藤博文——(三) 陸奥宗光——(四) ローズベリー——(五) 山縣有朋——
- (六) 李鴻章——(七) ウイツテ——(八) 小村壽太郎——(九) ルーズヴェルト

明治外交秘話

一 日本一の名外交家

霞ヶ關を通るほどの人の必ず見逃さぬであらうもの、一つに、外務省の門内に屹立して往來を睨んでゐる銅像がある。フロック姿の長身、瘡顔、粗髯、隆準、炯眼、總て一癖ありけな相貌、左の手に書類を握り、右の手を中段に構へ、大聲疾呼、今にも天下の大事でも語り出さんす趣きがある。

これぞ、外務省の官吏が、その心から崇敬する外交家を不朽に記念すべく、銘々の私財を齎出して建立した陸奥宗光の肖像である。

かくまで外務省の官吏に追慕された陸奥は、意外にも生え抜きの外交官ではなかつた。今ザツと彼の経歴を挙げると、神奈川縣知事、租税頭、大蔵省三等出仕、元老院幹事、國事犯人、辨理公使(無任所)、全權公使(木國駐劄)、農商務大臣、最後に外務大臣といふだけだ。されば、外交官としては公使及び大臣時代を併せて僅か六年間の経験しか持つてゐない。かういふ一面のみを見れば、彼は如何にも素人外交家のやうに思はれる。併し何ぞ計らん、彼は素人どころか、二十三の若年から早く既に外交官になつてゐたのである。

彼の前後に眞誠の外交家のないやうに——宛かも彼獨りが日本外交家の唯一標本でもあるやう

に、外務省の立關先に、其颯爽たる英姿を長へに留めて、さながら、今日の職業外交家の無能無識を嘲笑つてゐるかに見えるのは、なんとといふ皮肉であらう。

多くの志士が無我夢中で尊王攘夷を叫んでゐた維新當時に、陸奥は早くも英語を學んだり、海外事情を研究したり、又外交的實務にもたづさはつたりした男である。その事情は、後に語ることにして今一寸彼が前後の幾多外務當局者に比して、圖抜けて傑出してゐた所以の重なる功績の一二を擧げて見よう。

第一は、外交機關が暫く藩閥の玩弄物となり、在外公館が金持華族の遊山場となつてゐた弊風を一掃して、適材適所の方針をとつて外務省を全然獨立の地位に置くことに成功したことである。今日なほ外交だけが政黨政派の埒外に立つことができるやうになつてゐるのも、實は陸奥の功績である。

第二は、岩倉や副島や寺島などが第一着に失敗し、伊藤、井上が次ぎに失敗し、大隈が三度目に失敗した上に、文字通り失脚したところの條約改正の難業を、彼が獨力で首尾よく成し遂げたことである。

第三は、東洋最初の鋼鐵艦鎮遠、定遠を新造して、陸奥たる武威を以て我國に臨んだ面積四百萬平方マイル、人口三億五千萬（當時の日本は、面積十五萬マイル、人口三千五百萬）を有する彪大國を

相手に取り、神謀鬼略をめぐらして、意外の奇功を奏し、日本帝國の名聲を世界に轟かしたことがある。

陸奥の刻苦經營の結晶が、後の興國開運の基礎を作つたものとすれば、彼は慥に我國民の永く感銘すべき恩人である。少くとも、眞誠の意味における外交は、陸奥から始まると謂つて可なりである。

二 才學雙全の人

才子學ばず、學者才に乏し、これ世に凡物の多い所以である。併し稀世の大業は、才學雙全の人でなくてはできぬ。昔頼山陽は、

「我を才子と謂ふは我を悉さざるもの、我を能く刻苦する者と謂はゞ、眞に我を知る。」と常々人に語つたさうだ。

我が陸奥も、機略縱横の策士と見做され、また内閣にはひつてからも剃刀大臣などと謂はれたので彼を才物とのみ思ふ人が多い。何ぞ計らん、彼ほど刻苦勉勵した者は、古今東西に多くあるまい。

彼は宮城の獄中で、五年の刑期の殆ど全部を、群籍の精讀に費した。別けてもゼレミー・ベンザムの Principles of Morals and Legislation を自ら筆を執つて翻譯し、本來なら「道德及び立法の原理」

といふべきを「利學正宗」と銘打つて、出獄後に出版したなどは、片々たる才子のできる業ではない。その上、彼は、世人の多くが想像するやうに、決して晩學の人ではなかつた。彼は十五の歳に、早くも志を立て、當時の大儒安井息軒の門に學ぶべく、紀州和歌山から江戸に出た。その故郷を去る時に、

朝誦暮吟十五年。飄身漂泊似難船。
他時爭得生三鷗翼。一舉排雲翔九天。

といふ絶句を作つたほどであるから、この時分から相應に漢學の素養もあり、やがては、青雲に翔らんとする氣概を抱いてゐた。

陸奥が江戸に來たのは、安政五年の秋であつた。この時から三十六年の後に、自ら改正談判の衝に當るべく運命付けられたところの不對等條約が丁度この年に、幕府と英、米、佛、露、蘭諸國との間に正式に調印された。偶會とも奇縁ともいふべきである。

開國か攘夷か、いづれが御國のためなるか、甲是乙非、國論は鼎の沸くが如くに沸騰した時代であつた。彼は學問の傍ら京都、大阪に往來して、薩長土の志士と交を結んだ。曩に吉田松陰が、外國事情を探るために、密航を企て、斬罪に處せられた話などを聞かされた陸奥は、自分も何時かは外國

に渡つて親しくその形勢を視察して見ようと考へた。それには漢學の外に英語を習ふ必要があつた。そして彼が擇んだ英語の先生は、誰あらう星亨その人であつた。

陸奥は弘化元年生れ、星は嘉永三年生れで、歳が六つほど違つてゐたが、星は早くから横濱で英語を修業し、暫く大阪に留まつて若年ながら何禮之の塾で英語科の教師をやつてゐた。陸奥はその時大阪に來合せたので、節を屈して星から英語を教へてもらつたものだ。

兩人の永い親交は、書生時代から續いてゐた。後年星が自由黨の領袖から米國駐劄全權公使に拔擢されたのは、全く陸奥の斡旋に依つてあつた。

陸奥は、維新の始め、明治元年の三月に、外國事務局權判事に登用されて、對露外交の事務を取るべく函館在勤を命ぜられた。彼はこの時、歳僅に二十三、外交官の卵であつた。

併し、陸奥の器は、かゝる僻地でおとなしく俗務を執るべく餘り大き過ぎた。囊中の錐は一寸でも觸れるものがあれば、忽ちに顛脱せねば止まぬものだ。果せる哉、彼は赴任後幾程もなく、當局の軟弱外交に憤慨し、辭表を叩き付けてサツサと逃げ出した。

三 悲憤の血涙

ポーツマス條約で、日本が樺太の半分をとつた時に、ボンチ子は日本といふ子供が鮭の尻尾の方を半分切つてもらつて、うれしがつてゐる漫畫をかいたことがある。實はこんなことにうれしがらねばならぬ事情があつた。

顧みれば、文久二年の昔、外國奉行竹内下野守（保徳）は、全權使節としてセント・ピーターズブルグに赴むき、北緯五十度を日露兩國の境界とし、樺太の半分を日本の領土にしてもらひたいと要求した。それから五年目の慶應二年にも、函館奉行小出大和守（秀實）が全權使節として露都にゆき同じ要求を繰りかへした。

元來樺太は、地形上から見ても、また露國人の一人も居ない時分に、アイヌが住んでゐた事實から推して見ても、日本の領土たることに一點の疑ひもなかつた。併し阿片戦争以來のドサクサまぎれに支那から愛琿條約（安政五年）で黒龍江以北の全土を割取し、次で北京條約（萬延元年）で烏蘇里河を境とする沿海地方までも掠奪して、領土侵略の味をしめた強慾非道な露國が、なんで樺太の半分分けぐらゐで満足しようぞ。

最後に、小出全權とスツレモウホフ亞細亞局長との間に、條約がむすばれた。その骨子は、第一、日露の天然國境たるアニワ海峽を分界とし、樺太を露國の所領とすること。第二、日本政府において

前條を承認せざる節は、これまで通り樺太を兩國の共有地とし、兩國人民の往來勝手たるべきことといふのであつた。

これは露國一流の如何にも露骨な瞞着外交で、詰り原則として樺太は露領であるが、差當り日本でそれを承知することができなければ、暫く之を共有として兩國人の自由居住地とし、結局居住民の多い國のものにしようといふのだ。人の好い小出はマンマとかれのペテンにひつかゝつたのである。露國は、すぐに自國の植民をドシ〜送り出して、事實上樺太を占領してしまつた。

陸奥が函館に赴任したのは、丁度露國が植民政策をもつて樺太を併呑しようとして企てゝゐる眞最中であつた。陸奥は、この條約を見て切齒扼腕し、その屈辱的規定をさんさんに論難した。

「併し、濟んだことは言ふも詮なし。今後は、かれの植民政策に對抗して、我もまた多數の植民を送つては如何。せめてはアイヌを保護すべき適當な官吏を派遣しては如何。」

青二才の口から出た小生意氣な忠言は、上官の逆鱗にふれずに止むべくもなかつた。陸奥の耳には、聞くに耐えない怒罵の聲が頻りに響いた。

陸奥は、その夜寝もやらず、悲憤の涙を飲みつゝ、筆を走らせた。

「庸劣の凡物などが、僥倖を以て重任に當り、或は門地に依り顯職に進み候様の儀有之候ては、復古

の美事、萬代の基本たる今日の朝政に於いて安からざる御大事と奉存候。尤も當今賢哲在位、才能在職、固より御選任に御欠失有之間敷候へども、宗光自己の不才を省みず推考仕候へば、千百中或は一二誤つて選任に膺り候もの有之間敷とも申難、非器在職の害は、遺賢在野の害なきに如かずと奉存候。

言々句々、憂世慨時の熱血がにじんでゐる。かれはこの意見書と共に、一片の辭表をたゞきつけて故郷に歸つた。

さすが藩公は、かれの偉才を認めて、委ぬるに藩政改革の任務を以てしたが、かれの抑へんとして抑へがたき鵬翼は、何時も大空に向つて飛ばんとする氣勢を失はなかつた。

明治三年の春に、かれは藩公に願つて和歌山藩歐洲執事といふ名儀で洋行することとなり、英、佛、獨諸國を遊歴し、その政治や兵制を視察し、一年二ヶ月を費して明治四年の夏に歸朝した。その年に恰も廢藩置縣が實施されたので、かれは、外國人と交渉の最も多い神奈川縣知事に任ぜられた。

四 不見轉の印だ

婦女子のやうな顔に、稜々たる氣骨をつゝむ男もあれば、鬼のやうな面構へで、案外やさしい心

の持主もある。我が陸奥宗光に至つては、風采と氣性と兩つながら豪傑たる特徴をそなへてゐた。

肺病のために一體に瘠せてはゐるが、六尺ゆたかの高い體、色飽まで黒く、而も圖抜けて長い顔、コーカシアン族とも覺ほしい鼻柱、隼を欺くやうな鋭い眼、それに口を開けば滔々とほとぼしる懸河の辯舌、是非を顛倒しながらも、却てさもあるらしく思はせる程の智略、好んで難關に當らんとする膽力、これ等が懸値なしに、また割引なしに、陸奥の人物を價付ける正札であつた。この外に、かれは比類稀なる特性を持つてゐた。それは極度の瘠我慢である。かれの負をしみと來たら、深刻でしかも猛烈であつた。これは如何なる突發事件にも狼狽せぬのみか、むしろ禍を轉じて福とするといふ美點となることもあつた。

こゝにかれの傲岸不屈な半面を髣髴すべき奇抜な挿話がある。それは、かれが神奈川縣知事をしてゐた時分のことである。

陸奥は、かの有名な待合富貴樓の女將お倉と懇意な間柄であつたので、この女將の艶容、牡丹にも比すべしとて、陸奥は、牡丹は花の富貴なるものといふ周茂叔の説にちなんで、樓名を付けてやつたのである。よくその奥座敷に陣取つて、女將をはじめ年増の藝者を相手に、赤だ青だなどとさわいだものだ。この時ばかりは、知事閣下も、襦袢で大あくらといふさばけかたであつた。

或晩のこと、大分興がのつて、一同がいつになく緊張して来た。するといきなり一人の藝者がクスリと笑をもらした。その隣りがまたクスリ。女将までが吹き出した。それと気がついて、あわて、逸物を匿すやうでは、話の種もなくなるわけだが、陸奥は一向に澄ましたもので、身動きさへもしなかつた。

女将が笑ひをしのんで、今まさに骨牌をくばらうとする一刹那、陸奥は甲走つた大聲を張り上げて「不見轉の印だ。」

と怒鳴りつゝ、一ときは兩股をひろげ、苦い顔をしてきつと一座を見まはした。

一同は、かれの氣勢にのまれて、大真面目で、

「ハイ。」

と言つたきり。さしもの氣轉者のお倉さへ、この句がつけず、たゞ目を白黒するばかりであつた。これは、後年、お倉自身の物語である。

何人でも、瘡我慢や負惜みのないものはないが、陸奥のそれに至つては、脱俗超凡、ほとんど人の意表に出づるものがあること、おほむねこの類であつた。彼は此の氣合で外交をやつたのだ。

五 政府顛覆の陰謀

たゞ單に政府顛覆をくはだてて、五年の禁獄に處せられたとだけ聞けば、陸奥は、如何にも危険人物で、謀反性の權化のやうにも思はれようが、實は、その陰謀は、陸奥の本心から出たわけではなく、その間には、止むにやまれぬ深い仔細があつたのだ。

陸奥が西南戦争中に、元老院幹事として京都の大本營に出張してゐた時に、たま／＼土佐派の大江卓、林有造らが、西郷の擧兵に呼應して政府顛覆の陰謀をもくろんでゐたので、陸奥は、彼等と氣脈を通じて内部から事をおこさうとした。と、かういふのが表面の事情であるが、これでは陸奥が矢張り叛逆性を帯んだ危険人物になつて了ふ。陸奥はそんな人物ではない。

本當のことを云ふと、陸奥は、木戸孝允の意見に推服して、その手先となつて働いたにすぎないのである。

木戸は、岩倉一行と歐米を視察した結果、わが國を文明の域にすゝめるには、是非とも立憲政治を急せねばならぬと考へ、歸朝後直に民選議院設立の献白をした。然るに、依然專制主義を固守してゐた岩倉、大久保らは、尙早論をとなへてそれに反對した。

木戸は憤慨のあまり、西郷の擧兵を機會として内閣顧問の職を辭してしまつた。その時に、木戸は平生信頼してゐた陸奥を呼びよせて意中を語つた。

「大久保はえらい人物ではあるが、何故か伊藤、井上の如き小才子にまどはされて、大局を見るの明を失つてゐる。予は到底彼等と責任を分つことができないので辭職した。」

豫てより木戸の立憲主義に共鳴してゐた陸奥は、如何にも御尤もと同情を表したのち、

「西南戦争を利用して、進歩派の板垣、後藤らと結託すれば、岩倉、大久保一派を排斥することはさまで難事でもあるまい。然るときは、尊公を首脳とする立憲主義者を以て新政府を組織することに及ばずながら微力を盡す御座らう。」

と誓つたのである。

陸奥は、後年、著者に當時の事情を語つて聞かせてくれた。勿論自己辯護の動機からであつたらう。

「吾輩は國事犯の汚名を蒙つたが、それも君國のためを思ふ一念から起つたことぢや。試みに思へ、歐米の強國が、理不盡な治外法權と關稅制限とで、我國の手足を束縛してゐる時代にあつて、焦眉の急務ともいふべきものは、條約改正の一事を成しとけることではないか。この目的を達するには無能無識の藩閥政治家や外交官やにかへるに、特殊専門の學識能力ある有爲の人才をもつてしな

ければならぬ。それには、先づ以て頑冥不靈な守舊派を一掃する必要があつた。予はたまく木戸や大江や林などと所見を同じうしたまでのことぢや。」

事の真相はこの通りであつたに違ひない。その中に西南戦争の形勢は次第に賊軍の不利にかたむいて行くので、機敏な陸奥は、事既に去れりと見て、擧兵の運動を中止して、京都から引返し、何喰はぬ顔をしながら、依然として元老院に出仕してゐた。

六 大久保の大度量

一寸こゝで河野利鎌を引合ひに出す。彼は、當時元老院議官として陸奥と同僚であつたが、後年、松方内閣の農商務大臣、内務大臣兼司法大臣、伊藤内閣の文部大臣などに歴任したほどの人物で、常に己の才幹を誇つてゐた。ところが、議論好きな陸奥のために何時も遣り込められるので、河野は憤慨の餘り、いつか機會があつたら陸奥を排斥してやらうと待ち構へてゐた。

西郷、板垣らと共に職を辭して野に下つた林有造、大江卓等は、西郷と通謀し、兵器を外國人から買入れて、手ツ取り早く一擧して當路の大臣を擧殺せんと陰謀をくはだて、未だ事を發するに及ばずして逮捕され、十年の禁獄に處せられたのであるが、審理の際に、大江も、林も、陸奥との關係を

白状しなかつた。

併し、陸奥が元老院の符號を用ゐて大江、林らと往復した數通の暗號電信が、端しなくも河野の手にはひつたからたまらない。河野は奇貨措くべしと雀躍りして喜んで、時を移さず、大久保利通の屋敷に駈けつけた。

「陸奥が土佐派一味と氣脈を通じて、政府顛覆の陰謀をくはだてたといふ形跡は、歴然としてもう掩ふことができなくなりました。別けて大江、林らを逮捕した今日、その連類たる陸奥獨りを放任して置くわけには参りませうまい。」

河野はかう語りながら、證據書類を大久保の前に出した。司法と行政との區分がまだ明かでない時分のことであるし、殊に國事犯については、政府の命令がなければ、檢察官は勿論、裁判官でも自由に動けなかつた時代であつたから、河野は先づ大久保を説いて、陸奥の處分を促さうとしたのである。

征韓論の結果、西郷とその一派とが政府を去つて以來は、大久保の威望は、隆々として滿朝を壓倒し、身は三條太政大臣の下に内務卿たるに過ぎなかつたが、政府の實權はほとんど彼の手に握られてゐるたから、陸奥の運命は、大久保の一言で、吉凶孰れとも決するのである。

由來、沈黙寡言の大久保は、河野の言葉が終つても、暫く何も言はずに考へ込んでゐた。やがて河野の出した暗號電信とその譯文とを取上げ、それに一瞥をもちくねずに、平生祕密書類を入れる手提カバンの中にそのまゝ無造作に投げこんだ。さうして重い口を開いて、獨り言のやうに語り出した。

「陸奥のことについては俺も大體知つてゐる。風雲に乗じて功名を急ぐは、彼のやりさうな事ぢや。併し、一度は思ひ立つたにもせよ、時の非なるを悟つて中止したとすれば、強いて追及するにも及ぶまい。」

大久保がかう言ひ出しては、もうどうすることもできない。河野は返す言辭もなくて、そのまゝ引き下つた。

七 陸奥の處刑

無残なるかな、一世の英傑大久保利通は、明治十一年五月十四日、登廳の途中、紀尾井坂で、石川縣人島田一郎以下六人の刺客に襲はれて、白刃亂打の下に慘殺された。

先頃、大久保の實子で、現に内大臣をしてゐる牧野伸顯に遇つた時に、談たましく紀尾井坂遭難の事に及ぶと、牧野は、

「それに就いて、取り別けて残念な事がある。父は常に自分ほど能く西郷の心事を知つてゐる者は外にあるまいから、その朝敵と呼ばれる冤を雪ぐ爲に、西南戦争の経緯を書き遺して置かうといつて、當時の學者重野安繹を招いて、口授の筆記を頼んだ。それから二三日後に殺されたので、此の事業も暗から暗に葬られた。」

と涙を浮べて語つた。畢竟、島田等は、西郷の仇を打つ積りで、實は西郷の唯一無二の辯護人を倒してしまつたのである。惜しい事をしたものだ。

大久保が亡くなると、政府の實権は、薩派から長閥に移つて、工部卿伊藤博文が内務卿の椅子を占めることになつた。

これは必ずしも藩閥關係によるものではなく、伊藤は、人物として大久保の後繼者たるべきものと一般に囑望されてゐたのだといふ見方もある。伊藤が自藩の木戸に背いて、始終薩藩の大久保に親近してゐた事實から見れば、或はこの觀察の方が正しいかも知れぬ。

その内情は兎も角として、大久保の握りつぶした陸奥の陰謀に關する證據書類は、大久保に代つて内務卿となつた伊藤の手に移つた。

大久保が暗殺された時に、その身邊に祕密書類の入れてある手提カバンが残つてゐた。その祕密書

類は、他の公文書とともに、後繼大臣たる伊藤に引繼がれたのであるが、その中に、先に河野から大久保の手に渡された陸奥陰謀事件の暗號電信と、その譯文とがまじつてゐた。

伊藤は、勿論大久保ほどの雅量を持合せてゐなかつた。大久保のえらかつたのは、恰度八幡太郎義家が自分を兄の敵と付けねらつてゐた安倍宗任を親近して少しも疑はなかつたと同じ點にある。

藩閥政府を顛覆せんとする陸奥の企ては、言ふまでもなく當路の實權者たる大久保を眞つ先にたふすことであらね

に對して、祝辭を述ぶることよろしくあつて、
河野敏謙は、大久保の歿するや好機逸すべからずとし、すぐに伊藤を訪ひ、その榮轉



「さて陸奥の一件であります、一旦謀叛を中止したと言ひながら、かれの終局の目的が、藩閥政府打破にある以上、その危険性は、今なほ消滅してはをらぬ。況んや罪跡既に明かなりとすれば、

法律上からいふも、また官紀上からいふも、到底放任して置く譯には参りませぬまい。」
河野は、如何にも尤もらしい理窟を並べたて、自分が先きに大久保に差出した書類について伊藤の注意を促した。さなきだに小心な伊藤は、容易く河野の進言に動かされてしまった。

「宜しい。罪跡明かなら、最早や許す譯に行きまい。兎も角も、玉乃に命じて法律上の研究をさせて見よう。」

玉乃は名を世履といひ、僧侶出身ではあつたが、學識深遠、智慮潤達、當時大審院長として赫赫たる名聲があつた。しかし、彼は飽くまで冷酷な裁判官であつた。その目には、事實と擬律との外には何物も映じなかつた。

元老院幹事たる陸奥は、哀れむべし、間もなく刑事被告人としていまはしい法廷に立つ身となつた。

八 簡單不明瞭の判決

さすが老練な大審院判事玉乃世履も、陸奥の如き傑物を刑事被告人として審問したのは始めてであつたので、やゝもすれば、鋭い陸奥の舌鋒に言ひまくられることも度々あつた。それかあらぬか、政

府の大官がその在職中に大それた叛逆をくだつたといふ重大事件に對して、玉乃の下した判決文は僅二百四十一字に過ぎない簡單にしてしかも極めて不明瞭なものであつた。

和歌山縣 士族 陸奥 宗光

其方儀明治十年鹿兒島縣賊徒暴擧の時に際し、元老院幹事の職を以て京都府行在所御用出張中、大江卓が林有造と共に兵を擧げ政府を顛覆せんとするの企てを承知し、又岩神昂より重臣暗殺を謀ることを聞き、同人等が暴擧の勢讎を假りて、政府を改革せんと企て、大江卓と通謀し、明治十年四月二十一日京都より暗號電信を以て卓に約し置きたる密謀の報知を促し、その翌二十二日卓が電信私報の禁令を犯し、元老院の暗號を用ひ詐稱官員の電信を以て擧兵の密謀を牒合する報知を得て卓の下阪を待受たり、右科に依り除族の上禁獄五年申付候事

明治十一年八月廿一日

大審院

「政府を顛覆せんとするの企てを承知し」といひ、「擧兵の密謀を牒合する報知を得て卓の下阪を待受たり」といふので、罪科が構成されてゐる。大江はつひに下阪しなかつたが、若し下阪したならば、必ず陸奥も、それに加擔して擧兵の密謀を實現したに違ひないといふのであらう。怪しい判決もあれ

ばあるものだ。

こゝにおいて、河野は、マンマと陸奥排斥の宿望を達することになった。かれは、平の元老院議員から元老院幹事に進んで、陸奥の跡釜にすわることになった。

何事でも後から見ると、いろいろな感想が浮んで来るものだ。若し河野が陸奥を嫉視しなかつたらば、また若し大久保が暗殺されなかつたならば、陸奥は、あらひは處罰をまぬかれたかも知れない。同時に彼れはあれほどの大人物となれなかつたかも知れない。

無慈悲にも陸奥の舊悪を糺弾した伊藤は、陸奥が五年後に出獄した時に、今度は罪ほろほしの心からでもあつたらう、眞先きに陸奥を呼び寄せ、前科者たるかれを大官に取り立てたのみならず、飽までかれを信任して、永く國務を共にしたのである。

何時の世の中も、塞翁の馬だ。陸奥に仇せんとした河野は、結局隠れたる陸奥の恩人であり、また河野の言ふことを聽いて陸奥を處罰した伊藤は、現れた陸奥の恩人であつたのである。

九 兩雄の密談

舞臺は、陰鬱な法廷や監獄から一轉して、白砂青松の場面に移る。

こゝは清らかな海氣に、満身の汚塵もおのづから拭去らるべく思はる、湘南の濱邊、松風の音より外に聞ゆるものなき閑室に、世の常ならぬ二人の人物が、相對して無量の感慨にうたる、ものゝ如く手を振り肩を昂けつゝ、頻りに語り合つてゐる。

主人と覺しきは、圓顔低鼻、風采は餘りあがらぬが、何となく侵しがたい威容をそなへてゐる。客らしい他の一人は長面瘡身、満々たる霸氣をその炯々たる眼光にをさめてゐるかに見える。

この兩人は何者ぞ。その一人は藩閥政府の顛覆を企て、五年の禁獄に處せられ、特赦の後歐米に遊んで、この頃歸つて来たばかりの陸奥宗光、他の一人は大久保刺され岩倉逝き、三條退いて後は、天寵を一身に集め、今や時めく内閣總理大臣として、權勢並びなき伊藤博文その人である。

陸奥自身が常に述懐してゐた通り、その監獄入りは、かれに對して、精神修養と學問研究とに絶好の機會をあたへた。かれはその間全然俗界から離脱して、沈思黙想にふけり、又和漢洋の群籍を心ゆくまで精讀することができた。かれが出獄後に出版した「利學正宗」はゼレミー・ベンザムの名著を翻譯したものであるが、原稿を三度も書きなほしたといふほどで、その刻苦の跡がアリ／＼と浮かはれる。それから三年間も歐米を遊歴して、世界の形勢を視察して来たのであるし、わけて藩閥出身の大官が大抵無學者ばかりで、洋書などを讀み得る者のまれな時代であつたから、陸奥は、神奈川

縣知事、元老院幹事、國事犯人の履歴から、急轉して政治家の學者、學者の政治家として、朝野兩方面から多大の囑望を受けてゐたのである。

伊藤が湘南の別荘に陸奥を招いたのは、明治十九年の秋であつた。伊藤はやがて口を開いた。

「世の變遷は、なんと早いものではないか。君が專制政府の顛覆を企て、からまだ一昔にもならぬうちに、立憲制度實施の準備は着々として進み、明治十四年十月に國會開設の詔勅下り、不肖その翌年を以て歐洲に赴き、各國の憲法を講究し、歸朝後制度調査局總裁として我憲法の起案に従事したが、その欽定發布も近く二三年に迫つてゐる。」

伊藤は、一わたり手柄話をしてから、少しく眉をひそめた。

「たゞこゝに憂ふべきは、劣等國の標札とも見るべき不對等條約がそのまゝ存續してゐることである。一日も早く條約改正の宿望を達するのが、急務中の急務である。この方面においては是非とも君の手腕を借ねばならぬ。」

伊藤は、豫め時の外務大臣井上馨と相談して、陸奥を外交界に引き上げることにくめてゐた。さうすれば、陸奥が政黨に走るの危険を防ぎ得るのみならず、その奇才を利用することもできるので、一舉兩得であると考へたからである。

早くもそれと察した陸奥は、月並の辭退などをせず、率直に答へた。

「お説の通り、方今國事多端の砌り、不肖の力にたえることならば喜んで犬馬の勞をとりませう。」

陸奥は差し詰め辨理公使に任ぜられ、翌年全權公使に昇進して米國に行つた。間もなく伊藤と井上とは條約改正の談判に着手した。しかし、それは失敗すべく運命付けられてゐた。伊藤がお世辭のつもりで言つたことが、眞事となり、結局この事業は、陸奥の手腕を借りねば成し遂げられなかつたのである。

一〇 伊藤の歐化主義

目的は手段を美化するといふが、伊藤、井上等は、條約改正の目的を達するために、外人の歡心を買ふ手段として、盛んに歐化主義を鼓吹して、自ら先達となつて、淺ましい假裝舞踏會などを頻繁に催したものだ。

内外男女の交際を親密ならしむべき舞踏場として、今の華族會館が、當時聞ても淫逸な鹿鳴館といふ名の下に特設されたのであるが、夜會の度重なる中に、外人の賞讃を博さうとする期待は見事裏切

られて、かへつて忌はしい醜聞が、次から次へと傳へられるやうになつた。

伊藤首相と戸田伯夫人とが、人のない一室で歡談に夜をふかしたとか、伊藤は、その罪を償ふために、戸田伯を全權公使に推舉したとかいふ噂さへたつた。また何時とはなしに、伊藤は下田歌子とも怪しいといふ評判が、あだかも天下の一大事でも起つたやうに喧傳された。

眞實のために——伊藤のためではない——こゝで一寸辯明する必要がある。

伊藤は、英雄好色の標本でもあるやうに、始終新聞などにくどくどしく書きたてられてゐた。かれも多少自暴自棄になつた氣味もあらうが、名もない不見轉藝者などを官邸に引き入れて、人前をもはゞからず平氣で酌をさせる癖があつた。

かれは、藝者ばかりでなく、貴婦人でもお構ひなしに、所かまはず引きつけて、夜の一時二時頃までも談笑の相手をさせたものだ。ある晩のこと、ふと女の話が出た機會に、著者は、

「歌子にもだいぶ御熱心であつたやうに世間で噂してゐましたぞ。」と探りを入れて見た。すると伊藤は、例の調子で、

「馬鹿を言へ。」と軽く笑ひながら、語り出した。

「歌子といふ女は實際えらい奴ぢや。博學多才でもあるし、立派な見識も持つてゐるし、それに辯舌もなか／＼達者なもので、男ならば差し詰め大臣たるべき資格をそなへてゐる。よくわしの處へ来て、一時二時頃までも話したものでぢや。」

深夜の一時や二時は、伊藤にとつては、宵の中であつた。かれは、夜の十時までは公私の事務をとる。それから寢酒を飲みはじめ、大てい二時ごろまで續ける。それから湯にはひつて、床につき、朝は八時に起き、晝飯後一時間寝るのを例としてゐた。併し、世人は、かういふかれの奇習を知る由もなかつた。況やその光風霽月の如き無邪氣なる胸襟においてをやである。

戸田伯夫人との浮名も、その實、口さがない京童のたわごとに過ぎなかつた。舞踏の合間々々に氣の合つた相手を連れて別室に入り、パンチカビールかで、喉の渴きを濕ほしながら話し合ふのが夜の例となつてゐた。戸田夫人は、一際目立つ美貌の持主であつた上に、なか／＼交際が上手であつた。それには伊藤は總理大臣として飛鳥も落す勢ひをもちながら、婦人には殊の外愛嬌者であつたから、苟くもかれから聲をかけられると、たとひ虛榮心のない婦人でも、大ていは伊藤の話相手になるのを名譽と心得てゐたのである。戸田夫人は、單に伊藤の話相手となつてゐるに過ぎなかつた。

男女七歳にして席を同じうせずなどといふ、東洋氣分の抜けない明治二十年頃の世人が、單に男女

二人が別室で對話してゐたといふ事實からして、あらぬ疑ひを起したのも無理ではなかつた。併しこれを一々辯解することはもとより不可能事であつた。伊藤はかはいさうに、たうとう 風俗壞亂の元兇と見なされてしまつた。それに捲ぞへをくつた女性もいゝ面の皮であつた。

一一 條約案作製の苦心

伊藤、井上等が無闇に歐化主義を振廻し、洋館の建築をすゝめ、洋装の流行を促し、鹿鳴館で盛んに舞踏會を催しなどしたのは、それを餌にして條約改正といふ大魚を釣らうといふ目算であつた。

一面において、かういふ空騒ぎをしてゐる間に、他方において、外務大臣井上馨は、明治二十年の五月に、いよく條約改正案を作り、在東京各國公使に對して談判を開始した。

この改正案は、井上案といふよりも、むしろ伊藤案であつた。外交は、井上よりも伊藤の方が得意であつた。

伊藤は、幾度も海外を遊歴し、ジスレリやビスマルクなどと親しく議論を上下したとて、自ら外交通を氣取つてゐた。わけて、かれが憲法調査に出かけた四度目の洋行の時に、アレキサンドル三世の踐祚祝賀式に參列したので、露國の事情にも精通してゐると威張つてゐた。

然るに井上の方は、維新前に一度、しかも二三ヶ月ばかり、伊藤と共にロンドンに滞在し、それから明治十三年に一寸歐洲を漫遊したゞけで、英語もろく／＼わからなかつた。そこで、重大な外交問題になると、いつも伊藤と相談したものだ。

この條約改正案の作製について、伊藤は、自身で、霞ヶ關の外務大臣官舎に出かけ、井上と額を突き合せて研究したものだ。後年著者は、その苦心談をよく伊藤から聞かされた。

「外國人の方では、大切な生命、財産、名譽を擧げて日本の法權に委ねることをひどく不安に感じてゐたし、又日本人の中にも、氣の知れない外國人に内地雜居を許すことを危険視する者が多く、二重の難關が前後に屹立してゐたから、双方を満足させる條約を案出するのは、なか／＼容易の業ではなかつた。」

伊藤は、感慨無量に堪へないやうに、手を額にあて、目を閉ぢて、しばし當時の苦境を追想するものゝ如くであつたが、やがて言葉を續けた。

「井上は、明治十五年から條約改正調査會を設けて、各國公使の意向をも參酌して、種々改正案の研究に努力してゐたが、どうも満足な名案がでなかつた。

各國公使の言ひ前は、日本が精神的に他の文明國に劣らぬ地位に在ることは諒とするが、物質的

進歩において、幾多の欠陥があるといふのである。かういふ口實を防ぐために、吾等は歐化主義を唱へ出したのである。夜光の珠でもボロに包んで置いたのでは、他人がたゞの小石と見るのは無理はないと思つたからだ。

その中に、時機もだん／＼熟して来たので、明治十九年の夏から、吾輩は井上と二人で改正案の考案をやり出した。併し、腦漿をしほつて考へれば考へるほどむづかしくなる。こゝがわるい、あそこがいかと、だん／＼行きつまる。すると、頭が熱して来て、ほうとなる。もう何にも考へられなくなる。そこで、井上と一緒に湯殿へ行つて水をかぶる。又考へる。又熱する。又水をかぶる。それを幾たび繰り返したか知れなかつた。」

兩雄が、かくも考へに考へ練りに練つて、こしらへ上げた改正案は一體どんなものであつたか。

一二 極秘の條約案

お隣の支那が、今まさに不對等條約の改正に狂奔してゐるのをわれ／＼は無關心に眺めてゐるが、伊藤、井上等は、今より四十年前以前に、同じ苦學をなめてゐたのである。その時分の日本は、恐らくは、今の支那よりもヨリ以上に輕蔑されてゐたに相違ない。されば、談判また談判で、努力と時間と

を空過し、終局の目的を達するまでには、岩倉公の洋行以來、二十餘年といふ長い星霜を費したものだ。

言ふまでもなく、條約改正の重要項目は、外國の治外法權を撤廢し、我國の關稅自主權を回復することであつた。

伊藤、井上等は、何時も各國の代表等と會合する度に、議論だけは正々堂々とやつたものだ。

「外國領事が我國の領土内に於いて、自國人に對する裁判權を執行するは、獨立國たる日本の體面をきずつけるものである。また歐米の方では、日本品に對して五割も七割もの重稅を課するに、日本の方だけが外國品に對して五分以上の關稅を課することができないといふのは、たゞに理不盡なるのみか、さなきだに貧乏な日本に大損失を與ふるものである。常に正義人道を口にする國々の考慮を切望する。」

この正しい議論には、何れの公使も對抗することができなかつたが、勘定高い外國人等は、治外法權の方は兎も角も、關稅制限を除く時は、日本が勝手に高率な關稅を外國品に賦課し、外國の對日貿易に、忽ち不利な影響を及ぼすに違ひないといふ懸念から、何時も言を左右に託して、なか／＼相手にならなかつた。

そこで、伊藤、井上等は、二兎を追うては一兎をも得ることができないから、一つづつ片付ける方が得策だと考へたのである。先方に難色ある關稅問題を後廻しにして、第一着に、治外法權の一本槍で進むことにした。

それが世にいふ井上の條約案である。この案は、たうとう極秘裡に葬られてしまつたが、會て著者が、井上から聞いたところによると、その骨子は左の四ヶ條であつた。

第一 日本政府は、現在の居留地の外、通商上の要地を外國人の住居の爲めに開放すること

第二 外國人に係る事件にして、重罪以上の刑事事件及び五百圓以上の民事訴訟は、當該國領事官之を裁判し、輕罪に當る刑事事件及び五百圓以下の民事訴訟は、日本裁判所に於て之を管轄すること

第三 日本の制定する民刑事に關する法令は、總べて外國代表者に豫告すること

第四 此の規定は十二年間實施し、其の後に至り、領事裁判權を全然撤廢すること

これは頗る巧妙な考案であつたが、日本法權の一部を外國領事官に委託する形となるので、世間では其の内容を知らずに、日本の裁判に外國判事を參加させるものと誤解した。

一三 谷干城の獅子吼

井上が、條約改正の談判を開始してからまだ二月もたぬ七月二十日に、農商務大臣谷干城は、突然自ら参内して、一書を閣下に奉つた。その中には、

「伏して惟みるに、外國領事官が帝國の領土内において裁判權を執行するは、我獨立國たる體面を傷つくるものとす。これ條約改正の必要ある所以なり。然るに、今次の改正案によれば、我神聖なる裁判權の一部を外國領事官をして執行せしめんとするもの、如し。是れ豈に國辱の更に甚だしきものにあらずや。」

といふやうな激越な字句があつた。彼は、越えて二十六日に至つて斷然職を辭して野に下つてしまつた。

谷は、熊本籠城の勇將で、由來頑固一徹の男であつた。伊藤は、これより先き、かれの頭をやほらせる考へで、在官のまゝ歐米視察にやつたのであるが、伊藤の思惑は全然裏切られて、谷は以前よりも一そう烈しい蠻カラになつて歸つて來た。

これは伊藤から直接聞いたことであるが、谷が歸朝後最初の閣議に出席した時に、丁度大臣官舎の

新築案が出て、やがて大藏大臣松方正義が圖面と豫算とを説明しはじめた。すると、谷は憤然として色をかへて怒鳴り出した。

「諸公は、歐化政策とかに熱中してをられると承はるが、拙者の見て来た歐米の文明は、日本が追いつくにはあまり遙に進み過ぎてゐる。その上、われ百歩を進めば、かれは二百歩も三百歩も進むほどの精力を持つてゐる。故に同じ道では到底競争ができないから、われは寧ろ別の方向をとりその獨得の武勇を以てかれの文明に對抗するより外はない。それには勤儉力行の一途あるのみだ。然るに今民の膏血をしほつて無用の官舎を作るとは何事か。」

さすが濃厚な松方も、この時ばかりは眞赤になつて怒つた。

「谷さん、言葉が餘り過ぎはせんか。民の膏血とはなんです。法律、規則に依つて徴收した正當の租税では御座らぬか。」

「租税か膏血か。どこに違ひがありますか。」

「それでは貴公は吾輩を收斂の臣とでも見立てるのかッ！」

松方はますます憤慨する。谷は敵本主義で、松方などは眼中になかつたが、松方を相手に内閣の政策を攻撃し始め、辭職の決心をさへ言明した。

伊藤は、谷の退出する時に、老婆心から一應忠告を試みた。

「人各々見るところを異にする。今君が他の閣僚と相合はずして内閣を去らるゝは、是非もない次第であるが、併し、君は野に下つても、依然陸軍中將の軍籍にある身分であるから、自重して政論の渦中に投ずるが如きことのないやうに、慎まされたい。」

棄鉢になつた谷は、伊藤の忠告などは、うはのそらに聞き流して、あくまで政府反對の態度をとつた。伊藤は、それが餘程癪にさはつたものと見えて、その時の感想をよく人に語つた。

「谷の出身、閱歴、思想から見れば、かれのとつた行動は無理もなかつたので、吾輩は、飽まで好意を以てかれを待つたのであるが、かれは吾輩の忠告を聞いて承知したと言ひながら、官舎に歸ると立關に押し寄せた群衆に對して、滔々と政府攻撃の演説をやりをつた。けしからん奴ぢやつた。」

谷の辭職が動機となつて、宮中顧問官勝安芳や、法律顧問ボアソナードまでが、改正案反對の意見書を提出し、民間においては、板垣退助、後藤象次郎、林有造等が急先鋒となつて騒ぎ出した。まるで蜂の集でもつゝいたやうに、物情が騒然となつた。そこで、疳癩持ちの井上は、すぐに各國公使との談判を中止して、九月十七日に外務大臣の職を辭した。

一四 大同團結

外務大臣が條約改正で失脚すれば、連帶責任で内閣が瓦解するのが本筋であるが、まだ議會のできぬ時代であるから、井上一人が辭職したわけで、眞誠の責任者たる伊藤は、平氣で踏み止まつたのみならず、井上にかはつて外務大臣を兼任した。

併し、條約改正の失敗は、さかのほつて歐化政策に對する反感となり、民論は、井上一人の辭職を以て鎮靜すべくも見えなかつた。

この形勢に乗じて、頭をもたけて來たのは、當年の惑星とも見るべき後藤象次郎であつた。

後藤は、昔木戸、大久保などと肩をならべた傑物であつたが、征韓論の起つた時に、西郷の意見に賛成して野に下つてからは、蛟龍空しく池中に潜んで、雲を望んでゐたのである。今や國論沸騰して一齊に伊藤内閣の攻撃に向つたので、かれは時來れりとし、その先頭にたつたのである。

後藤は明治二十年十月三日、各政黨の領袖及び有志を芝公園の三緣亭に會し、得意の雄辯をふるつたが、言々句々壯烈をきはめ、滿堂を感動せしめた。

「今や内外多難、眞に國家存亡の秋なり。然るに當路者恬然として之を顧みず。漫りに歐化政策に没頭して、長夜の宴を張り、醜怪なる舞踏に耽るのみ。この時に當り、在野の政黨は、宜しく舊來の感情を一擲し、小異を捨て、大同に就き、一致團結、全力を擧げて國難の救済に赴かざるべからず。」

世人がこの運動を呼んで大同團結と稱したのは、「小異を捨て、大同に就き」といふ後藤の聲明にちなんだのである。

伊藤は、集會條例の外に保安條例を發布し、峻烈に民論壓迫を試み、片岡健吉、中島信行、大江卓、星亨、林有造、島本伸造、中江篤介、竹内綱、尾崎行雄以下五百七十餘人に、都門外三里以上の地方に退去を命ずるなど、今から見れば、随分馬鹿けた高壓手段をとつた。

併し、滔々たる天下の逆潮は、隻手のよく防ぎ得べきところでなく、政府反對の氣勢はますます險悪におもむくばかりであつた。さすがの伊藤も我を折らざるを得なかつた。

あたかも好し、かれが英國のブライヴィイ・カウンスルにならつて創設した樞密院の官制が公布（明治二十一年四月廿八日）されたので、自らその最初の議長に轉じ、總理大臣の職を、閣僚たる農商務大臣黒田清隆に譲つた。伊藤は豫め黒田と相談し、民論の鋭鋒を挫く爲めに、大同團結の首領後藤象次郎を内閣に引入れて逋信大臣とした。政敵を懐柔するのが、伊藤の慣用手段であつた。

圓轉滑脱とは、伊藤の出處進退を形容する言葉であらう。かれは明治元年五月廿三日(兵庫縣知事となり、明治六年十月廿五日)に参議兼工部卿となつてから、如何なる場合にも、官を退いて野に下つた例がなく、必ず自らその通路を開拓したのである。

かれは、何時も手盛りで要職の最初の上長となるのを得意としてゐた。明治七年七月七日(出来た地方官會議の最初の議長、翌年七月三日)に出来た法制局の最初の長官、明治十四年十月廿一日(出来た参事院の最初の議長、明治十八年十二月廿二日)に太政官が内閣と改まつた時の最初の總理大臣兼最初の宮内大臣、それから此の時、樞密院が出来たので、そのまた最初の議長となつたのである。

一五 御前で口論

波瀾逆まく政海を縦横に泳ぎまはつて、一度も溺るゝことのなかつた伊藤の處世術は、たしかに巧妙であつたに違ひないが、實は文武双全の明治天皇が、かれの背後におはしまして、かれをあだかも師父の如くに信任し給うたのが、かれの地位を磐石の如く安全ならしめた所以である。

御陪食の折りなどには、山縣、松方の如き元老でも、大抵その言動をつゝし、鞠躬如として陛下の御言葉を拜聴するのを例としてゐたのに、獨り伊藤だけは、自ら高談放論、間々哄笑をさへまじへ

て少しも遠慮する様子がなかつた。こゝにその一例がある。

明治卅八年十二月廿一日に伊藤が最初の韓國統監に任ぜられ、翌年九月に上京して御陪食仰付けられた時に、時の西園寺内閣員全部、山縣樞密院議長も列席したが、その時、陛下から御得意の馬術に關する御話が出た。陛下の寵遇し給へる騎兵將校が、平生の妙技を現さうとして、餘りに得意になつた爲か、誤つて落馬して、面目を施しそこねたなどといふなかゝ興のある御物語りがあつた。

伊藤は、馬には全く趣味を持つてゐなかつたやうであるが、陛下の御言葉が終ると、

「今日こゝに居並ぶ臣下をことごとく馬に乗せ、陛下その先頭に立ちて一鞭あて給はゞ、落馬せず隨ひ奉る者幾人ありませうか。」

と、當意即妙ともいふべき御挨拶を申上げた。すると、陛下は、山縣の方に瞳を轉じ給うて、

「山縣は、まだ乗れるぢやらう。」
と仰せられた。山縣は謹嚴そのものゝやうな態度で答へ奉つた。

「年老いては、大事をのみ取るやうになりました、自分の手慣れない馬には乗れませぬが、併し、伊藤よりはまだましかも知れませぬ。」

これを聞いた伊藤は、例の負けざらひな稚氣を満面に現しながら直ぐに口を開いた。

「山縣は千軍萬馬を叱咤する將軍でありながら、一本の歯の痛みにも閉口すると見え、いつぞや頬をかゝへてうなつてゐたことがありました。然るに、博文の如きは、前歯三本を一時に折つても、別に痛みを感じませんでした。」

權勢をきそつて相づらぬ兩雄の間柄とて、御前體をもはゞからず、口論をはじめたのであるまいかと、一同は、固唾を飲んで伊藤の片言隻語をも聞き洩らすまいと耳をかたむけた。伊藤は、ここで天井を仰いで一寸考へた後、

「たしか明治二十五年の十一月開院式の一兩日前でしたらう、私が丸の内見附で、有栖川宮の馬車と衝突し、車から眞つさかさまに落ちて、前歯を三本まで折りました。併し、氣が付いた時には自分はチャンと直立して居りました。」

これは自慢話だなど、面悪く思つた人もあつたらうが、伊藤の話はまだ終らなかつた。

「尤も、後で聞くと、自分で起きたのではなく、人が助けて起してくれたさうです。」

と結んだので、一同は思はずドツと笑ひ出した。その時、御前體と氣が付いて、何人もハツと思つたが、畏れ多くも天顏殊の外うるはしく拜し奉つたので、やゝ安心したやうだつた。

御陪食が済むと、陛下は、直ぐ參れと伊藤に仰せられた。

伊藤は、部下を顧みて、

「吾輩は、これからコンノート殿下の先頃捧呈されたバス勳章を拜見に參るのぢや。」と云ひつゝ、さも得意さうに、陛下の御あとについて行くのであつた。

伊藤は、葉巻をふかしながら、また部下を顧みて、

「食堂外では喫煙はできぬぞ。」

と注意を與へ、自分だけはこの限りにあらずといはんばかりに、平氣で煙を吹かしつゝ、大威張り歩いてゐた。

著者は、當時その部下の一人として、親しくかれの態度を目撃して、畏れ多いことだと思つた。それと同時に、君臣水魚の交りとは、こんな趣きをいふのであらうと、有難い氣持もした。

一六 晴天の霹靂

伊藤は、誰が何といつても、非凡な人物であつた。別けて、かれは細心と放膽との兩極端を一身に兼備へて、馬鹿に大事を取るかと思へば、また突飛な離れ業を斷行することがあつた。

明治二十一年二月一日に、伊藤が、平生敵視してゐた大隈を、俄然民間から引上げて、井上の代り

に外務大臣としたのは、正しくこの離れ業の特色を發揮したものである。また大隈の方でも、長い在野生活から内閣入を二ツ返事で承諾したのは、二十年來の懸案たる條約改正を見事にやつて見せるといふ抱負を持つてゐたからである。

併し大隈が民間で常に、無責任な大言壯語を弄するのを、面憎しと思つてゐた伊藤の方には、口でいふやうにさう容易く實行ができるものなら遣つて見るがいゝといふやうな意地があつた。それは、伊藤が大隈を内閣に入れてからまだ三月もたぬ四月二十八日に、早くも無能の黒田農相に内閣を譲り渡し、大隈を置去りにして、樞密院に逃げていつた行動でも判るではないか。

伊藤、井上等が、條約改正を實行する手段として、歐化政策を執つて、かへつて外國からは輕蔑され、國內からは非難されたといふ前例に鑑み、大隈は、それと正反對に、排外政策を執つた。かれはこれまで黙認の姿となつてゐた外國人の居留地外における家屋所有や、住居や旅行などを嚴重に取締り、現行條約履行と稱して外國人を苦しめた。これは、外國人をして、こんな酷い目にあはうよりもいつそのこと、條約改正に同意して内地雜居を許される方が増しだといふことを覺らしめようと考へたからである。

大隈は、翌二十二年早々各國公使に對して條約改正談判を開始した。平生は大言壯語を弄する大隈

も、この時ばかりは國論の沸騰を恐れて秘密を嚴守したので、談判が進んで調印の運びになつた時分です。世間では何も知らなかつた。すると、その年の四月十九日のロンドン・タイムス紙上に突如として左の如き記事が現れた。

「日本は列國をして領事裁判權を撤回せしむる條件として、内地を外國人に開放し、日本の大審院に外國判事を任用し、金額百圓以上の利益または罰金に關する民刑上告事件に參與せしめ、かつ原告または被告の一方が外國人なるときは、その係り裁判官の過半数に外國判事を充つることを約定した。そして、この制度は、十年間繼續するものとし、その満期後に於て、列國は、始めて日本の司法權を承認して、自國の判事を引揚げるといふ取極めになつてゐる。」

この記事が、日本に傳つた時には、上下愕然として驚いた。晴天の霹靂とは、恐らくこんな事を形容するのであらう。

この大隈案は、内地雜居と同時に領事裁判を撤廢するものであり、かつまた大審院のみに外國判事を置くといふことであるから、井上案の内地雜居を許してから三年の後に領事裁判を撤廢するといふ約定よりも、慥に進歩したものであつた。

しかし、我司法機關に外國分子を雜へるといふ點に至つては、五十歩百歩に過ぎないから、かゝる

約定は我國威を汚すものなりとの攻撃が、またも露々として諸方から起つてきた。

きかぬ氣の大隈は、猛烈な輿論の反對を物ともせず、ドシ／＼條約改正の談判を進め、五月二十日に米國公使と調印したのを始めとし、六月十一日には、獨逸公使と調印し、八月八日には露國公使と調印し、なほ引續き他の諸國とも調印する手筈になつてゐた。

すると、曩に内閣を黒田に譲つて樞密院議長に逃げた伊藤は、改正案を不可とし、その責を預つ能はずとて、辭表を捧呈し、この時農商務大臣であつた井上までが反對態度を執りはじめた。これまで輿論は愚論なりとて顧みなかつた大隈も、同僚や先輩の苦情を馬耳東風に聞き流す譯にも行かなかつたので、止むを得ず、黒田首相に勧め、宸裁に訴へて事の黒白を決することにした。

一七 大隈の遭難

十月十五日に、御前會議が開かれた。大隈は、眞先きに例の雄辯を振るつて、改正案の妥當なる所以を縦横に説明した。黒田首相、山田法相、大木元老院議長、河野樞密顧問官等がこれに賛成した。すると、歐米視察を終へて歸朝したばかりの山縣内相が、わが神聖なる國體に鑑み、外國判事をわが法廷に任用するの非を論じて、改正案に反對した。これに次いで後藤遞相、井上農相、寺島樞密院副

議長（伊藤樞密院議長は辭表捧呈引籠り中）川村、鳥尾、副島、佐野、元田各樞密顧問官等は山縣と同じやうに反對説を唱へ出した。

この會議は、四日間續いて、その間、賛否の激論が交換されたが、三日目には、賛成派の山田法相までが反對側に寝返りを打つたので、反對派は、壓倒的多數を占め、大勢既に定まつて亦如何ともしようがなくなつた。こゝにおいて黒田は、十八日に至り、臨時閣議を開いて、一先づ條約改正を中止することに決定した。

かういふ内情を知る由もなく、條約改正の進行を妨げるにはたゞ剛情な大隈を斃す外に途なしと一途に思ひ込んで、外務省の門前を徘徊してゐた福岡縣人來島恒喜は、大隈が閣議から歸つて來て、今や將に門内に入らうとする一刹那、その馬車を目がけて、豫て用意の爆裂彈を投げつけた。その命中するを見届けた來島は、物凄く會心の笑を含んで、その場を去らずに自刃した。

大隈は、命にもかゝはる程の重傷を受けた。右の足が碎けて、半身に血潮をあびたかれの體が、外務大臣官舎に擔ぎ込まれるや、人々は事の意外に狼狽して、爲す所を知らず、右往左往と騒ぐばかりであつた。その中に、たゞひとり落着き拂つた女性がゐた。それは、綾子夫人であつた。かの女は何よりも先に、佐藤進を呼び寄せた。佐藤は、日本一といはれた外科の大家であつた。その中に、他の

幾人かの醫師もかけつけた。

佐藤は、手早く傷口を調べた。

「これは容易ならぬ重傷であります。其根本的治療として、大手術を要する。私の見る所では、股の上部から切斷せねばなるまい。孰れにしても、近親のお立會を願ひたい。」

集まつた醫師の中には、さまで深く切らなくてもよからうといふ者もあつた。家令は、親類全部を呼び寄せようといひ出した。

美しくて優しい、しかし何となく冒しがたい權威を持つてゐた綾子夫人の顔には、毅然たる決心の色が浮かんだ。

「親族は、私一人で代表いたします。如何なる危険があつても、佐藤さんのいはれる通り、根本的手術をやつて下さい。」

鶴の一聲で、すぐに極まつた。

佐藤がやがて刀を執つて、その切つ先を太股の肉にズブリと刺し入れ、そのまゝクルリと一度に切り廻してから、更に鋸で、骨をひきはじめた時には、並居る人々は、いづれも申し合せたやうに、顔をそむけた。綾子夫人だけは、傍目もふらずに、それからそれと動いて行く佐藤の手先を熟視して

毛ほどでも過失があつたら容赦せぬぞといはんばかりにおそろしい劍幕をしてゐた。

大隈は、細君のお蔭で命拾ひをした。その後、一度外務大臣となり、二度總理大臣となつた。さすが豪氣の大隈も、細君だけには常に一目を置いてゐた。

綾子は、評判の戀女房であつたが、それと同時に、たしかに賢夫人たるを失はなかつた。

一八 法典の完備

よくいへば賢明な、悪くいへば狡猾な歐米人が、伊藤、井上の淺薄な歐化主義や、大隈の虚假おどしの條約厲行策などで瞞着されようはずがなかつた。かれ等は、治外法權の撤廢條件として、日本法廷に外國判事を任用することを強硬に主張して、寸歩もゆづらなかつた。今から思ふと、随分無法な主張であるが、虚心平氣に考へると、一理なきにしもあらずである。

井上の時は勿論、大隈の時でも日本の裁判官は、長官の鼻息を窺つてわづかにその地位を維持してゐる他の行政官と同じやうに、その身分に何の保障もなかつた。

それに、法典の不完全なこともまた掩ふべからざる事實であつた。新律綱領といふ刑法らしいものが明治三年の十二月に始めて制定されたが、それは支那の刑律を模倣したもので、その中には、磔

梟首などがあつた。かういふ惨酷な極刑が廢止されたのは、明治六年の六月に、時の司法卿江藤新平が文明制度を參酌すると稱して立案した改定律令が發布された時からである。それでもまだ斬首の刑が残つてゐた。

近代式の刑法が制定されたのは、降つて明治十三年七月であつた。これは、司法省顧問佛人ボアソナードがナポレオン・コードを基礎にして立案したものであつた。

民法は、調査に時を過ぎ、國會開設の年なる明治二十三年までは發布さるゝ運びに至らなかつたので、それまでは暗中摸索で大岡式裁判をやつてゐたのである。

されば、外國政府が、明治二十年前後の日本法廷に信頼しなかつたのも無理ではなかつた。

大隈の條約改正が頓挫し、發頭人までが奇禍に罹つたので、黒田首相は十月廿四日を以て辭職し、内大臣三條實美が一時首相を兼攝したが、十二月二十四日に大隈案反對の張本人たる山縣が新内閣を組織することとなり、その平生信認してゐた前外務次官青木周藏を外務大臣に任命した。

井上案にせよ、大隈案にせよ、國論の反對を受けた主なる理由は、程度の如何にかゝはらず、我司法機關に外國判事を任用しようとするのが國辱の甚だしいものだといふにあつた。されば、爾後の條約改正案は、日本在留の外國人をして純然たる日本判事の裁判に服従せしむるにせねばならぬ。

さうするには、先づ以て日本の法典と司法制度とを歐米並に完備せねばならぬ。堅實な山縣と、慧敏な青木とは、前車の覆轍にかんがみて、晩暮ながらかう考へたのである。

かくて、裁判所構成法が制定されて、裁判官は終身官となり、その意思に反して轉免さるゝことなしといふ保障が出來た。次で、民法、商法の要部及び民事訴訟法が發布され、刑法の内容は一切文明式に改正され、治罪法は、刑事訴訟法として全部改定された。

これらの法典は、明治二十三年の二月から十月までに、矢つぎ早に悉く發布された。山縣内閣が殊更にその發布を急いだのは、この年の十一月から創設される帝國議會の群議を避ける爲であつた。本來なれば、かゝる國家の重要法典の制定に就ては、宜しく議會の協賛を経るのが本筋であるのに、目前に迫つてゐる議會を出し抜いたといふのは、随分亂暴な仕打であつた。

併し、爾後におけるお粗末な議會の實質に考へ及ぶと、山縣は、先見の明を誇るべき理由を持つてゐたといへる。

一九 山縣の勇と怯

山縣は、法典の殆ど全部を議會開設の一箇月以前に發布して、群議の鋭鋒を逃れたが、さて歳出豫

算のライオンズ・シエーアを占むる軍事費について、忽ち處女議會と衝突したのは是非もない次第であつた。

山縣は、衆議院において施政方針を演説するにあたり、軍事費に關し、一際聲を張りあげて説きだした。

「方今列國の間に介して國家の獨立を維持せんとせば、國權國利の擁護に努めざるべからず。此事たるや、もとより空言のよくする處にあらず。一國資力のゆるす限り、寸を積み尺を重ね、以て大成を將來に期せざるべからず。故に陸海軍備のために巨額の經費を割かざるべからざるは、實に止むを得ざるの須要に出づ。」

多年草莽に蟄伏して空しく專制政府の横暴を憤慨した自由黨及び改進黨に屬する政客が、今俄に議政壇上に立つたこととて、その意氣の盛んなる實にあたるべからざるものがあつた。かれらは、政費節減、民力休養を絶叫して、軍事費に大削減を加へ、當時の歳出總額八千三百一十一萬五千圓から、九百四十三萬圓を削減することを主張した。

今日から見れば、これしきの金で、内閣と議會とが、何も血眼になつて争ふにも及ばぬやうだが、その時分に、これだけ削減されては、政府は實際立ち行かないほど細い身代であつた。山縣は、止む

なくんば不祥ながら、處女議會を解散するとおどかした。

議員の方でも、選ばれたばかりで直ぐさま解散されては耐つたものでないから、特別委員會で、政府の承諾し得る程度の修正案（削減額六百五十一萬圓）を作つて、双方で歩み合ふことになつた。軍人出身の山縣なればこそ、議會の解散を賭してまでも軍備に努めたのである。若し衆論に迎合する輕薄政治家であつたならば、それから僅か三年後に起つた日清戦役に際して、さぞ臍を噬んで後悔したことであらう。

併し當面の問題は、不平等條約の改正であつた。安政年代に出來た屈辱條約が改正されない間は、維新の大業に、忌まはしい缺陷がついて廻ることになる。別けて立憲政治の一大汚點と云はねばならぬ。議員は言ふに及ばず、院外有志までが、對等條約期成會なるものを組織し、輿論をあふつて、しきりに政府に肉迫する。

或る日の事、青木外務大臣は、山縣に向つて云つた。

「條約改正は、遅れれば遅れるだけ損害がかさんで來る。既に法典も完備し、裁判官の身分も保障され、最早他の文明國に比し少しも遜色がない。如何です、談判を開始しては。拙者には相當の胸算があります。」

青木が如何に勸めても、成功の自信を持つてゐなかつた山縣は、三度目の條約改正に着手すべく餘りに臆病であつた。

「法典は完備したに相違ないが、その發布後日なほ淺い昨今、なまじ談判を開いて、またも失敗の前轍をふむやうなことがあつてはならん。今暫く時期を待つがよからう。」
併し、民論は盛んに條約改正を迫り、閣内においては、性急な青木外相は既に英國公使と内々談判を始め出した。物堅い山縣は、終に居たゝまらなくなり、好々爺の松方（當時藏相）を招いて、
「立憲政治の運用に必要な諸法典の發布も既に一段落を告げた今日、残る急務は財政整理である。それは、拙者よりも尊公の方が得意とするところである。」
と巧におだて上げて、内閣を譲り渡してしまつた。それは明治二十四年の五月六日であつた。

二〇首 相 難

松方内閣の外務大臣には榎本武揚が任命されたが、この人は五稜 廓の勇將、海軍卿、露國駐劄全權公使、遞信大臣といふ經歷を持つてゐただけで、重に英米を相手にする條約改正に手をふれるなどの知識も手腕もなかつたし、松方も亦外交問題には餘り趣味を感じてゐなかつたから、條約改正問題

はしばらく閑却された。

併し、この無能な第一次松方内閣ほど多事多難な内閣は、前後にまたとなかつた。その内閣成立から僅か五日後の五月十一日には、露國皇太子ニコラが、大津遊覽中にその護衛巡查津田三藏の爲めに斬り付けられたといふ椿事があり、越えて十一月二十八日には、美濃尾張における大地震あり、更に十二月二十六日には豫算の大削減を頑強に主張した第二議會の解散あり、その總選舉に際し、内務大臣品川彌二郎、同じく次官白根專一が、不當の干渉を試みて民黨を壓迫したとて、民間からばかりでなく、官邊からさへも紛々として内閣攻撃の聲が起つた。

さしも勤忍強い松方も、たうとう疝癪玉を破裂さして、七月三十日に辭表を捧呈したまゝ、飄然として鎌倉の別荘に引つ込んだ。

松方が、誰にも相談せずに逃げ出したので、後繼内閣組織の本命は伊藤、井上、山縣、黒田の四元老に降つた。それは、四人でよろしく協議して適當な首相を推薦せよといふ思召であつた。

その翌三十一日に四人は伊藤の伊皿子邸に會合した。
主人役として伊藤が先づ口を開いた。

「松方が辭職を決心したとすれば、今度は黒田君か山縣君かに御苦勞を願ふより外はない。國家の

ために一奮發願ひたい。」

それに對して、即座に答へたのが山縣であつた。

「吾輩は、松方の直ぐ前に首相をやつたばかりでもあり、殊に反黨の反感を緩和するには、極めて不適任である。吾輩だけは問題外に置いて貰ひたい。」

山縣の言葉には、謙遜も懸引も含んでゐなかつた。他の出席者も至極尤もな言分であると思つた。今度は黒田が何かいはねばならぬ順番となつた。

黒田といふ男は、性來の酒亂で、酩酊すると、人の家に客に呼ばれながら、床間に飾つてある陣刀を引抜いて、イキナリ柱に斬りつけたり、夜更けて歸宅しながら、出迎へが遅いとて、細君を斬つたりして、手の付けられぬ亂暴者といふ評判が立つてゐたが、酒さへ飲まねば、極温順な人であつた。

かれは、明治八年の雲揚艦砲撃事件に際し、全權辨理大臣として朝鮮に赴き、困難な談判をやりつけて、最初の日韓修好條約を締結し、その後ち開拓使長官在職中、官有物拂下問題を惹き起し、責を負うて辭職し、第一次伊藤内閣の時に、農商務大臣となり、次いで伊藤に代つて總理大臣となり、大隈の條約改正失敗で辭職したといふ、種々な經驗を持つてゐた。

さればこの時、黒田は山縣と同様の意味で、總理大臣たることを固く辭退した上、伊藤、井上兩公

の中、いづれかを煩はすより外はないと附け加へた。

そこで伊藤は、井上を顧みて、

「君はまだ一度も首相をやつたことがない。今度こそどうしても責任を避けるわけには行くまい。」と水を向けた。

二 伊藤の術數

「白痴でない限り、誰でも大臣は勤まるものだが、大隈の外交と井上の財政とだけは、一寸劍呑ちや。」

昔大西郷が眞面目でこんな奇評を下したさうだが、下手の横好きとでもいふものか、大隈は始終外交を氣取り、井上は財政通を以て自ら任じてゐた。たゞ井上の名譽慾は、大隈ほど強くなかつた。

今、井上は、伊藤から首相にならんかと言はれたが、それを一片の辭令と察したから、その器にあらずとて、一も二もなく斷つた。

山縣も黒田も井上も、差當り首相となれないとすれば、勢ひこれ等の三人が異口同音で、伊藤の出處を勧めねばならなかつた。

ために一奮發願ひたい。」

それに對して、即座に答へたのが山縣であつた。

「吾輩は、松方の直ぐ前に首相をやつたばかりでもあり、殊に反黨の反感を緩和するには、極めて不適任である。吾輩だけは問題外に置いて貰ひたい。」

山縣の言葉には、謙遜も懸引も含んでゐなかつた。他の出席者も至極尤もな言分であると思つた。今度は黒田が何かいはねばならぬ順番となつた。

黒田といふ男は、性來の酒亂で、酩酊すると、人の家に客に呼ばれながら、床間に飾つてある陣刀を引抜いて、イキナリ柱に斬りついたり、夜更けて歸宅しながら、出迎へが遅いとて、細君を斬つたりして、手の付けられぬ亂暴者といふ評判が立つてゐたが、酒さへ飲まねば、極温順な人であつた。

かれは、明治八年の雲揚艦砲撃事件に際し、全權辦理大臣として朝鮮に赴き、困難な談判をやりつけて、最初の日韓修好條約を締結し、その後ち開拓使長官在職中、官有物拂下問題を惹き起し、責を負うて辭職し、第一次伊藤内閣の時に、農商務大臣となり、次いで伊藤に代つて總理大臣となり、大隈の條約改正失敗で辭職したといふ、種々な經驗を持つてゐた。

さればこの時、黒田は山縣と同様の意味で、總理大臣たることを固く辭退した上、伊藤、井上兩公

の中、いづれかを煩はすより外はないと附け加へた。

そこで伊藤は、井上を顧みて、

「君はまだ一度も首相をやつたことがない。今度こそどうしても責任を避けるわけには行くまい。」と水を向けた。

二二 伊藤の術數

「白痴でない限り、誰でも大臣は勤まるものだが、大隈の外交と井上の財政とだけは、一寸劍呑ちや。」

昔大西郷が眞面目でこんな奇評を下したさうだが、下手の横好きとでもいふものか、大隈は始終外交家を氣取り、井上は財政通を以て自ら任じてゐた。たゞ井上の名譽慾は、大隈ほど強くなかつた。

今、井上は、伊藤から首相にならんかと言はれたが、それを一片の辭令と察したから、その器にあらずとて、一も二もなく斷つた。

山縣も黒田も井上も、差當り首相となれないとすれば、勢ひこれ等の三人が異口同音で、伊藤の出慮を勧めねばならなかつた。

伊藤は、結局自分のところへお鉢が廻つてくることを百も承知してゐたものゝ、さすがは曲者、なか／＼オイソレとは引き受けない。

「いつまでもお互に譲り合つてゐては、果てしがつくまい。諸君が一致して是非とも吾輩にやれと言はれるなら、微力を盡さぬこともない。併し出馬を躊躇する事情においては、吾輩とても断じて諸君に譲らんのぢや。」

なほかれは一應政局の困難なる所以を述べた後、さて最後の断案として、

「とてもものごと、お互ひに連帯責任を負ふことにしては如何。」と切り出した。

山縣が眞つ先きに同意した。

「それは勿論辭するところでない。吾々三人が一致協力して必ず君をお助けする。」

黒田も井上も、それに毛頭異存はないと相槌を打つた。

それを見すました伊藤は、さらばと、第二の問題に移つた。

「然らば、吾輩は、内閣組織を引受けることにしてもよい。第二段の内談として、内閣の椅子に就き御希望を承はりたい。」

井上は、豫め伊藤の意中を知つてゐたものと見え、平氣な顔をしてゐたが、山縣と黒田とは、あわてゝ伊藤の早合點を注意した。

「いや、われ／＼は閣外から後援する積りぢや。勿論内閣のことは、一切君に任せる覺悟で……」それが、たしかに山縣、黒田兩人の眞意であつたに違ひない。ちきこの前に、松方が内閣組織を躊躇した時に、伊藤、山縣、黒田、井上の四人が、閣外から松方を後援することを誓つたことがある。

(それを當時世人は、黒幕内閣と呼んでゐた。)今松方が逃げ出した跡始末をするのであるから、今度は伊藤を推し立て、他の三人が矢張閣外から後援しようと考えたのである。

それを聞いた伊藤は、手を振つて一きは聲を張上げた。

「それはいかん！ 閣外後援は、吾々が既に松方に試みて失敗したところではないか。そも／＼吾輩がお互に連帯責任を負はうといふのは、諸君自らが吾輩と共に閣班に列することぢや。」

伊藤は、山縣や黒田をかついで、外部から自分の政策を妨げようとする政客の多い事情を以前から知つてゐたので、その頭を抑へるためには、山縣、黒田兩人を人質にとつて置く必要がある。殊にこれ等の前首相を平大臣として自分の部下に従へれば、内閣が重きをなすのみか、己の自尊心をも満足させることができる。かういふ魂膽が伊藤の腹にひそんでゐた。

「若し諸君が入閣を承諾されぬとなれば、吾輩は斷然組閣を拜辭するまでぢや。」
伊藤は、例の調子で頑張つた。

二三 外交界の寵兒

山縣と黒田とは、見す／＼伊藤の術中におちいるとは知りながら、結局その言ふがまゝに入閣を承諾して、山縣は司法に、黒田は逓信に、おの／＼閑職につき、伊藤の腹心たる井上は、内務の要職を引受けることに、話がまとまつた。當時これを元勳内閣と稱した。

伊藤は、薩長の權衡を保つために、長州の伊藤、山縣、井上三人に對し、薩州人として、黒田の外大山巖を陸軍に、仁禮景範を海軍に擧げ、更に藩閥の色彩をやはらけ、兼て民黨の氣勢をそぐために土佐出身の後藤象二郎（元大同團結の首領）と同じく河野敏鎌（元改進黨副總理）とを農商務と文部とに、信州出身の渡邊國武を大藏に、又紀州出身の陸奥宗光を外務に、それ／＼配置した。

陸奥が、この時外務の椅子に据ゑられたのは、やがてかれをして乾坤一擲の快腕を揮はしめんとする天の配劑であつた。

陸奥が、伊藤の斡旋で全權公使になつた事情は、既に語つた通りだが、かれの明治十九年から二十

三年に至るワシントン駐在中の評判は、すばらしいものであつた。

ワシントンにおいて、苟くも外交家の出席するほどの宴會で、長面鼻隆、炯眼の特徴を具へた陸奥と、才色兼備の夫人と、艶麗花の如き令嬢との姿が見えなければ、何人も寂寞を感じずにはをられぬほどであつた。陸奥の公使としての成功は、たしかにその夫人と令嬢との愛嬌に負ふところが多かつた。兎に角陸奥一家のワシントン生活は、米人のみならず、他の外人をして日本を實質以上の文明國に買ひかぶらしめるだけの効果があつた。

別けてこゝに特筆せねばならぬ事がある。それは、伊藤井上等が恰も東京で條約改正の失敗に苦悶しつゝある最中に、陸奥はワシントンにおいて、メキシコと純然たる對等條約の締結に成功したことである。

陸奥夫妻は、外交界の *Persona Grata* として到るところでもはやされたが、メキシコ公使夫妻から、特別に尊敬された。

ある宴會の席で、メキシコ公使ロメロは、陸奥に向つて、

「お互の私交を冠付するために、日墨兩國を條約國にしようではないか。」
と話しかけた。

陸奥の喜びは想像に餘りある。かれは日本の進歩状態を詳しく説明した上、當時なほ依然として治外法権を續行してゐる歐米諸國の無理解を批判し、更にロメロの自尊心をそつた。

「若し日墨間に純然たる對等條約が出来れば、閣下は、たゞに日本の恩人なるのみならず、必ず國際正義の守護者たる名譽を博されるであらう。」

この言葉を聞いたロメロの顔には、満悦と義侠との表情がありくと現れた。

「閣下夫妻の如き立派な代表者を有する日本を半開國扱ひにするは、眞に文明の汚辱である。予は本國政府を説得して、對等條約を結ばせる確信を持つてゐる。」

その結果として明治二十一年十一月三十日に、日墨條約が、陸奥とロメロとの間に調印されることになつた。その中に、

「日本國內またはその領海に來るメキシコ國の人民及び船舶は、日本の法律を遵奉し、かつその裁判管轄權に服従すべきものとす。日本國の臣民及び船舶が、メキシコ國內及びその領海に到るとき亦同じ。」

といふ規定があつた。これが日本最初の純然たる對等條約である。

二三 泥中の蓮

むかし新橋に、その名もゆかし、小鈴と云ふ全盛を極めた絶世の美人があつた。

かの女は男嫌ひといふ評判者であつた。人とし生ける女にして男を嫌ふ筈がないが、かの女はたゞ折花攀柳の野心もて上邊の色香にあこがれ來る浮れ男を嫌つたのであつた。あの金や威光をふりかざせば、女は脆くもなびくものと自惚れた仙臺侯をば、傾城高尾が嫌つたやうに。

昔の高尾が大名道具なら、小鈴は大臣道具であつた。西郷、大久保などと肩を並べた參議板垣退助——あの眞面目な板垣までが、小鈴の美貌と才氣とに魅せられて、有頂天になつたものだ。併し、板垣よりも官位こそ低いが、熱度の一きは高い執心家が、外に二人あつた。その一人は外務大丞沖守固他の一人は、當時租税頭たりし我陸奥宗光であつた。

沖の方が陸奥よりも世才に老けて、遊び振りも上手であつた。小鈴の意中は危く動かうとした。その利那に、運命の神は、突如沖を海外に連れ去つた。それかあらぬか、沖の姓その物からして洋行に縁ある前兆を示してゐた。そこで中原の女鹿は、陸に残つた陸奥の矢先に射止められることになつた。

沖は、歸朝後間もなく、外務省を去つて、昔陸奥の前任地たる神奈川縣の知事となり、それから陸

奥の郷里なる和歌山縣に轉任することになった。奇しき因縁はどこまでも付きまとつたのである。陸奥は、やがて外務大臣になつた。沖は、地方長官會議の時などは、度びく陸奥を大臣官舎に訪問したものだ。その折りには、今は陸奥夫人おりうの方となつてゐる戀の小鈴は、沖を昔ながらの知り人として心安くもてなし、その鬢の邊の霜を數へつゝ、「大分お歳をめされた」などと笑ひ興するこゝとさへあつた。沖は有難がつたり恐れ入つたりした。

これより先、おりう夫人が、陸奥の家に主婦となつて、嬉し欣こんだのも束の間、陸奥は、五年の長い星霜を獄裡に送る身となつた。その間、夫人は、陸奥のこの世の忘れ片身とも見るべき一女さや子と共に、淋しく空聞を守つてゐるが、優曇華の花咲く時のめぐり來て、陸奥は花やかな外交官としてワシントンに赴くことになつたので、おりう夫人も、令嬢さや子ともろともに、鳥歌ひ花舞ふてふ外交舞臺の人となつたのである。若しこの夫人が行かなかつたなら、さしも豪傑の陸奥でも、あれほどの働きはできなかつたであらう。

今でこそ、藝者を醜業婦などさげすむやうになつてゐるが、維新から明治にかけては、藝者の中には相當の學問あり、見識あり、氣概ある才媛も少くはなかつた。京都の舞妓幾松は自ら身を賭して、幾たびも木戸孝允を死地に救ひ、その大望を成就させて、後稀代の賢夫人とうたはれた。伊藤公

爵夫人梅子も馬關の名妓であつた。かの女は、伊藤がまだ名を成さぬ壯士時代から、始終伊藤の影身に附添つて苦樂をともにした。伊藤が壯士に暗殺される恐れがあつた時分には、夫人は自ら袖に刀をかきつけて、人知れず後ろからついてあるいたものだ。後年、伊藤が女性の話をすると、いつもその夫人のえらい事を語り出して「吾輩の一生で一番有難く思ふのは、言ふまでもなく天皇陛下であるが、その次ぎはおかか（細君）だ」と必ず附加へるのが例であつた。



美人でもなく、特に才氣に富んでゐるといふほどでもなかつたが、其の起居振舞の温雅なる、又氣取らず、高ぶらず、勿體ぶらず、貴賤上下によつて其の聲色を二三にせぬのみか、初對面の人でもさながら、舊知の如く、わけ隔て

梅子夫人は、さまでのなく歡談する所などは、光風霽月の趣あり、伊藤公をそのまま女性にしたやうな人であつた。山縣公夫人お貞の方も、元は新橋の藝者であつたが、餘り晩く後妻となつたので、謹嚴氣取りの山縣は、周圍の人々に遠慮して、終に籍を入れなかつた。併し實際は、本妻以上に尊重してゐた。

生き残つた唯一の元老西園寺は、正室を置くこと崇りがあるといふ結構な家風であつたので、初めから妻帯しなかつた。彼れが佛蘭西から歸つて来て、東洋自由新聞を經營してゐた時分に、新橋の名妓を根引して妾としたが、それが本妻同様のお兼の方で、永く内助の譽があつたが、今は大磯に隠棲してゐる。當の西園寺は昨今お花坊とやらを世話してゐるとか、世話になつてゐるとかいふが。これは平凡な女中であるさうな。

我が陸奥夫人おりうの方は、良妻賢母の鏡といふべく、わけて素性正しい家に生れた人であつた。父は姓を金田といひ、攝津龍野藩の家老であつた。金田が江戸勤番の砌り、踊の師匠で添機といふになれそめて産ませたのが、即ち問題のおりうであつた。

添機は、旗本の家に生れ、讀み書きの外遊藝までも仕込まれたが早くも両親に死に別れ、伊達に覺えた藝が身を助けるほどの不仕合せ、かて、加へて、金田の病歿後、細い煙も立てかねて、娘おりうは、はかなくも左袂取る身に落ちぶれてしまつたのである。

二四 剃刀大臣

山縣は、明治二十一年から二十二年にかけて、地方自治制研究のために歐米を視察した途次、ワシ

ントン公使館に立寄つて、陸奥夫妻の外交界における好評を聞き、わけて陸奥がメキシコと純然たる對等條約を締結したことを知つた時に、スツカリ陸奥の器量に惚れ込んでしまつた。

かくて山縣が大隈失脚の跡をうけて、明治二十二年の十二月に内閣を組織するや、かれは陸奥を呼びもどして外相にしようと思つたのだ。併しその謀叛人といふ前科の追憶がまだ一般に薄らいでゐなかつたので、内外に遠慮して、あまり目立たぬ農商務大臣にするた。

陸奥の材幹は往くとして可ならざるはなく、機鋒縱横、觸るゝところ斬れざるはなく、終に剃刀大臣の綽名を博したほどであつた。併し農商務省はもとよりかれの適所ではなかつた。その得意時代はかれが第二次伊藤内閣（二十五年八月八日）の外相となつた時から始まる。

歴代内閣の企て、失敗したところの條約改正を、見事に仕とけてやらうといふのが、陸奥の報國的觀念であり、又個人的慾望でもあつた。併し失敗の苦盃を満喫した伊藤、井上が、その頭に坐つてゐるし、大隈案反對の發頭人で、しかも青木前外相の改正談判を抑制した頑固な山縣も同じ内閣にゐる。後置たる陸奥が、ウツカリ主動的態度をとらうものなら、すぐに危険視される恐れがある。かれは、こゝ暫く隠忍して、改正意見などはおくびにも出さなかつた。

併しそれは表面のことで、機敏な陸奥は、外相の椅子につくや否や、その信任してゐた秘書官中田

敬義を呼びよせて、極内密に對等條約案を起草すべく命じた。尤も條約問題に始終參加してゐた外務省顧問デニソンが、中田の相棒であつたことは勿論である。

中田は、加賀の藩士で、早くから北京に留學し、それからロンドン公使館に四年間在勤してゐたが、陸奥が出獄後ロンドンに來た時に、陸奥の知遇を受けたのである。彼は、頭腦明晰、加ふるに文筆に堪能であつた。デニソンは、一時横濱で辯護士をしてゐたが、井上が明治十三年に條約改正調査を始め出した頃に、外務省顧問に招聘されたのである。米人ではあるが日本人以上の忠實心を以て日本の爲に働いた人である。たまく、日本に來たニウヨークの大會社長がデニソンを當時の俸給の五割増で抱へようと交渉したが、かれは一考もせずこれを斷つた。この事實を聞いて感心した中田は、陸奥に勸めてデニソンの俸給を増してやつたことがある。デニソンは死んだが、中田は今なほ達者である。

陸奥は、この二人を腹心として、對等條約の考案を立て、時機のいたるを今や遅しと待つてゐた。伊藤首相の方では、陸奥が何か言ひ出すだらうと思つてゐたが、一向平氣であるので、待ちくたびれたと見え、明治二十五年の十一月十日に、議會に對する方針を談じ合つた閣議の歸りがけに、伊藤は何氣ない態で陸奥に同車をすすめた。馬車が櫻田門邊りを通る時分に、伊藤が何時にない眞面目な

態度で口を開いた。

「條約改正の準備はどうか。」

陸奥はこゝとばかりに、苦い顔をした。

「お申付けとあらば、何時でも取りかゝるであらうが、井上案や大隈案の燒直しならば、いつそのこと、始めから手を着けぬ方が増しですぞ。」

二五 室内の密談

何か曰くありけな陸奥の返事を聞いた伊藤は、くはしい事はゆるりと話さうとて、暫く一言も發しないで考へこんでゐた。

やがて、馬車は總理大臣官舎についた。伊藤は陸奥を一室に伴つて、さて御意見を承はらうと、椅子をすゝめた。

陸奥は、内證話だといひながら、家中に聞えるやうな甲ばしつた大聲を出す男であつた。

「最近の詔勅にも、「條約改正は中興の鴻業に隨伴し、國權の大本に關繫す。朕は我臣民と俱に條約改正の成局を望む切なり。」とあり。されば、吾々が責任者となつて斷行する改正案は、是非と

も朝野の期待にそふべき完全なものであらねばならぬ。随つて從來の如き半面的改正案でなく、全面的改正案とせねばなりません。」

「それは、どういふ意味か。」

「井上案も大隈案も、單に治外法權の撤廢を目的として、それよりも更に重要な關稅問題を閉却してゐる。かくては、よし外國判事を我法廷に任用するの條件を除くとも、通商貿易上の不對等は依然として存續する。これを半面的といふ。全面的とは法權、稅權を併せて回復するをいふのである。」

「それができれば至極結構だが、列國は、それをたやすく承諾するであらうか。」

「勿論、談判は困難なりと覺悟せねばなりません。併し姑息の條約案を提出し、國民の反對で頓挫するよりも、先づ我上下全體の満足する條約案を提けて列國に迫らば、たとひ不成功に終るとも國民の敵愾心を誘發し、その政府反對氣勢を國外に轉換する効果があると思はれる。」

對外策と對内策との兩股をかけようといふ陸奥の機略には、さすが剛愎な伊藤も、思はずテーブルを打つて感嘆の聲をはなつた。

陸奥はますます得意になる。

「井上も大隈も、東京で談判を開いたのであるが、それでは、我より先づ外國公使を説き、その公使より本國政府に傳言し、事情にくらい本國政府から更にその公使に訓令するといふ順序になるのであるから、あだかも隔靴搔痒の感あるを免かれない。愚案では、在外日本公使をして、その駐在國政府と直接に談判せしめるつもりである。」

「して、何れの國から始めるつもりか。」

「列國中、在留民の多くして、かつ通商關係の密接なるは、英國を第一とし、次を米國とする。」

「この二國をさへ承服させれば、その他は別段むづかしいこともあるまい。」

「何時頃から談判を開くつもりか。」

「凡そ準備に六ヶ月を要する見込みである。」

「然らば、近日召集せらるる議會において、政府の方針を演説する時に、近々條約改正に着手して我正當なる國權國利の回復を圖るべき旨を明言しようと思ふ。若し君の腹案の如きいはゆる全面的條約が成功すれば、國家の大慶である。」

「成敗はもとより豫期する限りでないが、最善の力を盡すつもりである。なほ草案に就いて、一々閣下の垂訓を煩はします。」

この最後の一言は、陸奥の慣用手段で、何時も、伊藤の自尊心を咬つて、巧に自説を貫いたのである。

二六 對等條約案

陸奥がいよいよ條約改正案を伊藤の手に提出したのは、明治二十六年の七月五日であつた。

伊藤は、三日後に總理大臣官舎に臨時閣議を開いた。出席者は伊藤、陸奥の外、黒田逋信、井上内務、大山陸軍、渡邊大藏、井上（毅）文部、芳川司法の六大臣（山縣司法は樞密院議長に轉任、西郷海軍、後藤農商務の二大臣は事故缺席）、伊藤首相は先づ一場の挨拶を試みた。

「昨年十二月一日、議會において、多年上下一般の希望にかゝる條約改正の大業を執行すべき旨を述べたるに、本年に入つて衆議院は進んで條約改正請願の上奏案を可決した。かく氣運既に熟したる以上は、一日も早く條約改正に着手したいと思ふ。なほこの草案については、外務大臣より説明するであらう。」

陸奥はすぐに立ち上つた。

「明治十三年以來、幾回も改正案が作製されたが、いづれも完全を將來に期する一時の便法たるに過ぎなかつた。今回は一新生面を開き、始めより完全なる對等條約を締結することにしたと思ふ。それは、一八八三年に英伊間に締結せられたる條約を模範とし、これに加ふるに予が明治二十一年にワシントンにおいて調印せし日墨條約を基礎として談判を進める積りである。尤も關稅問題に就ては、一舉にして自主權を回復するは望んで得べきところでないから、暫く彼我協定稅率の形式により、舊來の從價稅五分以下といふ規定を改め、最低五分、最高一割五分とし、なほ條約の範圍外にある輸入品に對しては、我國にて自由に課稅するはずである。しかして條約の實施期限を五箇年後とする豫定である。」

また陸奥の言葉が終らぬ中に、條約通の井上は、何故に實施期を五箇年後とするかと質問した。

「國別談判として、英米を先にし、漸次他の國々に及ぶ趣向であるから、その間におのづから前後の差を生ずることとなる。よつて最初の英米だけにかゝる期限を置く必要あり、なほ民法商法の殘部が完成するまでには、この位の歳月を要すると思はれるからである。」

陸奥は説明を終つてから、條約案を各閣僚に分配した。それは、本條約及び議定書、併せて二十一箇條から成り立つてゐたが、要點は左の三ツであつた。

第一 兩締盟國互に通商及び航海を許し、その一方の版圖内何れの處にも自由に渡來し旅行し、

或は居住し、各種貨物の卸賣及び小賣に従事するを得と規定して、従来の居留地を廢止し、日本の内地を外國人に開放すること

第二 兩締盟國の一方の人民は、他の一方の版圖内に在る間は、その國の法律を遵奉し、且つその國の裁判所の管轄に服従し、司法手續に就ては、全然内國民と同様の取扱を受くべきものなりと規定し、列國をして治外法權を撤回せしむること

第三 改正條約實施の日より外國輸入品に對し賦課せし輸入税五分の代りに、本條約附屬税目に掲ぐる關稅を賦課するを得と規定して、その最高關稅を一分とし、從來の三倍に増率すること

かういふ立派な條約案に對して異議のあらう筈がなく、内閣員は一致してこれに賛成した。尤もそれが満足に實行されること、は誰も思つてゐなかつた。

二七 青木の卓見

條約改正談判は、先づ英國から始めて米國に及び、それから獨、佛、露に移るといふ順序になつてゐた。この時、日本公使として、英國に河瀬眞孝、獨逸に青木周藏、米國に建野郷三がゐるが、河瀬と建野とは、外交上の經驗に乏しく、手腕も怪しかつた。青木だけは、若年のころに早くも獨逸に

留學したのみならず、獨逸婦人と結婚したほどの西洋通、しかも、先きに井上外相の次官となり、第一次山縣内閣の外相となつて、條約改正に就いては永い實驗をもつてゐた。

そこで、陸奥は青木をして英獨談判の局に當らしむるを得策と考へ、先づ河瀬に歸朝を命じ、青木を駐英公使兼任とし、直にロンドンに赴いて條約改正談判に取りかゝるやう訓令した。

青木は、外交家らしい外交家は、當時の日本に自分たゞ獨りあるのみと自惚れてゐた上に、同藩人として伊藤、井上、山縣を背景としてゐたので、その鼻息すこぶる荒く、後輩の陸奥に對してさかさまに訓令するやうな勢ひであつた。併し陸奥は、自ら謙抑し、青木をおだて、つかふほどの雅量をもつてゐた。それは、明治二十六年七月二十五日附の陸奥の私信中に、

「老臺をして英獨二國の意向を探らしめ、大體において談判に應ずべき見込あらば、閣下を條約改正全權委員に勅任せらるべき事に廟議一決したる事は、第一老臺の外交的御經驗及び御能幹がこの大任にたゆることを閣員一同承認したるが故に外ならざることとは、小生の喋々するまでも無之候。」とあるのを見てもわかる。青木はます／＼慢心したものと見え、九月十四日附返書中に、随分思ひ切つた事を言つてゐる。

「條約の實施期を五ヶ年後としたるは、已むを得ずとするも、輸入税則までも同様に取扱はれたる

事は、如何にも奇々妙々と申すべし。かくては「今より六年目に始めて効力を生ずる條約を今日締結する必要なし。四五年過ぎて後來つて商議せよ」と先方より申し出すこと必然なり。これは失敬ながら甚だ不出来なり。生の考へにては、税則の方は、本條約批准後直に實施するものとする方、筋も通り収入上得策にあらずや。」

これは、たしかに青木の卓見であつた。陸奥は勿論これに同意した。青木の私信がまだ續く。

「尙又居留地撤廢の後に至り、外國人に土地所有權を許さざるは、狹隘論にして經濟上甚だ不利なり。内地を開放しながら、土地所有を許さざるは矛盾なりといふ論難の餘地を先方に與ふるものなり。」

居留地を所有地に代へるといふのは、青木の持論であつた。かれが土地所有權を許さざるは經濟上甚だ不利なりといふのにも理窟があつた。永代借地權を存續する時は、條約の規定上、安政年代に極めたホンの名義ばかりの借地料以外には、絶対に課税することができなくなるからである。

今日現に舊居留地には、普通の地租を賦課することができず、その地上に建てた家屋には家屋税を課することができず、またその土地家屋の利用に對し所得税をも課することが出來ず、數千萬圓の損

失と手續き上の不便とを生じてゐる。青木は、これを見とほしてゐたやうである。

二八 大喝一聲 WAIT !!

青木は、明治二十六年の九月十九日にベルリンからロンドンに出かけた。その時幸ひかれの知り合ひであつた駐日公使フレーザーが賜暇歸朝中で、毎日ダウニング・ストリートの外務省に出勤してゐたので、青木は先づフレーザーを訪問して、英國政府の意向を確かめようとした。その最初の會見こそ青木の率直にして執拗な態度と、フレーザーが對等とは何事かと天から受けつけなかつた冷淡な態度とが、樽俎折衝の場面に面白い對象を現してゐる。

青木曰く「從來の條約改正の系統を一變し、全然別案を基礎として談判を開きたい。大體は先日、御手元に差出したる覺書に記してあるから、御一覽濟みの事と思ふ。この上は、正式交渉の運びに至るやう御盡力ねがひたい。」

フレーザー曰く「貴案は篤と拜見した。併しかういふ對等案は、我政府の到底同意し得べきものでない。尤もこれは予一個の意見に過ぎぬから、これから一應外務大臣と協議の上、最後の決答を申上げよう。暫くお待ちあれ。」

すけなく言ひはなつて、フレーザーは應接室から立ち去らうとした。

青木は早くも例の疝癩を起し、大喝一聲「WAIT!!」(待て!!)と叫びつゝ、目に角立て、どなり出した。

「閣下はみだりに予を苦しめるつもりか。それならばよろしい。予は如何なる手續きを踏んでも必ず直接に貴政府にせまり、本國政府の意志を徹底せねばやまぬ覺悟をもつてゐる。必ずしも閣下をわづらはすに及ばん。」

フレーザー曰く「閣下を苦しめるなどとは、思ひもよらぬことである。」

青木曰く「然らば、本日直に外務大臣の決答を促さずともよからう。予は、内命を帯びてこの地に來たものであるから、何日まで滞留しても苦しからず、よしんば談判を拒絶せらるゝまでも、一應は予の説明も聞かれてはどうか。」

フレーザー曰く「謹んで承はらう。」

青木曰く「井上案も大隈案も、等しく國民の反對で破れた事情は、閣下が東京において熟知せられたところであらう。急進論者中には、時代にそはぬ屈辱條約はよろしく自發的に廢棄せよと放言する者さへある。そもく現行條約締結以來既に三十年の歲月が流れた。我國現時の文化程度は、安政

時代に比し雲泥の大差がある。今日條約を改正せねば國民が承知しない。而してそれが對等主義の上立つものでなければ國民が又承知しない。閣下はよくこの邊の事情を考慮せられたい。」

フレーザー曰く「お説は一應尤もである。併し吾等の不安に感ずるところは、日本政府の基礎が如何にも薄弱なことである。たとへば、民黨如何に騷擾を極むればとて、政府は斷乎たる鎮壓手段をとる能はざるのみか、閣員大官の間にさへ軋轢ありて政策統一せず、吾等は、如何にして十分の信用をもつて貴國と條約を結ぶことができようぞ。」

青木は、急所を突かれてタヂくとよろめいた。當時の日本は、今の支那より少しましな位の程度で、議會が出来て間もないことゝて、民黨は理も非もなく政府に反抗する。内閣は走馬燈の如く交迭するといふ亂脈な状態であつた。併し、青木の理窟つほい氣性は、かういふ時に役に立つ。

「我が立憲制度は、今なほ試験の中にあり。貴國の如く十二世紀以來七百年の經驗をつんだものから見れば、或は兒戯に等しからうが、これをラテン人種國たるスペイン、ホルトガル、メキシコに比すれば、左まで遜色はない。予の親しく踏査したるセルヴィアやブルガリア等は、ほとんど未開國に似た國々であるのに、貴國はこれ等諸國に治外法權を適用せず、これと對等條約を結んで少しも危ぶまないではないか。貴國は、何故獨り日本の對等權を否認せんとするか。」

青木は、この條理正しき論鋒をふるつて、フレーザーを説伏してやつたと、よく自慢話を著者に聞かせた上、外交といふものは、女を口説くと同じことで、なんでもおしを強くしなくては駄目だなどと、柄にもない文句をならべたものだ。

二九 責め道具

英國首相グラッドストーンは、明治二十七年の三月に、その宿策たるアイルランド自治案が議會で否決された爲めに辭職し、外相ローズベリー卿が代つて首相となり、樞密院議長キムバレー卿が外相に轉任した。この政變は、さなきだに等閑視され勝ちの條約問題をますく遷延させた。

陸奥がロンドンの空を眺めて嘆息してゐた際に、恰も好し、青木とロンドンで下相談をしてゐたフレーザー公使が東京に歸任した。陸奥は、早速彼れを五番町の英國公使館に訪問した。

青木が言動ともに往々獨逸式の無作法に流れるに反し、陸奥は永らく英米に居ただけに、滿々たる霸氣を閑雅な辭令に包んでゐた。

陸奥曰く「青木子爵の最後の電信によれば、英國政府は、條約案調査中なりとて未だに本會議開始の運びに至らぬ由、何か事情でもあることか。」

フレーザー曰く「今回の條約案は從來のそれと異り、全然別種の對等主義となつてゐるので、その調査には法律専門家の意見を徵する必要がある。法律家といふものは、兎角瑣細な缺點をも指摘して名譽と心得る傾きがある。それ等の關係上自然手間取ることと思はれる。併し結局は貴國の都合好きやう運ぶこと、信じられる。」

陸奥曰く「それなれば、誠に幸ひである。實は、昨年末にホルトガル公使より日墨條約、即ち拙者がワシントンにて締結した對等條約を基礎として條約改正に應ぜんと申出あり、我が政府は苟くも對等條約なれば、何れの國とも協定しようとするものであるが、閣下不在中の代理公使——ここに列席されるド・ブンセン氏の申されるには、日本とホルトガルとの間に條約改正の義ありといふが元來條約問題に就ては、英國に率先権ありと了解あれとの事であつた。依つて拙者は、ホルトガルの提議に應じて貴國の感情を害するをはかり、氣の毒ながらホルトガル公使の請求を拆けたことである。かゝる行き懸かりもあることゆゑ、拙者は、貴國との談判を出来るかぎり早く開くことを切望する理由を有するのである。」

陸奥の言辭は頗る婉曲ではあつたが、その中には、一寸した威嚇が含まれてゐた。實は、英國が言を左右に託して交渉を段々遷延するので、陸奥は一策を案じ、日本に最も古い緣故あり、而かも今は

利害關係の最も薄いホルトガルが、對等條約の締結に應ずるの意あるを察し、一寸話を進めてから、その事情を外字新聞に出させたのである。

果せる哉、英國代理公使ド・ブレンセンはこれを見て驚いた。日本に居留する外國人で一番多いのが英人、日本との貿易で一番多額を占めるのが英國、その英國が、何事によらず他國に先んじられては英國の面目がつぶれる。英國の威信が立たない。かういふ考へからド・ブレンセンは、陸奥に對して條約改正の率先權は英國に在りと御承知相成りたしと申込んだのであつた。それを、今陸奥はフリーザーに向つて逆に責め道具に使つたのである。

フリーザー曰く「事情はお察しする。若し本國に催促の電信をうてとの御希望なれば、本使はしかするに躊躇するものでない。」

陸奥曰く「御好意忝なし。來月中旬頃に談判開始の運びに至るやう電報されなば幸ひである。」

フリーザー曰く「大隈伯時代に、毎度期限を定めて要求されたために、少からず英政府の感情を害したことがあつた。來月中旬とかぎらず、成るべく速かにとの意味にしたい。」

陸奥曰く「その邊は貴意に一任する。たゞ貴公使が本大臣の意見を至當と認めらるゝといふ意味をも加へられなば、一層効果ありと信ずる。」

フリーザー曰く「よろしい。」

三〇 獨逸式と英國流

陸奥のフリーザー訪問は、素より無益ではなかつた。其豫期よりも少し遅れたが、英國外相キムバレー卿は、明治二十七年の三月二十一日に、青木を外務省に招いて談判をはじめた。かれは、新任ながらなかく隅に置けぬ外交家ぶりを發揮して青木を翻弄した。

キムバレー曰く「閣下は、久しく獨逸に駐在して、同國の事情に精通し、殊に政略においては、ビスマルク流儀の人物かに拜察する。そもそもビスマルクの主義たるや、甲を與へて乙を取るといふ所謂交換主義なりと聞き及ぶが、今閣下の提案を仔細に査閲するに、求むるところのみ多くして、譲る所絶えて無きは如何。」

この高飛車の態度に、外の人ならたしかに肚膽を抜かれるところであるが、自負心満々として物に動ぜぬ青木にとつて、皮肉のやりとりは、お手のものであつた。

青木曰く「痛みいつたる御評言かな。如何にも拙者はビスマルク流儀に感染してゐるかも知れない。

ビスマルクは、仰せの如く甲を與へて乙を取るといふ交換主義である。併しながら、退いて考ふる

に、英國流儀は、甲を與へずして乙を取るといふ片益主義ではあるまいか。世界に太陽の没せざるほどの領土を得られた事實が、これを雄辯に物語つてゐるはすまいか。」

この青木の思ひ切つたシツペイ返しには、さすがのキムバレー卿も辟易したものを見て、突然ツハツハと哄笑した。

キムバレー曰く「話が十分横道にそれたやうだが、予の問はんと欲するところは、今貴國が治外法權撤廢と關稅増率といふ重大な利益を求めながら、これに對して如何なる報償を我國に與へんとするかといふ事である。」

青木曰く「從來二府五港に局限せられたる外國人に對し、内地全部を開放して、その居住及び通商を許すといふのが、たしかに一大讓歩である。」

キムバレー卿の所謂報償とは、こんな事ではなかつたので、彼れは話頭を一轉した。

キムバレー曰く「閣下は、昨今日本駐劄の露佛兩國公使が、ある野心を抱いてゐる事情を知られるか。」

青木曰く「未だ承知せぬ。」

キムバレー曰く「日本が英國と對等條約を結んだ後に、露佛は何等の讓與をも求めずに同一條約の

締結を快諾するものと思はるゝか。」

青木曰く「勿論然らんと思ふ。」

キムバレー曰く「若し石炭貯藏場を要求したならば如何。」

青木曰く「露佛にかゝる要求をなすべき權利ありとせば、貴國にも同様の權利があらう。併し日本は斷じて不法の要求に應ずるものでない。若し暴威を加へ來るものあらば、その露たるを佛たると將た何の國たるを問はず、我國は、全國を擧げて焦土となすも、敢てこれに反抗する。日本は二千年の歴史を有し、言語風俗を一にし、皇帝の軍令に服従する四千萬の民衆より成立つてゐる。一旦緩急あらば、洋式に訓練された二十五萬の兵士は立どころに骨を戰野に曝すを以て満足する。刀折れ丸盡きて城下の盟を忍びつつ、なほ餘生を貪らんとする打洩らされし腰抜け武士あるにあらざる限りは、寸土尺壤たりとも斷じて他國の手に渡さない。」

青木が、額に青筋たて、喋々辯じ來り辯じ去るの狀、目に見るやうである。

實は、これより先き、青木がベルリンから同行して來た顧問シーボールドが、英國外務省の一官吏から、日本は對等條約締結の報償としてその一島を英國に讓ふことはできまいかと問はれたことがあつた。それをシーボールドから聞いた青木の憤慨が、たま／＼こゝで勃發したのである。

かくて、キムバレーの報償希望は、青木の猛烈な辯駁で打ち消されてしまった。
由來英人は、故なく屈從する者を蔑視し壓迫するが、理窟を以て堂々と争ふ者を寛容するといふ氣質を持つてゐる。これが、青木が専任國の獨逸で失敗して、却つて兼任國の英國で成功した所以である。

三一 お世辭の交換

英國政府は、既に治外法權の撤廢と關稅増率との原則を認めたことゝて、陸奥の起草した條約案の内容については、大した注文も出さなかつたが、ただ文明國並の法典を完備するといふ條項を加へ、それから從來の永代借地權を所有權に代へられたいと言ひ出した。青木は、この位の事は聞き入れるがよいと陸奥に忠告した。

併し、新條約は五箇年後に實施されるものであるから、その間には法典は必ず完備する筈である。故に、條約の中に規定せずとも、事實上英國の希望にそふことになるし、又永代借地料は、昔のまゝに据置くことゝするから、所有地として高い税金を拂ふよりも便益であるといふ事情を辯明せよと、陸奥は青木に訓令した。

この二事は先方でも諒解したものと見え、談判は首尾よくまとまつたが、英國は、日本の政府が果

して排外的民論に打勝つことができるや否やについて、相變らず不安の念を抱いて、調印に躊躇するのであつた。

當時帝國議會に於ては、安部井磐根が現行條約厲行案を提出して對外硬論を主張し、多數の賛成を得たので、陸奥は大演説を試みてこれを反駁し、政府は十二月三十日を以て議會を解散した。青木は翌二十七年二月九日附で陸奥に送つた私信中に、

「議會解散の御演説は甚だ失敬ながら萬々上出来なり。従前國務大臣の演説中實質においてその右に出づるもの更になし。尙ほ貴宣言に依り既定の國是復活するに至りたるは、爲國家大賀々々。この上は、何卒餘生を貪らず、八方美人的彌縫思想を排棄し(但しこの思想は老兄に尤も少けれども)斷乎たる御決心にて天皇の大權を擁護維持することに御勉め可被下候。老兄死すればとて決して犬死はサセ不申候。」

と先づ柄にないお世辭を云ひ、尙末段に、左の通り書いてゐる。

「老兄の斷乎たる御演説ありたるに拘らず、我國よりの通信は引續き我に不利なる事のみにて、現に當國皇帝並に外務大臣は生に對し、實に身に切り込む様な言葉をもつて我國の情態を批判被致申候。公平に斷言すれば、我政府は、明治元年來の信用を谷子、西村茂樹、神輦知常等の最近四

五年間の舉動に由つて全く地に墮されたりと見るべし。併し氣運一轉すれば、案外好結果を可得と内々樂み居り候。老兄が開國主義を宣明し且攘夷者流の運動を彈壓被成候故、當國政府の懸念も稍減少致候。依つて第六期議會開會以前には、是非奏功致度存居候。』

陸奥の方でも、青木の書狀と行き違ひに出した三月二十七日附私信中に、
「例の談判は、老臺にあらざれば逆も出来ぬだけの働き（決してお世辭にあらず）を以て、歩々御進め被下候事と百も承知なれども、内國の形勢は日一日と切迫し、政府において何か人目を驚かす程の事業をなすにあらざれば、この騒々しき人心を鎮靜すべからず。さりとして故なき戦争を起す譯にも不參候事故、唯一の目當は條約改正の一事なり。内政の關係より外交の成功を促すは、本末顛倒の嫌ひなきにしもあらざれども、時勢が時勢故實に不得次第に御座候。」
と苦衷を洩らしてゐる。何時の世でも、外交には内政が付きまとふものと見える。

三二 喜悲交も至る

陸奥が、ロンドン及びワシントンに於る條約改正談判の懸引や、譯もなく對外硬論を絶叫する議會の對策などに就いて、千々に心をくだいてゐる眞最中に、突如として韓半島の空に穩かならぬ急雲が

動き出した。事の起りは、京城に駐在してゐた清國の欽差大臣袁世凱が、朝鮮を自國の配下に置き、日本の勢力を韓半島から驅逐しようとしたらみ、名を内亂鎮撫に假りて自國の軍隊を招き入れ、宗主たる威勢を内外に示さんとしたので、それを袖手傍觀してゐては、日本の面目が丸潰れとなるので、日本も亦兵隊、軍艦を急派せざるを得なくなつた。

こゝにおいて、日清兩國の危機は、眞に間一髪をいれぬほどに急迫した。その間に、英露二國が干涉の手を延ばし始めたので、時局はますます紛糾し、折角順調に運んでゐた條約改正談判にまでも、容易ならぬ影響を及ぼさんず形勢となつた。

陸奥は、後年、この間の消息を語り、當時を追想すれば、悚然として膚に粟を生ずる想ひありとまで言つてゐた。こゝに彼れの述懐談を紹介する。

「ロンドンに於る條約改正の事業は、内國に於て、排外的保守論者が議會の多數を制せんとする傾きがあるために、幾度も畫餅に歸せんとした。幸ひにして政府は、斷乎たる態度を以て議會を解散し、不穩の言論を弄する政社及び新聞を彈壓して、條約改正の事業を百難の中に僅に一條の活路を開いて進行し、青木公使より、七月十三日附を以て「本使は、明日を以て新條約に調印するを得べし」との電信を受け取つた時は、殆ど彼岸に達したと思はれた。」

この話は、陸奥から幾度も聞かされたが、何時もこの邊で感慨無量の色を、その豪傑風の顔面に浮かべるのであつた。

「吾輩がこの電信を受取つた日はそも如何なる日ぞ。鷄林八道の危機旦夕に迫り、青木の電信に接した日から僅二日前に、吾輩は大鳥公使に對し「今は斷乎たる處置を施すべき時局に陥れり。如何なる辭柄を以てするも差支なし。實際の運動を始めよ」と電訓した。この斷案を與へる迄の苦心慘澹、實に名狀すべからざるものがあつた。今青木からこの喜ぶべき吉報に接して、吾輩は歡喜の餘り、頓に積鬱を忘れてしまつた。」

陸奥は、こゝで俄然その語調を一變した。

「豈科らんや、翌日になると、青木から驚くべき電信が來た。「總ての準備を了し、本日條約に調印する筈なりしに、英國外務大臣は俄にこれを峻拒せり。その故は、京城駐劄日本公使が朝鮮政府に向ひ、同政府の海軍教師たる英人コールドウエルを解備すべしと要求せりといへる電報と、日本軍用電信が仁川の外國人居留地を貫通して架設せられたりといへる電報とに接したるに由る。英國外務大臣は特にコールドウエルの件に付き満足なる説明を求む。貴大臣は右朝鮮政府に對する要求を速かに撤回するにあらざれば、新條約は遂に調印し難かるべし。英國政府はこの照會に對し月曜日

を期限とし回答を望む」とある。月曜日といへば、青木の發電日附より僅に二日を餘すに過ぎなかつた。吾等はこれを見て、前日の歡喜に數倍する失望を感じざるを得なかつた。」

三三 對英新條約調印

陸奥は、なほ述懐談を續ける。

「吾輩はかねて大鳥公使に對し、朝鮮問題が如何やうに變轉するとも、第三者たる歐米各國の感觸を害するが如き措置を慎しむべしと訓令して置いたのである。事情の如何を問はず一英人を解雇するために、ロンドンに於る垂成の大業を一朝にして畫餅に歸せしむるほど愚なことではない。この事件の虛實につき直に大鳥に問合せたが、時期切迫してその返電を待つ餘裕がない。止むを得ず自己の責任を以て、青木に對し「帝國政府は朝鮮政府に、未だ曾てコールドウエル解備の要求を爲せしことなし」との答電を發した。間もなく大鳥よりコールドウエルに關し何等の要求を爲せしことなしと返電し來り、次いで京城駐在英國總領事は、袁世凱に左袒し力の及ぶ限り我國の地位を困難ならしめんと謀るものゝ如し。これ果して英政府の方針なりや御問合せを請ふとの電報が來た。こは好き辯明材料なりと思ひ、そのまゝ青木に轉電したところ、爾後二日間を過ぎて、青木から

何の沙汰もない。あるひは百尺竿頭わづかに一步を餘して失脚したのではあるまいか。わが輩は心痛の餘り、殆ど安眠ができなかつた。」

陸奥の話は、ますく佳境に入り、聴く者をして固唾を飲みしめる。

「すると、七月十七日の拂曉に、外務省の電信課長は、わが輩の臥房を叩き、一通の電信を渡した。それを見ると、今回の困難も漸く排除し得て、七月十六日を以て調印を了せり。本使は茲に謹んで祝詞を天皇陛下に奉り、併せて内閣諸彦に向つて賀意を表す」とある。わが輩は、思はず欣躍し、蒲團を蹴つて起き出で、齋戒沐浴して宮城に馳せ付け、御前に伺候して、日英條約調印了の旨を伏奏し、次で青木公使に對し、天皇陛下がその成功を嘉みし給へる旨、並に内閣同僚を代表して青木に祝意を表する旨を電報した。一生の中で、この時ほど快感を覺た事は前後に絶えて無かつた。」日清戦争は、明治二十七年八月一日を以て布告されたのであるから、對等條約の調印は、それより僅に二週間前のことであつた。

英國外相 キムバレー卿は既に日清開戦を豫想してゐる様子であつたが、それが案外にも、條約の調印を遅延するよりもむしろ速進する動機となつた。といふのは、いよく開戦となれば、日本は忽ち軍器軍艦を要するのであるが、その時は、必ず日本に好意を示す國に、その注文を向けるに相違な

いと考へたからである。

青木は、最後に左の通り陸奥に報告してゐる。

「回顧すれば、去る二月中當地に赴任致し候以來、公談私話殆ど五十回程も經由したる末、漸く談判相繼まり可なりの條約相調へ候故、大命を辱めず並に老兄及び内閣諸公の信任を全うするを得申候。尤も昨年来屢々困難相生じ候節は、老兄乃ち機敏にこれを排し、生をして商議を繼續し得るの位置に立たしめられたり。否らざれば、生の瘦腕焉ぞこの功を奏するを得ん。その勞を鳴謝し爲國家唱萬歲矣。この舉に由り、三十年の汚辱を一掃し、一躍して文明國の仲間入相叶うたるは實に大賀々々。」

三四 關稅問題の今昔

顧みれば、いはゆる文明國たる歐米諸國が、東洋後進國の門戸をたゞいて、開國を促した時には、先づ以て治外法權を設定して、自國の居留民には、自國の法律と裁判を適用すると同時に、自國の物品を輸出して、不當利得を貪ほる目論見で、自國品に對する關稅を總て五分以下に制限したものである。

日本は、安政五年から明治三十二年七月十七日まで、この不當な壓迫の下に苦しめられ、支那は、一八四二年（天保十三年）始めて英國と條約を締結して以來八十餘年に亘る今日、なほ同様の苦境を脱し得ないで苦しんでゐる。

大正十二年のワシントン會議で、ウエリントン・クーといふ洋名を誇つてゐるハイカラ外交官顧維鈞が、支那委員として、從來の五分税を一割二分五厘に引上げようとして、夫婁那の辯をふるつたが、終に列國の容るゝところとならず、討議の末、漸く必需品には、現行税率に二分五厘の附加税を課して七分五厘とし、奢侈品だけに二分五厘以上五分以下の附加税を課して最高一割とすることに、條約で定められた。併しそれにさへ細目は更に北京で協定すべしといふ條件が付いてゐる。

その時から五年も過ぎて後、一昨年（一九一三年）から昨年にかけて各國の代表者が堂々と北京に乗こんで、八箇月間も慎重審議をこらした。

この關稅會議に於ては——今その内容を素破抜けば——主として奢侈品の定義に就て空論を闘かしたに過ぎなかつた。

日本より支那に輸出する燕の巢や、乾海鼠は如何。日本委員曰く、これは、食料だから必需品である。支那委員曰く、否上流社會の食膳のみに上る贅澤品だ。英國より支那に輸出するステッキは如

何。英國委員曰く、老人や病人は勿論、紳士の身邊に欠くべからざる必需品である。支那委員曰く、否按摩の杖でないかぎり、總て贅澤品だ。と、こんな水掛論が、止めどもなく繰返された。

さうかうする中に、執政内閣は突如として没落してしまつた。そのドサクサまぎれに、會議はいつの間にかやら雲散霧消、五分税制限は、依然として元の李阿彌とある。

それを思へば、我が陸奥はえらかつた。今から三十年も前に、自ら作製した税則を提げ、世界で一番勘定高い英國をして、大した修正なしに同意せしむることに成功したのである。彼れの提案は、原則として、最低五分、最高一割五分となつてはゐるが、一割五分としたものは僅に靴底皮、絹綿繻子の二種だけで、概して一割に止め、しかも塊鐵、軌條、電線、鉛、水銀、セメント、硝石、乳膏、乳粉の九品を依然五分に据ゑ置いて、急劇の變動を避けることに注意したなどは、なか／＼うまいやう口であつた。

かういふ飴を食はして置いて、酒類、煙草、砂糖、兵器、船舶、鐵道客車、汽關車、機械類、藥材、棉花、羊毛、苧麻、石炭、茶鉛の十四品及び年額五萬圓に足らざる物品は、總て條約の協定外に置き、日本が自由に課税することに定め、これらの物品に就ては、全然自主的關稅權を獲得したのである。そこで、杖や傘や造花や寫眞器やは關稅五割、香水や懷中時計は同じく六割、製造煙草は二十五割

といふ高率の國定稅率を設けた。これらの物品に就ては、條約に關係なく關稅を賦課することにしたのであるから、それより後は、勝手に増率を斷行することができたのである。

三五 カイゼルの謎

青木は、駐獨公使を本職とし、駐英公使を兼任してゐたのであるから、本來ならば、英獨に對し同時に開談すべきであつたのであるが、青木の見込みでは、初めから獨逸に對等條約を持ち出したところで、容易に受けつける模様がなから、先づ英國との談判を濟ませ、それを圓にして獨逸を説きふせようといふのであつた。

日英條約が、首尾よく纏まつたので、青木は例の調子で、自慢氣にその成功を吹聴しつゝ、獨逸との交渉を開かうとした。

この時、三十五歳のカイゼル（ウイルヘルム二世）は、先帝三代に歴仕せる功臣にして、前後三十九年間も大宰相の地位を占めたビスマルクを一朝にして弊履の如くに見棄て、自ら帝權神授論を振りまはし、血氣にまかせて、内治外交をその一手に專斷してゐた時代であつた。青木が專任駐獨公使でありながら、獨逸と餘り仲のよくない英國と第一着に條約を締結してしまつたのが、この自尊心の

旺盛なカイゼルの逆鱗に觸れずにある筈がなかつた。

果せる哉、青木が條約改正問題に言及するや、カイゼルは、知らぬ顔をして、

「どうぢや、日本は、英國にばかり軍艦を注文するが、たまには獨逸にも一二隻ぐらゐる頼んでは。」などと厭味を言つた。青木は、こりや魚心あれば水心の謎だわいと早合點して、

「陛下の思召、至極御尤もで御座る。一應本國に注意いたしませう。」

と答へて、その趣きを外務省に電報した。併し軍艦はイギリスに限ると極めてゐた海軍省は、青木の獻策を用ゐるほど融通がきかなかつた。

さうかうする中に、日本軍が黃海に旅順に連戦連勝し、その清兵を驅逐すること、さながら疾風の落葉を捲くが如しといふ飛報が世界に傳はつた。青木は、好機いたれりとて、カイゼルの御機嫌を伺つて見た。

すると、カイゼルはにがい顔をして、

「幸運の神は、いつも日本ばかりひいきにしないぞ。」

といつたので、さしも豪氣の青木も、その心を解きかねて沈黙してしまつた。

陸奥は、青木から、おもしろからぬ報告に接し、早くも獨逸に見切りをつけて、米國との談判を急

いた。

三六 對米豫備交渉

この時、米國ではデモクラット黨のクリーヴラントが大統領で、グレシヤムが國務長官となつてゐる。日本に對しては可もなく不可もなしといふ位のところであつたが、米國は、曩に無駄に大隈案に調印させられ、今又蟲の好い對等案を突き付けられたのであるから、素より好い心持ちはしなかつたに違ひない。

それに、その説明の任に當つた建野郷三は、その後知事に左遷されたほどの凡物、その上、肝腎な英語が不得手で通譯を介したのであるから、なか／＼埒があかなかつた。

陸奥が建野に開談を訓令したのは、明治二十六年九月十五日のことで、建野が非公式に交渉を始めしたのは、二十七年三月十四日である。この間に半年といふ短かからぬ月日が徒らに経過してゐる。

建野に米國政府の意嚮を探らせて、條約改正に對する誠意が十分にあることを看取した後に、始めて正式談判に取掛るといふのが、陸奥の考であつた。然るに建野は、非公式の會談では交渉がはかどらないから、始めから全權委任を受けて正式談判をしたいと言張つた。斯くて兩人の間に押問答が續

いたのであつた。

陸奥は明治二十七年の二月二十日に東京駐米國公使ダンと會見して新條約案の要領書を渡した。

陸奥はまた五月十八日に、折しも來遊中であつたフォースターと會見した。フォースターはレバブリカン黨の領袖で、嘗ては國務長官も勤めた米國政界の大立物である。陸奥は彼をうまく利用しようと思つた。二人の話柄が、日米條約改正の問題に及ぶと、フォースターは隔意ない意見を述べた。

「貴國の望まれる條約全般の改正事業は、いま須臾らくの間猶豫し、差し當り關稅改正の談判を遂げて、歳入の増加を計ることにされては如何。そして時機の到來を待つておもむろに全般の改正事業に掛られるのが得策であると思ふ。」

陸奥は、例の雄辯を振つて、條約改正の沿革を一通り縷述し、現在の我が國情より見て、この事業を一日も閑却することの出来ないのみか、現内閣は種々の歴史的關係からして、これが必成を期しなければならぬ理由あることを述べて、歸國の後には相當の助力を與へられたいと云つた。

豫ねて陸奥と相識の仲であつたフォースターは、陸奥の熱心に動かされた。

「御説御尤もである。自分は現政府とは黨派を異にしてはゐるが、此度も已に現政府の委任を受けて巴里の會議に參列したし、且つ國務長官のグレシヤム氏とは同窓の好みもあつて、懇意の間柄で

あるから、自分の説は多少納れられることと信するゆゑ、歸國の上は、日本政府の冀望が達せられるやうに必ず盡力する。」

フォースターは、歸國後、果して陸奥との約束を忠實に履行した。彼の盡力は、建野の奔走よりも効力が多かつた。それまで甚だ養え切らなかつた米國政府の態度が一變したのも、フォースターの盡力の結果である。

その頃、米國政界は頗る多事多端で、内閣會議は頻繁に行はれ、政府黨たるデモクラット黨は、下手をすると内部に波瀾を起すやうな状態であつた。殊に當時支那人の入國拒絶に關する條約を支那と結んだばかりであつたから、日本と對等條約の談判を始めるには、時機が悪るかつた。

建野が、

「グレシアン氏は、大體において條約案に同意を表しながら、米國政府の懷抱する所の意見を逐一本官に語らず、たゞ商議の時機宜しきを得ざる事情のみを反覆詳説するのみ。」

と、報告したのは、かういふ事情があつたからだ。それにも拘らず、グレシアンを巧みに説得して、米國政府の注意を條約改正の方面へ向はせたのは、例のフォースターであつた。七月六日に建野が外務省に送つた電信の報告文に、左の文句がある。

「米國政府は、裁判權及び稅權に付ては、日本が要求するよりも更に多くの讓與を爲すべし。只だ一の困難は、元老院に於ては、無制限に移住を許すこととなるべき規定を有する條約(住居の自由)は、多分之を批准することを拒むならんといふ一事なり。但し此等の規定を削除若くは修正するに於ては、國務長官は直ちに條約を締結する意嚮を有せり。」

これは、國務長官がフォースターに云つた言葉を建野が亦聞したものであつて、建野自身が國務長官から得た言質ではない。併しこれに依つて、米國政府に十分の誠意があることが判つたから、陸奥は十一日に、

「本大臣は茲に閣下に向つて條約改正の件に付米國國務長官と公然の談判を開始することを命ず。」と電報し、越えて十六日に、

「右談判全權御委任狀は速かに御授與相成候様本大臣より奏請可致候。」といふ機密信を發して、即日、伊藤總理を経て委任狀の御下賜を奏請した。

その翌日の内閣會議で、伊藤は、建野から受取つた書狀を陸奥に渡した。陸奥が、何氣なくそれを見たと、條約改正談判の委任狀を幾度び請求しても、陸奥が言を左右に託して送らない事情を述べた後に、

「如斯自分に信任を置かざる上官の下に、此の上執務するは、小官の到底耐へ得る所に無之候に付き、本書着次第直ちに召還の手續相成候様御取計被下度奉願候。」とある。陸奥は、之を見て、一時はムツとしたが、丁度建野を代へたいと思つてゐたところであつたので、伊藤に、御委任狀下付の手續を取消してもらひ、すぐに建野に歸朝を電命した。

三七 栗野と原と加藤

建野公使を召還した陸奥は、當時政務局長たりし栗野慎一郎を以てこれに代へることにした。

栗野は、福岡藩の秀才で、曾てハーヴァードに留學して米國の事情にも通じ、別けて井上時代から條約改正事務にたづさはつてゐたのであるから、談判委員としてはこの上もない適任者であつたが、政務局長から一躍して米國公使になつたのは、彼を以て空前絶後とする。

栗野は、その早成が禍してか、在外使臣で終始し、一度も大臣にならなかつたが、陸奥が、栗野の後任として政務局長に拔擢した加藤高明は、後に公使となり、大使となり、外務大臣となり、總理大臣とまでなつた。

加藤が政務局長となつた時分に、原敬は通商局長であつた。原は、陸奥が駐米公使から農商務大

臣に轉任した時に、駐佛公使館書記官から陸奥の秘書官となり、陸奥が外務大臣となつた時に、外務省に連れて來られて通商局長に任せられ、それから次官となり、朝鮮公使となり、内務大臣となり總理大臣となつたのである。

加藤と原とは、共に陸奥に引立てられ、且つその薰陶を受けた人物である。彼等の人品性格は陸奥とは大分違ふけれども、その豪膽にして物に動ぜず、難關に處して巧みにその對策を廻らすといふ特徴に於て、兩人ともよく陸奥の衣鉢を襲いだものと見る事ができる。

さて、栗野が駐米公使としてワシントンに到着して、國務長官グレシヤムと正式談判を開いたのが明治二十七年の九月二十一日、丁度日英條約調印から二ヶ月後であつた。

栗野曰く「今や日本は列國に對して條約改正の談判中で、英國の如きは、眞つ先に調印を済ましたのである。若し米國がこの上に時日を遷延することなく、英國に次で調印せらるゝにおいては他の諸國も必ずその例にならふべく、日本は、米國の好意を徳とするのみならず、日米間の貿易もまたますます繁盛に赴くべきは、本使の信じて疑はぬところである。」

グレシヤム曰く「米國は好んで談判を遷延するものではない。ただ米國にとつて特に考慮を要するは勞働者渡米の一事である。條約案第一條に、兩聯盟國の一方の人民は、他の一方の版圖内何れの所

に渡來し旅行し居住するも全く隨意たるべしとあるが、かくては、日本移民の無制限渡米を認めることになるから、到底元老院の協賛を得る見込みがない。この點は、建野前公使に再三説明したが諒解されなかつたやうである。」

栗野曰く「建野氏の諒解しなかつたのも無理はないと思はれる。そもくこの條項は、治外法權撤廢の報償として外國人に内地雜居の特典を許す目的に外ならぬから、貴國の移民制限方針に牴觸するなどは、思ひも寄らぬことである。」

栗野とグレシヤムが、數回の會見を重ねて、双方の間に諒解が大分できた時分に、一つの問題が持ち上つた。或日、グレシヤムは、眼の色を變へて栗野に突ツかゝつた。

「近頃、條約改正に付いて、米國の新聞紙上に種々の批評が散見するばかりでなく、外交上の機密が時々漏洩するやうである。自分一個に對する批評や攻撃などは、毫も意に介する所ではないが、新聞紙の力を假りてこの改正事業を果すといふことは、予の好まぬ所である。予は、條約改正に關する米國新聞の報道は、みな日本公使館から出るといふことを承知してゐる。かういふ風では、貴下と談判を繼續することは通も出来ない。」

これは、ニューヨーク・トリビューンに、東京發米人記者の通信に、日本が對等條約を要求するの

至當なる理由を詳論し、動もすれば、國務長官グレシヤムが逡巡遲疑するの狀あるを非難してあつたので、これはてつきり栗野の顧問として公使館にゐたスチーヴンスが、東京通信に擬して書いたものであると、グレシヤムが早合點したのであつた。

栗野は、意外なグレシヤムの態度に驚かされたが、併しそれは全く誤解であつたので、冷靜に辯明した。

「予は、閣下が、我が帝國に對して最も懇篤なる友誼の精神を抱懷せられることを、限りなく感謝してゐる者であるから、予を始め我が公使館員が新聞に訴へて閣下を攻撃することなどのあらう筈がない。それに外交談判の性質たる、素より祕密に屬するものである位のこととは萬々承知してゐるから、我が公使館から機密の漏洩する惧のないことも、茲に斷言して敢へて憚らないが、併し閣下がさほど心配されるなら、この上なほ館員等を戒めて十分の注意を加へさせよう。」

この東京通信は、陸奥外相が談判を促進する目的で、大學教授米人ハウスに頼んで書かせたものであつた。それを栗野が知つてゐたので、一寸恐縮したが、公使館の關係しなかつた事は栗野の云つた通りであつた。

グレシヤムが結局栗野の辯明に満足したので、談判は従前通り順潮に進行することになつた。

栗野が談判を始める前に、陸奥やフォースターや建野などに依つて、お膳立はあられまじ出来上つてゐた。米國政府にも誠意を以つて談判を開く希望は十分にあつた。謂はゞ總べての事情は、道を直くして栗野の來るを待つといふ有様であつた。だから談判は豫想外に都合よく進行して、多少の頓挫を見たのは、たゞ第一條の住居の自由、即ち無制限の移民を許す許さぬといふ一事であつた。

數回談判を重ねた後、兩國民の往來は自由とするも、「勞働者の移住に關する諸法律を遵奉すること」といふ條件を附することになつた。さすが炯眼な陸奥は、栗野をして「外國人一般に適用せらるる諸法律」とすることを主張せしめたが、グレシヤムはそれを承知しなかつた。この條約が繼續したために、米國は今日でも日本人だけに適用する差別的移民法を制定することができるのである。

グレシヤムは、移民制限を主張する代りに、日本の關稅自主權を認め、たゞ最惠國條款に依り、日英協定稅目に均霑することとし、關稅に就ては、何の要求も出さなかつた。

斯くて、栗野が正式談判を始めてから丁度二箇月を経過した十一月二十二日に、兩國全權は滞りなく調印を了することが出来たのである。

三八 突飛な離れ業

調印後は、米國元老院が必ず新條約を批准すべきことを確信して、たゞその時日の一日も早いやうにと、政府當局や元老院議員の重立つた者を歴訪して、栗野が盡力奔走してゐる中に、意外な方面から二つの故障が持ち上つた。一つは、旅順に於ける我軍の虐殺事件で、もう一つは元老院に於ける條約文の修正である。

「さなきだに、勇敢無雙な日本兵は旅順の壘外において、清兵のために、殘忍なる汚辱を加へられた同胞の死體を發見するや、忽ち阿修羅の如くに暴れ出し、旅順占領後四日間に亘つて、老弱男女の差別なく無辜の市民を手當り次第に虐殺した。その兇刃を逃れんとして海中に飛び込んだ子女數を知らず、従軍の外國武官及び特派記者は、この地獄に等しき慘狀を目撃しながらそれを制止することができず、ただ空しく悲惨の想ひをなすのみであつた。」

「その時、虐殺を免れた支那人は、全市において僅に三十六人に過ぎず、しかもこの三十六箇の豚尾漢は、その帽子に「この者殺すべからず」との標札を附けられ、たゞ同胞の死骸を埋葬する役目に使はれるために助けられたのである。」

さながらダンテの地獄物語で見らるやうな記事が、十一月二十八日のニウヨーク「ウォールド」新聞の第一ページ全面をうづめた。それは、同紙の特派員グリーンルマンが、上海から打電した通信であつ

た。

日清戦争の初期に當り、米人は一般に日本に同情を表したが、それは、ジャック（少年）がジャイアント（巨人）を見事に打ち倒したのを見て拍手喝采するといふ氣分に過ぎなかつた。今そのジャックが血にかつゝ狼と化したといふのであるから、そら日本人は野蠻の本性を露はしたぞと、猛烈に罵り始めた。

數日前（十一月二十二日）に調印済みとなつた日米條約は、この時恰も元老院に廻されて審査中であつた。

陸奥が十二月初めに、栗野から受取つた電信には、

「米國々務長官は、本官に告ぐるに、若し日本兵士が旅順口において清國人を慘殺せりとの風聞眞實ならば、必定元老院において容易ならざる問題を惹起すに至るべき旨を以てせり。」とあつた。陸奥はこれを見て悵然として嘆息したに違ひない。

四日後の「ウォールド」紙上に陸奥の署名ある電文が發表された。

「旅順虐殺の報道には多少誇張に失するものあり。例へば、被殺者の多數を非戦闘員といふも、實は清兵が市民に假装せし者なり。日本兵の規律嚴肅なるは、各方面における戰場において常に内外

の稱讃を博したる事實に鑑み、獨り旅順に於てのみ常規を逸するいはれなし。若し非違の行動ありしとせば、政府は軍律に照らして處分して假借する所なかるべし。眞相の未だ判明せざる今日、世界の公論は、暫く最後の批判を下すを遠慮せよ。」

この陸奥の辯明は、容易に讀者の目に留る第一頁の中央に載せられ、大見出しには「Japan Conference.」—日本自白す—としてあつたが、その社説においては、

「一國の外務大臣が外國新聞に辯明書を送れるは、これを以て嚆矢とす。陸奥氏はかつて永く駐米公使として文明の空氣を吸ひたる人なればこそ、斯る公明正大の態度を執るを得るなれ。」との讃辭を吝しなかつた。

陸奥の突飛な離れ業は、米國の輿論を緩和するに與つて大に力があつたと見え、元老院の外交委員會は、旅順事件を天から問題にせず、全會一致で日米條約を可決して、本會議に移した。

新條約を鵜呑みにするものと信ぜられた元老院の本會議は、鵜呑みどころか、翌年の一月三十日に重大な修正案を提出した。

第十九條の原文には、

「兩締盟國の一方は本條約實施の日より十一箇年を経過したる後は何時たりとも本條約を終結せん

と欲する旨を他の一方へ通知するの権利を有すべし。」とあつた。その中から●印を附した部分「本條約實施の日より十一箇年を経過したる後は」を削除したのである。

一寸見ると、附帯規則とも云ふべき條文の中から二十一字を削除したばかりであるから、左したる修正ではないと思はれるかも知れないが、事實は決してさうではない。

新條約は調印の日から五箇年を経過した後に始めて實施されることになつてゐる。それから滿五年間實施された後、即ち十一箇年を経過した後に、廢棄して改訂するといふ趣旨であるのに、元老院の修正のやうに何時にても廢棄ができることになる、假りに米國が調印の日から四年目に新條約を廢棄すべき旨を通告して來るものとして、これに一箇年の猶豫期間を加へても、新條約は實施の期間前に消滅することになり、暗から暗に葬られねばならない。

陸奥の疝癢は破裂しようとした。彼は慨然として云つた。

「米國の眞意は、一體どこにあるのであるか。條約廢棄權といふものは、元來條約に依て與へられたものであるから、當該條約を實施した後でなければ、行ふことはできないのだ。だからこの元老院の修正は、不當極まるものと云はねばならぬ。」

栗野は、勿論修正の不當を鳴らして、國務長官や元老院議員の間を奔走して廻つた。栗野と修正案提出者たるフライとの間に、次のやうな問答が交はされた。

栗野曰く「一體元老院は、新條約を實施前に廢棄せんとする意志を持つてゐるのか。」

フライ曰く「否、元老院は、舉つて今回の新條約に賛成する。この修正を敢へてしたのは、たゞ米國の貿易が不利に陥つた場合に保護せんがためであつて、他意あるわけでない。」

栗野曰く「然らば元老院は、今回の修正案のやうな誤解を生ずる虞あるものを棄てて、これを再調査に附して、元老院の意志を一層的確に表示する字句を以て、再度の修正を行はれたらどうか。」

フライが聲明したやうに、元老院の希望は、保護貿易主義に立脚したる新條約實施年限の短縮に在るのみであつたから、彼等は、栗野の意見を諒するとともに、自己の行つた修正の妥當ならぬことを認めて、快く之れを再調査に附することにした。

元老院は、二月五日の會議に於て、曩に削除した部分に、改めて「其後」——Thereafter——なる語を挿入して、滿場一致で之れを可決した。「其後」とは「條約を實施したる後」といふ意味である。これ新條約は、如何なることがあつても、暗から暗に葬られるやうな心配だけはなくなつた。

日英及び日米條約が出来てからは、他の國々との談判は、別段の難關にも遭遇せず、次から次へ

と纏まつて行つた。

三九 春秋に義戦なし

維新當時は勿論のこと、今から三四十年前以前には、日本の存在さへも、世界の人々に知られなかつた。著者が青年の頃、米國に留學してゐた時代には、

「おい君！ 日本は何處にある？ 一體地球の内か外か。地圖を見ても目付からないぜ。」

「君の眼が悪いのだ。そら！ こゝにあるぢやあないか。」

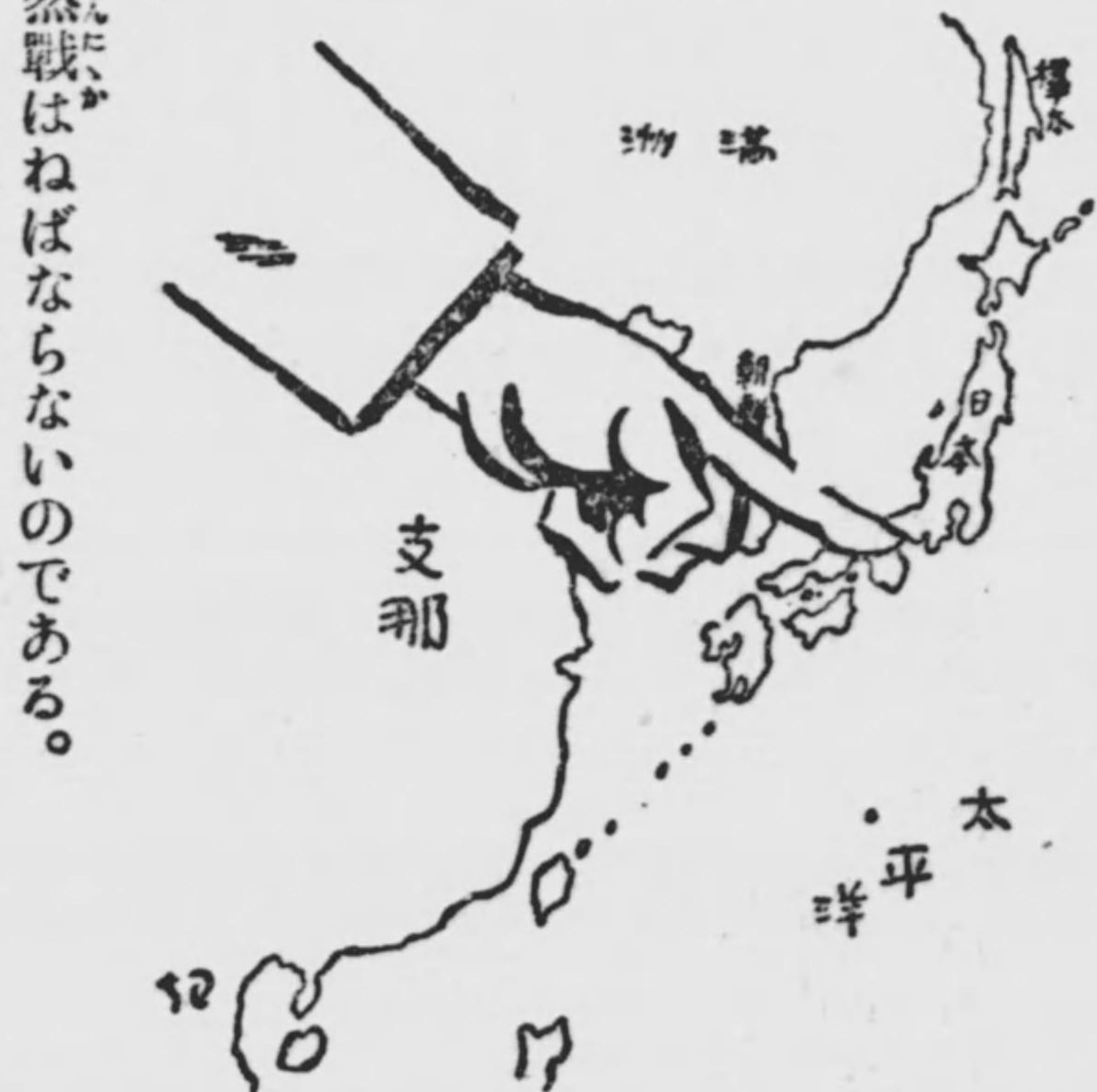
「なんだ。それか。支那の一部だな。」

といふやうな馬鹿けた對話が繰返されたものだ。

日本が、獨立國として普ねく世界に認められるやうになつたのは、日清戦争以來のことである。日本が列國と對等の地位に上つたのは、條約改正の結果であると同時に、戦争のお蔭である。つまり強大な清國に打勝つだけの實力を備へてゐる事實を立證したからだ。今日でさへ、白人の侵略に無抵抗に屈伏する民族は、總て野蠻又は半開の極印を打たれてゐる。

孟子は「春秋に義戦なし、これ彼よりも善きは則ちこれ有り」と言つた。戦争はどう考へても正道

ではない。それは宛かも個人間に於て、曲直の判断を腕力に訴へるのが不法であると同じ理窟だ。但し國際間においては、まだ有力な裁判所ができてゐないから、ある國が暴行を逞しうするにあたり、これを防ぐために兵力によらねばならぬ場合がある。戦争は、根本的に悪いとするも、それは侵略的若しくは攻撃的戦争をいふのであつて、自衛的若しくは防禦的戦争は權道ながら先づ正當と見ねばならぬ。少くともこれは彼よりも善きものである。



あつたにせよ、唇齒輔車ともいふべき關係をもつてゐた。朝鮮が若し他國の手に落ちたら、日本に取つては、その手足を割かれるやうなものであり、またその咽喉を締められるほど危険である。かういふ場合に、日本としては、

成敗利鈍を顧みずして、決然戦はねばならないのである。西郷の征韓論以來、我國の對韓策は、軟弱とも退嬰とも卑屈とも、言ひやうのないものであつた。

明治十五年には、大院君、暴漢を使喚して花房公使を驅逐した事件あり、その十七年には、清韓兩兵聯合して日本公使館を襲撃し、竹添公使身を以て免れた事件があつた。日本は、この國辱に對して、斷乎たる手段をとることが出來ず、たゞ伊藤が自ら天津三界まで出かけて行つて、李鴻章と折衝し、單に清國の駐韓兵を撤去せしめ、將來出兵の場合には互に知照すべし、といふ消極的條約を結んだに過ぎなかつた。

袁世凱は、約束の如く撤兵はしたものの、依然として朝鮮を屬國視する態度を改めなかつた。明治二十七年の五月に、東學黨が閔族政府に反抗して亂を起し、微力の韓廷、その鎮定に苦しむを見るや袁世凱は好機乘すべしとなし、私かに時の領議政（首相）閔泳駿に旨をふくめ、表面朝鮮より清國に對し出兵救難を請はしめたる體に裝ひ、他方には主戰論者たる李鴻章と謀し合せて、三衛（一衛五百人）の兵を威海衛より、内亂の根據地に近い忠清南道牙山に派遣した。

四〇 戰雲低迷

今、袁世凱が内亂鎮定の名義を以て、軍隊を朝鮮に派遣したと聞くと、陸奥は、早くも、山雨來らんと欲して風樓に滿つ、の感にうたれた。

その時、日本の微弱なる、とても強大な清國の敵でないから、多少の犠牲を忍んでも、暫く無事を計るに如かずといふ軟論を唱へた者が、内閣中に少くなかつた。併し、東洋の文明國を氣取つて既に對等條約を要求しつゝある日本として、理不盡な隣國の暴威に無碍に屈伏したとあつては、今後他國に向ける面目が無くなる。仲るか反るか、乾坤一擲の大博奕をやるより外はないと、陸奥は固く心に決した。

そこで、彼は、軍事にかけては東洋のモルトケといはれた參謀次長川上操六（參謀總長は熾仁親王）の處へ駈け付けて、その意中を探らうとした。

「清國の今度の出兵は、その前後における彼の傍若無人な振舞ひに照らし合せて考へるに、歴然として朝鮮併呑の爪牙をあらはし來つたものと見ねばならぬ。よしんば、外交手段を以て一時を彌縫し得るとしても、結局は一戰を賭するか、將た全然韓半島を放棄するか、二途その一をえらぶの止むなきに至るものと思はれる。貴見如何。」

この短刀直入の質問に對し、川上は少しも躊躇する様子なく、即座に口を開いた。

「失禮ながら、姑息の外交で後患をのこすよりもむしろ一刀兩斷の大策を執行されるがよからう。若しそれ軍略に至つては、拙者の胸中既に成算あり、御心配に及ばぬ。」

陸奥は、これを聞いて、天下の英雄たゞ使君と操とあるのみと心に歡んだに違ひない。彼は、その足で直ぐに西郷海相を訪ひ、危機切迫の事情を語つた。西郷は何の意見も述べず、たゞ、

「何事でも、できる限りは、お望みに任せて引受けます。」

とばかり、例の太ッ腹を見せた。

陸奥は、外交においては飽まで受動的的地位を取り、軍事においては常に機先を制せんとして、慘澹たる苦心を費したと、後に述べたほどであつて、この時、彼は、一方に文弱な伊藤、井上等を激勵し、他方に逸り男の武斷派を操縦し、漸く一旅團の兵と九隻の軍艦とを朝鮮に急派することに廟議を纏めるまでに漕ぎ付けた。

恰も好し、駐清兼駐韓公使大島圭介が賜暇歸朝中で東京に居つたので、陸奥は、彼に懇々と現在及び將來に處すべき方針を訓示し、京城へ急行すべく命じた。

大島は、軍艦八重山に搭乗し、松島、千代田の兩艦と共に、六月九日を以て仁川に到着した。仁川には、赤城、大和、筑紫以下の諸艦が先着してゐた。大島は、翌早朝、陸戦隊四百二十名の護衛の下に堂々と京城に乗り込んだ。越えて十二日、陸軍少將大島義昌の率ゐた混成旅團が、和歌浦丸から仁川に上陸し、その大部分が京城に駐屯することになつた。

清國は、内亂鎮定を名義としたが、日本は、我公使館、領事館及び居留民を保護するといふ名義であつた。これは内亂鎮定といふときは、主義上内政干渉の嫌ひがあるが、會つて日本公使館が、清韓兩兵の襲撃を受け、我官民が殺傷された前例に鑑み、その保護の爲めといへば、名實共に正しいからであつた。

四一 李鴻章の戰意

對韓問題について、特に開かれた緊急内閣會議の席上で、伊藤首相は先づ筆をとつて、我が政府の方針を紙片に書き付けた。

一 朝鮮の内亂は、日清兩國の軍隊共同して速かにこれを鎮壓すること。

二 内亂平定の後には、朝鮮の内政を改革するため、日清兩國より常設委員若干名を同國に派遣すること

伊藤は、これを読み上げて、閣員に語つた。陸奥の意見で、その附帶事項として、

三 若し清國が我が提議に應ぜざるときは、我國は、獨力を以て、内亂鎮壓及び内政改革の實行に當ること

といふ一條が加へられた。

閣員は、以上の方針を異議なく決定したので、直に明治天皇の御裁可を仰ぎ、我が駐韓及び駐清公使に電訓して、先方に通達せしめた。

六月二十八日に至り大島公使から左の電信が外務省に到着した。

「袁世凱は頻りに大言壯語を弄し、たとひ日清兩國開戦に及ぶとも、最後の勝利必ず清國に歸すべしと豪語し、なほ種々の蜚説を放つて日本を譏誣し、更に朝鮮を脅迫して、日本を去つて清國に就かしめんとして悪計奸策到らざる所なければ、この上は、日清兩國の間に衝突を起し、かれに痛撃を加へたる後にあらざれば、朝鮮の改革は到底實行の見込みなし。」

袁世凱が、かくまで頑強な態度をとつたのは、言ふまでもなく、本國との諒解があつたからである。

當時清國の實權を握つてゐた李鴻章は、曾て長髮賊を討伐して戦功を彰はして顯要の地位を贏ち得た人物であるから、自然、武斷主義に傾き、機會あらば日本に痛撃を加へ、永久に韓半島に容喙することのできぬほどに、その氣勢を挫かうと考へてゐた。

丁度その時分に、駐清露國公使カシニーが歸國の途次、天津で李鴻章に會見し、「日清開戦せば、そ

の結果如何」と尋ねたところ、李鴻章は泰然として、

「一二戦の後は、倭人必ず敗走するに極まつてゐる。」

と答へた。老獪なカシニーは、鵝蚌を争はせて、漁夫の利を得ようといふ底意があつた。

「それは結構、併し萬一貴國が不利の境地に陥ることもあらば、露國は必ず援助をしまぬであらう。」

李鴻章は、カシニーに激勵されていよく戦意を決し、義州方面より續々平壤に大兵を入れたが、なほ牙山の陸兵を増加するために英國運送船高陞號を借入れ、これに砲兵歩兵の將卒一千五百人を乗込ませ、軍艦操江をその護衛とし、なほ濟遠、廣乙兩艦を先發せしめた。

濟遠、廣乙は、折柄豊島沖を遊弋しつゝ、あつた我吉野、秋津洲、浪速の三艦とハタと衝突した。双方三千メートルの距離に近づいた頃、濟遠の砲口から俄然白煙が吐き出された。禮砲と思つてゐると實弾がわが艦上に飛び込んで來た。わが三艦は、是非に及ばぬとて砲火を開いた。

交戦一時間二十分にして、敵艦は遁け出した。濟遠は難を免れて威海衛に還ることができたが、廣乙は暗礁に上り上げて進退の自由を失つてしまつた。

これは、七月二十五日の早朝、七時から八時までの出來事であつたが、尋いで九時頃に至り、操江

と高陞號とが、この戦争を知らずにやつて来た。操江は日本軍艦を見て忽ち逃げようとしたが、秋津洲に追跡されて降服した。高陞號は、浪速艦長の命令で一たびは停船したが、乗組陸軍將校は我艦長の再三の勧告を斥けて頑として降服しないのみか、英人船長を抑制して船を運轉させないので、止むを得ず之を撃沈した。時に午後零時四十分。これが日清實戦の序幕であつた。越えて八月一日に至り、いよいよ宣戦の詔勅が煥發されたのである。

四二 國交斷絶と小村の豪膽

駐日清國公使汪鳳藻が出兵の通告を外務省に提出したのは、六月七日であつた。その翌日の八日には、三衛の清國兵が、早くも朝鮮の牙山に上陸した。形式から見れば、朝鮮に出兵する時は、互に知照すべしといふ天津條約を履行したやうであるが、事實は、出兵後の通告たること昭々として明かであつた。殊にその通告には、

「わが朝、屬邦を保護する舊例に依り」

といふ穩かならぬ文句があつた。

元來朝鮮が、支那のものか、日本のものか、將た獨立國かといふ疑問は、二千年來の懸案となつて

ゐた。併し明治十八年四月に、伊藤が天津に行つて、李鴻章と談判した結果、

- 一 従來韓國に駐屯せし兵士を撤去すること
- 二 軍事教練の爲めに兩國より教官を派せざること

三 將來事ありて兩國より兵を韓國に派遣せんとするときは互に行文知照すべきこと

と約定したので、日清兩國は、韓國に對し少くとも對等の地位にある事實が確定されたのである。それに清國政府は、列國との交渉上、常に韓國を獨立國と認めてゐたのである。その清國政府が、この時に至り、翻へつてこれを屬邦なりと公言するからには、その間に何か魂膽があるに相違ない。そこへ、我が政府から、日清共同して朝鮮を處置しようといふやうな提議を持ち込んだところで、先方がなんで受け付けるものか。當時の駐清代理公使小村壽太郎は、それを見透す位の目先はきいてゐた。もう平和手段では駄目だと、小村はあきらめてゐた。

併し飽まで東洋の平和を圖らうと熱中してゐた駐清英國公使オコンノルは、御苦勞にも自ら總理衙門大臣と小村との間に奔走し、日を期して兩者を會談させるまでに運んだ。

小村は、無駄とは知りながら、其期日に總理衙門に行つて見た。案の條、妥協どころか、劍もほろろな挨拶で、日本が朝鮮から撤兵した後でなければ、何等の交渉にも應ずることができぬと突つぱね

られた。

小村は歸りがけに、オコンノルを訪うて、右の顛末を語り、

「折角閣下の斡旋で妥協が成り立つものと思ひ、わざわざ總理衙門に参つて飛んだ侮辱を受けた。御好意だけは、謹んで感謝する。」

とやつたので、オコンノルは、頗る恐縮し、清國政府の背信に呆れた様子であつたが、小村に向ひ極めて重大な情報を洩らした。

「誠に〜お氣の毒——Very, very sorry——實は、内々聞いて見ると、昨今李鴻章は、露國公使カシニーの諒解を得て、平壤と牙山とに大兵を増派し、京城の日本兵を挾撃する計畫を廻らしてゐるさうだ。」

小村は、公使館に歸るとすぐに「清國に大規模の出兵計畫あり。この上時日を遷延せば、かれが衝中に陥らん。速かに開戦の用意あれ」といふ意味の急電を發し、併せて公使館引揚の訓電を求めた。その後幾日かたつたが、外務省から何の返電も來ない。小村は、館員を集めて、

「こんな事では、時機を逸してしまふ。よし、一番おれが戦争を始めてやる。」
と言ひつゝ、やがて公使館の國旗を下ろさせ、國交斷絶の通告を清國政府に投げ付けたまゝ、サツサ

と北京を引揚げた。その日は八月一日で、丁度日本政府が開戦を布告した日であつたが、通信の不規則な時分とて、小村はなんにも知らなかつた。

「訓令を待たずに、國交を斷絶した咎で、おれは嚴罰を蒙るかも知れない。併し國家は萬々歳だ。」と豪語した。併し、彼の長官たる陸奥は、元來が謀叛氣の男とて、小村が歸ると、その果斷を激賞し彼を連れて参内し、御前において、清國の事情を奏上させた。小村は得意になつて長舌舌を振るひ、さしも豪放の陸奥をさへハラ〜させた。陸奥は、たまりかねて、最早や御晝餐の時刻だとて、小村を御前から連れ出した。

小村の北京引揚げは、大膽といへば大膽、亂暴といへば亂暴に近い行動ではあつたが、それが結局怪我の功名となつたのである。

四三 小村の妻難

小村といふ男は、幸運と悲運との混成兒であつた。彼れは、米國留學から歸つて、一寸判事になつたが、それから、外務省の翻譯局長、駐清代理公使、外務次官、駐米、駐露、駐清公使、駐英大使、外務大臣たること二回、其の間、日英同盟、日露戦争、日韓併合の三大事件を遂行し、勳功によつて

一代で、男爵、子爵、伯爵、侯爵にまで歴進し、トシ／＼拍子に出世した。

此の公生涯の多福なるに引換へて、その家庭といつたら、ほかに比類のないほど悲惨なものであつた。

小村が、米國留學から歸つた時には、まだ二十五の壯年で、ハイカラ盛りであつた。間もなく花のやうな十七歳の美人を細君にもらつた。彼れは、心よりも顔の方を結婚の主要條件と心得たらしかつた。その見合さへ、ハイカラ式に芝居でやつたものだ。

細君は、その名をお町といひ、純粹な江戸子の家に生れた人で、高等教育を受け、瓜生久子（後の大將夫人）や津田梅子など、洋行する筈であつたが、運命の神は、彼の女を残して、小村の細君にしてしまつた。町子さんは、裁縫が嫌ひであつたが、芝居は、三度の御飯よりも好きであつた。子供の遊技にも芝居を教へ、畫本は、芝居物か役者の似顔に限り、新聞も芝居の記事だけに目を配る。何もかも芝居盡しであつた。欣一と文子とは、此の母と一緒に芝居の眞似ばかりして遊んだものだ。以上の事實は、當時小村の書生をしてゐた榎本卯平の話であるから、よもや間違ひはあるまい。

女の芝居道樂は、昔から珍らしい事ではないが、此のお町夫人、無類のやきもちやきと來てゐるのに、小村が極端な芝居嫌ひな上に、人一倍の女好きで、赤坂や新橋に入りびたるといふのであるから

始末が悪かつた。

趣味のまるで合はない細君に、顔さへ見せれば眞黒こけに焼かれるので、さすがの小村も居たゝまらなくなつて、遊び出したのだともいひ、小村が餘り遊ぶから、細君が焼き出したのだともいふ。小村が例の豪放ぶりを發揮して、貧乏を餘所に遊びあるき、細君に高利貸の申譯ばかりさせたのは、たしかによくあつたが、併し細君の焼き方も、人並はづれて猛烈なものであつた。

お町夫人は、いつも車夫に嚴命して、若し小村が待合に入つたら、すぐに注進せよと言ひ含めて置くのであるが、それだけでは安心ができないと見え、夜が更けるとおこそ頭巾で顔をつゝみ、自身で偵察に出かけたものだ。時々勘定書が來るので、小村の行く先きが太抵蜂龍と判つてゐた。或晩夫人がその門口で、ハタと車夫に出會つた。

「この野郎なぜ知らせない。」

と怒鳴つて、いきなり車夫の横面をなぐり、案内も請はずに、すぐに二階に上つて、座敷を探し廻ると、例の調子で小村が高笑ひをする聲が聞える。こゝだなとばかり、障子をガラリとあける。運わるく、小村が一人で若い美形を前に置いて、さも愉快さうに飲んでゐる。

之を見て忽ちクワツと逆上した夫人は、側にあつた火鉢を取るより早く、女を目がけて投げつけ

た。火鉢は、その頭の上を飛び越えて後ろの金屏風に當り、カン／＼おこつた火が灰と共に散亂する。間もなく金屏風が燃え出して黒煙が揚がる。小村は、屏風の焼けるのにも、細君の狂ひ騒ぐのにも一切目をくれないで、無言のまゝスツと座を立つたなり、姿を消してしまつた。これは實地を目撃した蜂龍の女將の話である。

四四 鬼大佐の夜襲

孔子でさへ、女子と小人とは養ひ難しといつた。小村が人にすぐれた器量も分別も持ちながら、細君ひとりをもてあまして、内を外に放浪生活にふけるべく餘儀なくされたのも、是非なき次第であつたのだらう。併しそれが、結局小村にとつて勿怪の幸ひとなり、彼をして廣い外交舞臺に、思ふまゝに飛躍して、思ひがけない功名手柄をなさしめる動機となつたのである。

おれが戦争をやつてやると、訓令を待たずに國旗をおろして、サツサと北京から引揚げた小村は雄心勃勃として抑へ難く、更にいづれにか活動の地を求めねば止まなかつた。恰もよし、日清戦争も終末に近づいた頃、遼東地方の人民を鎮撫柔する目的で、安東縣に民政廳が置かれることになつた。小村は、早速陸奥に頼んでその長官となつた。實は、民政廳の設置そのものからして、彼の献策で

出來たのであつた。

小村は、任地に行つてから、

「諸君は、王者の兵として内外に耻かしからぬ言行を守らねばならぬ。別けて、無理な徵發や非戦闘員の虐待などは、戦時公法の許さぬところであるから、きつと慎んでもらひたい。」と勸告して、始終軍人の横暴を戒めたものだ。

この小村の正當ではあるが餘計なお節介のやうな態度は、軍人の憤慨を買はずに濟む筈がなかつた。當時鬼大佐といはれた佐藤正は、あの生意氣な外務省の役人をなぐつてやれとて、或晩二三人の部下と共に、小村の宿舎にやつて來た。佐藤は、持たせて來た酒徳利をテーブルの上に載せて先づ、

「小村、サア飲め」と茶碗を差し付けながら、

「命がけの戦争をしてゐる横合から、行儀作法のお談義などを聞かされては、たまつたものぢやない。おれが民政長官をやるから、貴公戦争の方を引受けてはどうだ。」

と血相を變へて迫つた。小村は平氣なもので、顔の筋肉一つ動かさなかつた。

「一體、君たちは、酒を飲みに來たのか、喧嘩を賣りに來たのか。」

佐藤は、號令式の大聲で、

「両方で来た！」

と叫んだ。小村が何か癪に障ることでも云つたら最後、一人がラムプを消すのを合圖に、鐵拳の一齊射撃を浴びせようといふ手筈であつた。佐藤は、小村の口から出る次ぎの言葉を待ち構へる。すると小村は無言で座を立たうとする。

「こら、逃げるな。」

「馬鹿言へ。」

小村は、間もなく一本のウキスキーを持つて来て、手づから銘々の茶碗へなみく／＼とつきながら、「酒の方を先にしろ。」と叫んだ。

一同が、「よしッ」と飲み出す。小村が又チョコ／＼座を立つ。こら、逃げるな」といふと、同じやうに「馬鹿言へ」と答へながら、小村は二本目のウキスキーを持つて来た。佐藤は、それを日本酒並にガブ／＼飲んだからたまらない。みんなグデン／＼に酔つぱらつてしまつた。

その中に、一人が、小村の姿が見えぬぞといふ。ボーイに聞くともう寝たといふ。なるほど、雷のやうな鼾聲が聞える。佐藤等は小村の抜け目のない機智と、その敵前で熟睡する膽力とに舌を捲いて

空しく引揚けた。

小村は、四五日後に、當時の第一軍司令官山縣有朋に會つた時、笑ひ話に鬼大佐夜襲の一齣を語つた。すると小村のやうな性格の好きな山縣は、それは氣の毒だと、すぐに陸奥外相に打電し、小村を勅任として佐藤の上位たる少將格に進めるやうに勸告した。その後、佐藤はよく小村の言ふことを聽くようになつた。小村が、山縣系の人となつたのは、この同情と斡旋とを徳としたからである。また、第一軍の師團長桂太郎もこの時小村の人物に敬服した一人であつたが、後年桂と小村とは無二の親友となつた。これが小村の二度目の怪我の功名。

四五 支那列國に絶る

戦争をしたために、日本が文明國の列に加へられたといへば、如何にも皮肉に聞えるであらうが、如何せん、歴史は戦ひの強い國を文明國と呼ぶことに極めてゐる。日清戦争の始めには、鼠と象の喧嘩など、嘲つた國々も、平壤に、金州に、旅順に、黄海に、日本の連戦連勝を見るに及んでは、案外な日本の武勇に驚嘆せざるを得なくなつた。

駐英代理公使内田康哉の電報には、

「當國の輿論は、一齊に日本の戦勝に讃辭を呈し、タイムスの如きは、吾等英人は今後日本を以て東方における一大活勢力としてこれを尊重し、共同の利害關係を助長するに努めざるべからずといひ、ベルメル・ガゼットは、嘗て英國は日本を教導したりしが、今は日本が英國を教導すべき時節到來せりと論じた。」

とあり、また駐佛公使曾爾荒助の電報にも、

「佛人の感想を代表する一新聞曰く、美しき花ある家の門前には常に翫賞者市を爲す。今や日本は、清國に對して偉大なる戦勝を博したるが、世界に對してそれよりも一層偉大なる勝利を博し得たり。かくて今後、日本は不羈獨立の立場にあつて、その爲さんと欲する所をなすを得べく、任意に敵國の土地を略取するを得べく、要するに、他の強大國と同様の行動をとるべき地位を贏ち得たり。」

とある。日本は一躍して世界の強國となり、東洋の覇主となつたのである。

最早狂瀾を既倒に廻へす見込も盡き果てた清國の方では、責めて城下の盟だけは免れようと思つてか、頻に列國に哀訴嘆願して仲裁を求め始めた。

この時の駐清米國公使デンビーの國務長官宛報告の中に、

「支那の現状は悲惨を極む。兵士なく、武器なく、糧食なく、希望もなし。政府は如何なる價にも平和を買はんとし、昨日は米國に頼み、今日は五箇國にすがる。憐れむべし。」

とあるは、よくこの間の消息を傳へたものである。

英國が先づ聯合仲裁案を出したが、何か心ありけな露、獨兩國の反對で物にならなかつた。結局公平無私の立場にある米國が、獨力で仲裁を試みることになつた。

開戦の歳の十二月二十六日に、駐日米國公使ダンが、陸奥を外務省に訪うて、

「戦争の勝負も大抵見えた。どうであらう、若し支那が講和を申込むとしたらば、貴國は之を承諾せられようか。」

と訊ねた。陸奥が、

「戦争は素より好むところでないから、支那が誠意を以て講和を望むならば、我國は喜んでこれに應ずる。」

と答へると、ダンは、さもありませんといった様子で、その使命をあかした。

「實は、清國政府は講和委員を日本に派遣することに決したのである。就ては、日本政府に於て、成るべく、上海附近に會合の場所を定められたく、なほ休戦の期日も極められたい。」

陸奥は、かねてこの事情を探知してゐたので、即答するだけの用意がある。
「上海附近には適當な會合所がない。大本營所在地の廣島ならば、いつでも宜しい。尤も休戦問題は、談判の上でなければ、豫め明言することはできぬ。」
ダンは、然らばその通り駐清自國公使に申送らうと云つて歸つた。

四六 最初の講和條件

清國の講和使節はいよく、翌明治廿八年一月中旬に來ることになつたので、伊藤、陸奥兩人は、一月十一日を以て東京を出發して廣島に赴いた。さて彼等は如何なる講和條件を携へて行つたか、又當時の國民は、如何なる程度の抱負を持つてゐたか。

新聞の議論は、清國が自ら降伏して和議を求めざる迄は、戰爭を止めてはならぬ。而して永久に清國の反抗心を抑制する爲めに、盛京省と臺灣とを取り、償金は三億圓以上とするがよいといふに略ほ一致し、改進及び革新兩黨は、戦後清國が自暴自棄となつて主權を抛棄する場合には、四百餘州を分割する覺悟がなければならぬ。その時は、山東、江蘇、福建、廣東の四省を我が領有とせよといひ、又自由黨は、吉林、盛京、黑龍の三省と臺灣とを割取せよといひ、いづれも鼻息がなかく荒かつた。

駐獨公使青木周藏は、例に依つて逆に外務大臣に訓令する積りで講和條件を電報して來た。それによると、盛京省、吉林省及び直隸省の各一部を取り、償金は英貨一億ポンドとするを可とし、清國の存亡に影響しない條件ならば、列國に異議なかるべしとあつた。これは、多分氣の知れぬカイゼルの詭辯に乗せられたのであらう。一寸氣の利いた意見を打電したのは駐露公使西德二郎であつた。曰く遼東半島若しくは朝鮮に接近する地方を公然割取せば、必ず露國の反對を受ける恐れがあるから先づ清國が容易に皆済することの出來ぬほど巨額の償金を要求し、その擔保といふ名儀でこれ等の地方を占領するを得策とすと。

伊藤、陸奥等は、講和條件を案出するに當り、これ等の諸説をも參酌したに違ひない。

一月廿七日に、講和條約案を決定するために、大本營において御前會議が開かれた。出席員は、伊藤、陸奥の外に、彰仁親王、山縣陸相、西郷海相、樺山海軍々令部長、川上參謀次長であつた。陸奥は、やがて講和條約案の要領を奏聞すべく起立した。

「本條約案は、大體五項に分つてあります。即ち

- 一 清國に於て、朝鮮の完全無缺なる獨立國たることを確認すること
- 二 清國は、戦敗の結果として、左の土地を日本に讓與すること